

362.03

H 358k



* 0033935000 *

0033935-000

362.03-H358k

古代社会史

早川二郎・著

三笠書房

1936

AGB

SANSEIDO
KANDA TOKYO



唯物論全書

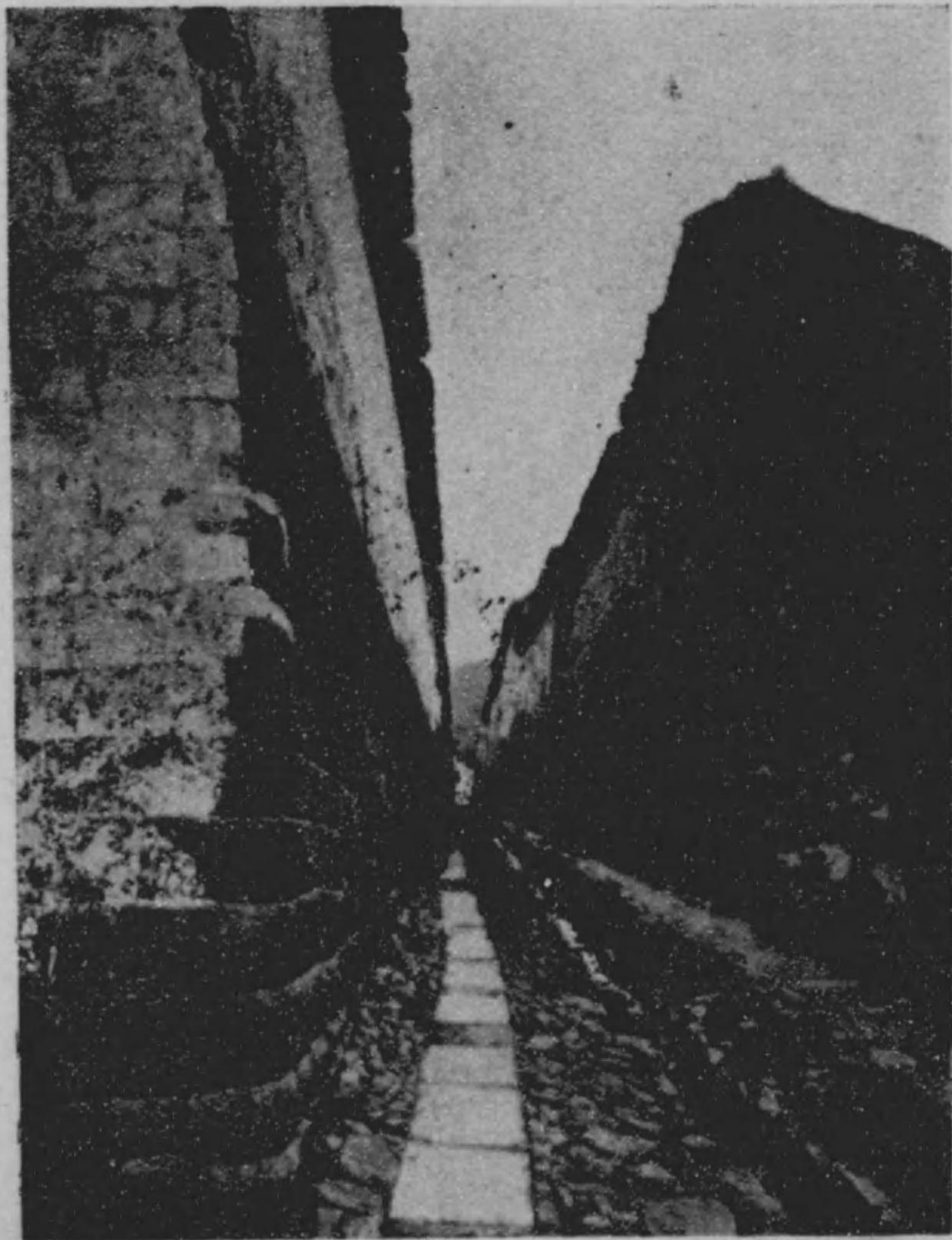
古代社會史

早川二郎著

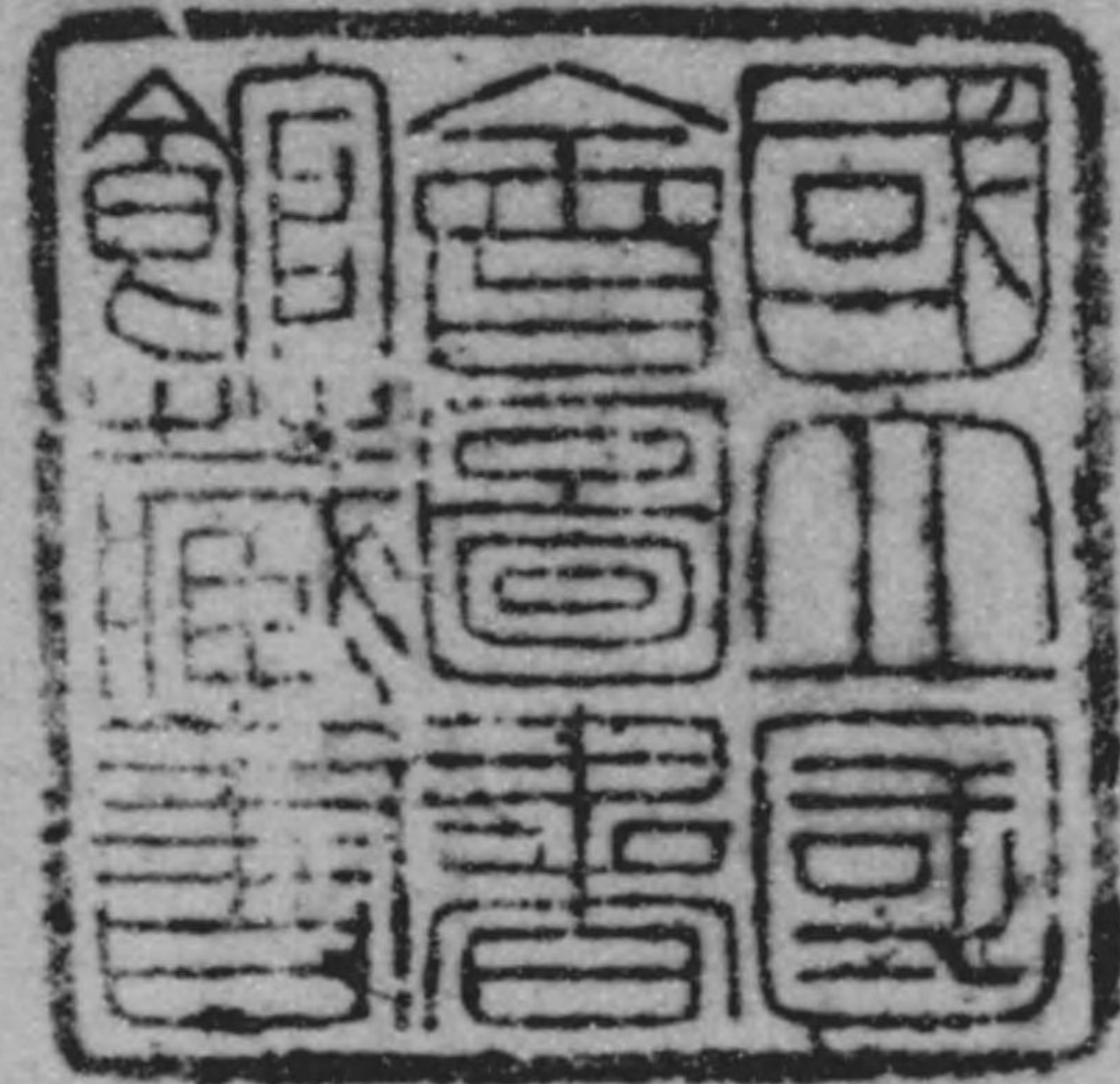
三笠書房



インカ帝國 Paehacámac の街路・ペルーの首府リマの南二十五哩の地にあり、長さ三哩、幅二哩。發掘の結果現在の市街は數次に亙る廢墟の上に建設されてゐた。



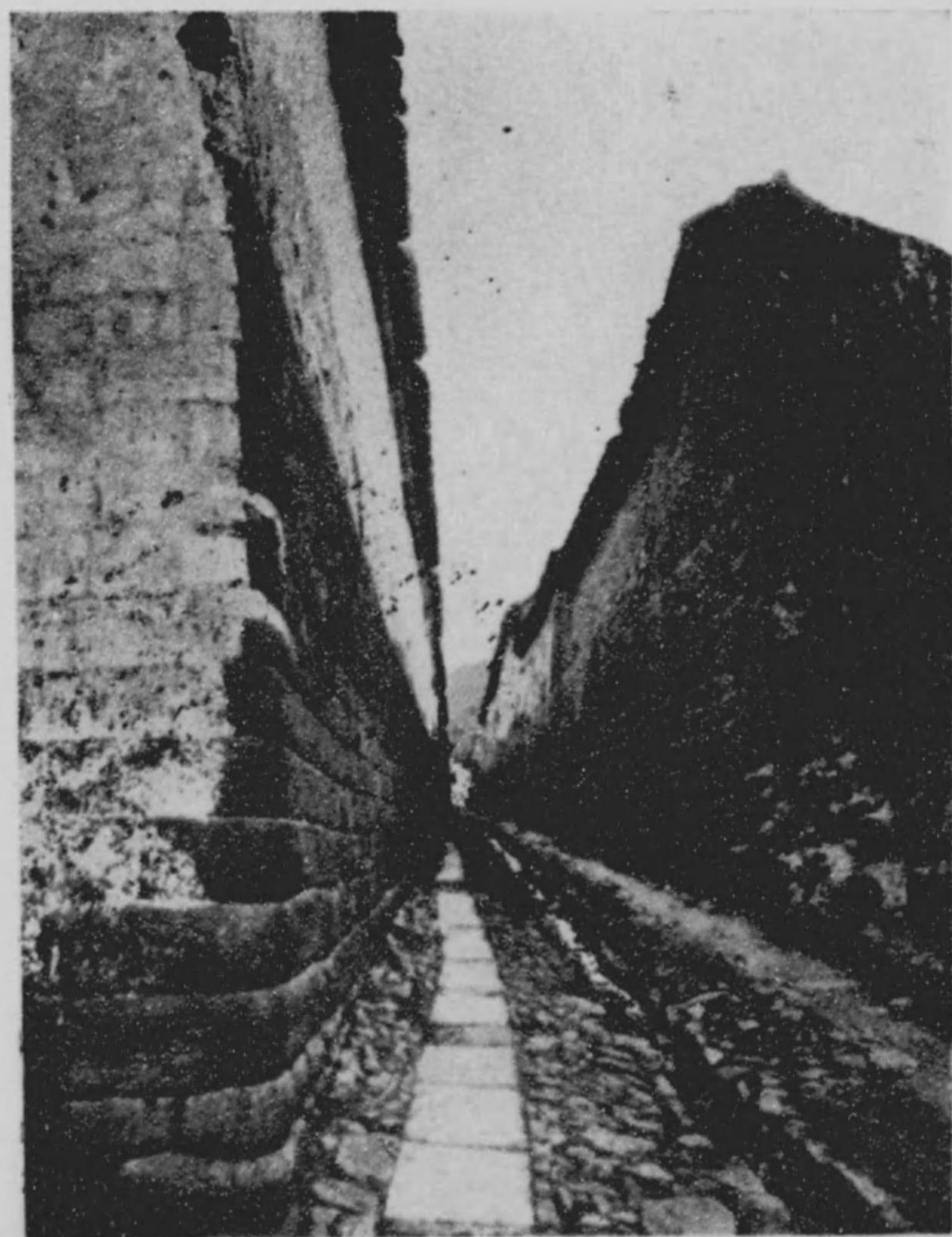
インカ帝國の首府クスコ市の街路(右圖)インカ帝國は銅器時代のアメリカインデアンが建設したものであつて、一種の「貢納制」國家であつた。宗教・建築様式等の類似からエジプト・バビロニア・支那・日本等の古代文明に結びつける「學者」があるが、いづれも取るに足りぬ臆説である。むしろ社會經濟は土臺の一致が文化の類似を生んだと考ふべきである。



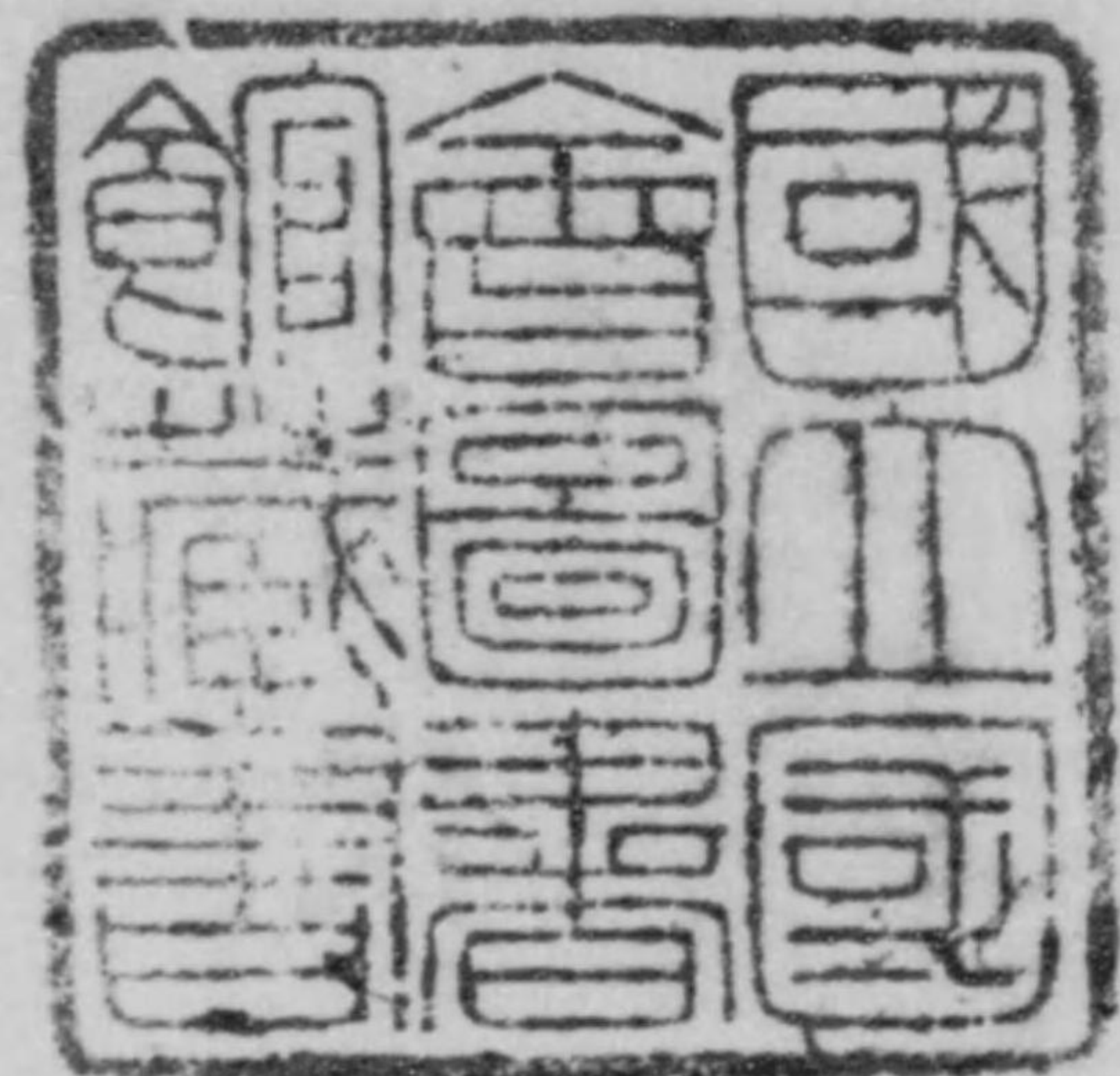
262908



インカ帝國 Pachacámac の街路・ペルーの首府リマの南二十五哩の地にあり、長さ三哩、幅二哩。發掘の結果現在の市街は數次に亙る廢墟の上に建設されてゐた。



インカ帝國の首府クスコ市の街路(右圖)インカ帝國は銅器時代のアメリカインデアンが建設したものであつて、一種の「貢納制」國家であつた。宗教・建築様式等の類似からエジプト・バビロニア・支那・日本等の古代文明に結びつける「學者」があるが、いづれも取るに足りぬ臆説である。むしろ社會經濟は土俗の一致が文化の類似を生んだと考ふべきである。



262908

362.03H358R

序文

唯物論全書中の「古代社會史」の執筆を引受けて筆者はあれこれと種々プランをたてて見た。本書には唯物論全書中の一冊としての任務、あらゆる封建的觀念論的歴史學とのみならず、機械的唯物論——それは自然史について比較的唯物論的であるが、社會史については全く正反對である——のそれとも鬭争して正しき古代社會史を樹立する任務が課せられてゐると考へる。併し私にとつてこの任務を果す能力と資格があるかどうか？ 恐らくないことを自覺する。それで幾度か躊躇を重ねたわけであるが、この方面の研鑽が現在比較的遅れてゐる故、私の如きもの意見も何らかの役にたとうと云ふ點と、この仕事を引受けることが社會の大きな歴史的流れに合流し、その一滴となる所以であつて私にとつては身に餘る光榮であり、愉快であると云ふ點から遂に執筆を引受けることにした。

併し本書はあまり大なる頁數をとることのできない關係上普通舊史家の採つてゐるやうな事件史の體裁をとることはできなかつた。古代社會における最も必要な併しありふれた史實を説く——それがその歴史學の變革の素地となる——だけで既に全頁數が埋り、新意見を吐くやうな頁の餘地は殆ど失くなつて了ひ、結局この方面における先學の比較的最良のもの、の糟粕を嘗めることに終つて了ひさうである。そこで私は「古代社會史」なる標題のもとに一つの表式的著書を、謂はば「古代史の方法論」と云つたやうな著書を書かうと考へて見た。昔から「山椒は粒でも」と云ふ諺があるが、急所を狙へば比較的の小冊子でもよく大冊の書物の果す役割に負けないものである。古代史においてかかる急所は云ふまでもなくその方法論的方面であるから、本書ではそれを中心とし、古代史を研鑽するに際しての注意點を列記すると云ふ様な體裁を採つた。讀者諸兄は本書に盛られた筆者の思想を訂正、發展させつつ、古代史に關する比較的良書をひもとくことによつて容易に唯物論的な古代社會史を自己のものとするであらう。

併し私自身にとつては本書は日本古代史研究の準備としてヨリ多くの意義を持つもので

ある。日本古代の獨特な社會經濟的構成は諸外國の同時代のものとの比較によつて一層明瞭となる。尤も世界史を日本歴史の研究・理解の補助學として見ると云ふことは世界史學のほんの一小部門ではあらう。併し我々日本人にとつては甚だ重要な課題である。然るに世界史は單に世界史一般として見るか、特に日本史學の補助學として見るかに従つて異つた著眼點を生ずる。筆者はこの岐路にたつた時にはいつでも後者の道を選んだ。何故なら日本史學のつくり變へさへ未完成な現在ではむしろ後者こそ當面の必要であらうと考へたからである。

最後に斷つて置きたいのは本書は決して筆者の抱負を大いに社會に問はんとするやうな書物ではなく筆者の暫定的な意見をも發表を許されて我々と同じ道を歩んでゐる諸兄の參考の資としたところから生れたものであると云ふことである。この様な態度で著書を公けにすることは恐らく一部人士の批難に値するであらう。自己の完成した意見以外は發表せず、大いに己れの「學的良心」を自負する人々にとつてこれは氣持のよいことではない。併し學問と云ふものは如何に天才の手になる場合でも個人とか、グループの力よりも、む

しろ大きな大衆的鬭論の間からこそ著しく發展するものである。そこで我々はこの大衆的鬭論において沈黙の後最後の斷を下す一人たるよりも、鬭論参加者の一人たらんと欲するものである。即ちピラミットの頂上の一石よりもがつしりと組み合つて外部の何人からも取外されない中間の一石たらんと欲するものである。(尤も「學的良心」の所有者の多くは教壇で自己の暫定意見を密賣する方法を知つてゐる。)我々は、己れの意見を廣く自由に發表し、大衆の批判の前に置き、讀者諸兄と腕を組んで斯學の發展に努力し得る身に大いに光榮と考へてゐる。

一九三六年・四・二十七日

著 者

目次

序文	1
第一章 問題の提起	1
第一節 「古代社會」の範圍	1
第二節 「古代社會史」は何を問題とするか	9
第二章 ギリシヤ ローマ社會論	17
第一節 ギリシヤ史の素描	17
第二節 ローマ史の素描	34
第三節 奴隸所有者の社會經濟的構成と奴隸制度	47

第四節 奴隷所有者の社會構成における階級闘争 八八

第五節 ギリシヤ・ローマ社會の没落 九五

第三章 古代東洋社會論 (一) 一〇一

第一節 所謂「アジア的生產様式」の理論 一〇一

第二節 マルクス・エンゲルスは如何なるものを指して「アジア的
生產様式」と云つたか? 一〇八

第三節 社會經濟的構成としての「貢納制」 一三三

第四節 「アジア的封建制」について 一四四

第四章 古代東洋社會論 (二) 一六六

第一節 古代東洋社會の都市と文化 一六六

第二節 「アジア的生產様式」と灌漑 一八四

第三節 「アジア社會」の兵制 一九四

第四節 「アジア社會」の階級闘争 二〇五

第五章 古代東洋社會論 (三) 二二八

第一節 古代エジプト 二二八

第二節 バビロニア 二三四

第三節 古代インド 二三八

第六章 古代支那社會論 二三四

第一節 西周時代の社會構成 二三四

A 技術的段階 二三五

B 所謂「周代封建主義」の本質 二三八

C 奴隷制度 二四九

D 若干の結び 二六四

第二節 西周社會の起源 二六七

第三節 春秋戰國時代の社會構成 二七四

—— 周代社會の發展 ——

第一章 問題の提起

節 「古代社會」の範圍



我々は「古代社會」を研究しようとする。「古代社會」を研究するには古代社會なるテ、何を意味するかを確定しなくてはならぬ。研究する對象が曖昧では暗中模索となる。然るに此處に一つの困難がある。「古代社會」と云ふと一見甚だ明瞭なやうであるが、よく見てみるとそれは決してしかく明瞭ではない。讀んで字の如きものならば「古代」であるが、「古代」とは一體何であるか？ 日本人や西ヨーロッパ人にとっては二千年前は立派な「古代」であり、否むしろそれ以前であらうが支那人やインド人の如く古い歴史を持つ民族にとつてはそれはむしろ「中世」であるかも知れない。支那において二千年前は所謂前漢朝と後漢朝との境目になり、少くともそれを「古代」とするには問題があ

る。スラヴ人にとつてはこれはむしろ「歴史のない」時代である。スラヴ人が歴史の舞臺に登場するのは紀元六世紀頃からで、そのビザンチン領への來寇が記録されてゐるのであるが、彼らは尙ほ氏族制度のもとにあつたと考へられてゐる。公的記録においても、事實上にもその「國家成立」は九世紀のことである。斯やうに問題を年代をもつて限定することは全く無意味である。然らば如何なる方法を探るべきであらうか？ 少くとも次のやうに云ひ得る。「古代」なる語は個々の民族あるひは民族グループに對して個別に、その社會構成史的「古さ」に従つて設定されなければならない。然らばまた、この「社會構成史的古さ」とは如何なるものを意味するのであるか？ 或人々の主張する如く「古代社會」とは奴隸所有者的社會構成時代を意味し、結局ギリシヤ||ローマ社會を指すのであらうか？ 私はこれに賛成することができない、何故ならもし「古代社會」なる用語に存在の價值ありとすれば、既に立派な術語を持つ「奴隸所有者的社會」、「古典的古代社會」の別語としては無意味であるから。またある人々の主張する如く文明の曙光期までに至る全歴史を意味するものであらうか？ 私はこれにも賛成できない、何故と云ふのに、もしそれ

ならば何を苦しんで立派な術語のある「前階級社會」、「氏族共產社會」、「太古的社會構成」等々をヨリ曖昧な「古代社會」なる語で置換へねばならぬのであるか？ さらにまた次のやうにも主張される。人類史の遠く測り知れない太古時代から大體中世の初期までを指して「古代社會」と云ふのである。この主張には少くとも一理ある。「古代社會」を斯く稱することに少くとも大した背理はない。併し私はこれにも賛成しかねる。何故か？ 何故ならそれは必要のないことだからである。適確な歴史的時代區分を單に曖昧化するより以上の役割を果し得ないからである。人類史の遠く測り知れない太古時代から中世初期までに至る歴史と云ふが如きものに一貫した、共通の問題があるだらうか？ 勿論、問題はある、併しそれは「生産諸力と生産諸關係」、「基礎建築と上層建築」と云ふが如き唯物史觀の極く一般的な課題に過ぎない、そしてこの課題の解明のためにはむしろ人間の發生から現代までに至る人類史一般が材料とされるべきであつて、かかる「區切り」を行ふべき何らの理由も發見できない。資本主義前史の研究ならば中世封建主義をも包含すべきであり、階級社會前史ならば「奴隸所有者的社會」以下を切捨てるべきである。いづれにして

もかかる時代範囲を研究対象として取上げるとは害あつて益がない。

私は「古代社會」と云ふ語をもつて次のやうな時代範囲を意味したい。「古代社會」には少くとも中世Ⅱ封建主義社會と近代有産者社會とは含まない。同時に原則としては原始氏族制社會も含まない。従つて問題になるのは奴隸所有者的古典的古代と見なされるギリシャⅡローマ社會と今なほその社會構成史的歸屬が論争されてゐる古代東洋社會である。而してこの古代東洋社會が構成史的に所屬不明であると云ふ意味で、その限りではそれが歸屬するやに疑はるる場合、原始氏族制社會と中世封建主義社會にも觸れなければならぬであらう。一部西洋史家はかかる定義に賛しつつもなほ「古代史は地中海を中心とする諸國の關係を叙述する」、インド、支那日本もまた古代の文明國であつた。併しこの簡單なる研究においてはこれを考慮する必要はない、そは此等の諸國は吾人の屬する世界の進歩と隔絶してゐるからである。」¹ などと云つてゐるが、西洋古代史のためにはとも角、世界古代史としてはかかる「白人萬能主義」こそ「考慮する必要はない。」さてこの「區分」は決して科學的なものではなく便宜的なものである。併しこれは止むを得ざるに出づる「便

宜的」である。次節でも云ふことになるが、「古代」なる用語そのものが科學的用語ではないのである。科學的用語としては社會經濟的構成及びその諸段階を意味する用語のみが採らるべきで「古代」の如き曖昧な用語の許さるべき餘地はない。只古代東洋社會の社會構成史的所屬が曖昧であると云ふ事實のみがこの用語の存在を一時的に、便宜的に許容するのである。併しこの「便宜」は甚だ理由のある「便宜」である。

¹ Botsford, A History of the Ancient world. 邦譯版、三、四頁

何故か？

「古代東洋社會」の社會構成史的所屬が現在なほ不明であるとしても依然として問題は古典的古代を廻つて提起せられてゐる。例へばコヴリヨフの如きは「『アジア的生産様式』はマルクスおよびエンゲルスにおいて二つの形で現はれてゐる、といふ結論が生ずる。上古の東洋、即ち奴隸所有者的東洋にとつてはこれは奴隸制の特殊な變態、即ち灌漑耕作の國々における奴隸所有者的構成の具體的形態である。中世の東洋にとつては、これは同一の國々における封建主義の變態である。」¹ と云つて直接それを古典的古代の一つの場

合であるを見、プレハーフの如きは「古典的社會は氏族組織に代つて現はれたものであり、そして此の氏族組織はアジア的社會秩序の形式に對してもまた先行したのであつた。これら二つの經濟的發展の形式はいづれも、氏族組織の胎内における生産諸力の發達の結果として現はれたものであり、此の發達は最後には不可避的に氏族組織の解體を惹起せざるを得なかつたのである。そしてこれら二つの構成は互ひに著るしく相違してゐるのだが、その理由は、それらの最も重要な特異點が地理的諸關係の作用のもとに形成されたといふ點にある」、²と云つて、それらを各々別個の社會經濟的構成として見つても、なほ、社會構成の繼起的發生において相對應すべき位置にあるものと見てゐる。この思想はその後マジャール等によつても受繼がれ、盛に唱導されたことは周知の如くである。尤もコヴァリヨフの如きも、前掲新見解に到達する以前には、マルクスの「大づかみには、アジア的・古代的・封建的及び近代ブルジョア的の生産諸様式が社會經濟的構成の前進的諸紀元として區別される」³の文字を文字通り解する方に傾いてゐて、「我々は二つの前資本主義的構成（奴隸所有者的構成と封建主義——引用者）でなく、三つのそれ（前の二つに「アジア的生產

様式」を加へた——引用者）を得るであらう」⁴と云つてゐる。この主張の賛成者は案外多いのであつて、ローザ・ルクセムブルグなどでさへ「勞働する者がその生産手段を共有してゐるか、それとも個人が各自に所有してゐるか、それとも個人がそれを所有してゐないか、それとも勞働する人間が生産手段と一緒にそれ自身生産手段として勞働しない人間の所有物となつてゐるか、不自由民として生産手段に縛りつけられてゐるか、それとも生産手段を所有せざる自由人として自分の勞働力を生産手段として賣ることを餘儀なくしてゐるか——その各々の場合によつてあるひは共同體的生産形態が生じ、あるひは小農的および手工業的生產形態が生じ、あるひは奴隸經濟、あるひは農奴制度の上になつ、莊民經濟、あるひは賃銀制度を伴へる資本主義經濟が生ずる。そしてこれらの經濟狀態の各々は、それぞれ獨特の様式の分業、生産物の分配、交換、社會的、法制的、精神的生活を伴つてゐるのである」と記し、この種の意見ではなかつたかと思はれるのである。而して「東洋社會」に對してこの見解をとるならば、それを奴隸所有者的社會經濟的構成との關聯のもとに扱ふことは必ずしも義務的ではないことになるが、それにしてもなほ、「アジア的生產

様式一を原始共産主義社會そのものと見る見解や、アジアにおける特有な封建主義と見る見解などと共にそれは奴隸所有者的社會經濟構成のあるひは前史として、あるひは後史として取上げられてゐる。特にそれを特有な、奴隸所有者的社會構成に先行する一社會構成として見るにしても、英雄時代のギリシヤの如きをまでそれに比定するならば古典的古代との關聯のもとにそれを検討することは絶對必要になつてくる。

- 1 コヴァリヨフ、奴隸所有者的構成の若干の問題について、論集、古代社會論、六八——六九頁
- 2 プレハーノフ、マルクス主義の根本問題、白揚社版、七七頁
- 3 マルクス、經濟學批判序文、マルクス、エンゲルス全集、第七卷、四一六頁
- 4 拙譯、「アジア的生產様式について」におけるコヴァリヨフの討論、同書、一三七頁
- 5 ローザ・ルクセムブルグ、經濟學序論、邦譯、二一八——一九頁

そのほか、「古代社會」史なる形でギリシヤ||ローマの古典的古代と古代東洋社會とを一括として問題とすることは、この古代東洋社會が支那・日本等の「古代」に關係する限り、西ヨーロッパ史の淵源と東洋史の淵源とを比較對照して研究することになるので、兩

者の異同が明らかになり、また所謂西洋思想とか東洋思想とか云ふものも多くは源をこの時代に發するのでそれらの「性格」の認識にも役立つ點が少なくないと豫想され、我々東洋人にとつては一入興味が深いのである。

筆者はこの小著で、「古代社會」の範圍を以上のやうに限定し、かく限定する意義を以上のやうに見るのである。

第二節 「古代社會史」は何を問題とするか？

「古代社會」史は何を問題としなければならぬであらうか？

まず最初に「古代社會」の範圍がさきに問題になつたやうに曖昧だと云ふことが既に古代社會史が何を問題にするかを決してゐると思ふ。何故「古代社會」の範圍が曖昧だつたのであらうか？ それは「古代社會」なる用語が何ら科學的な用語でなかつたからである。然らば何故かかる科學的ならざる用語を我々は用ひなければならなかつたのであらうか？ それは「古代社會」に含まれる「古代東洋社會」なるものの社會構成史的歸屬が不明で、

それを如何なる明瞭な、確然たる社會經濟的構成の歴史としても提起し得ぬからである。然るに我々の歴史認識の出発點は當該時代の社會經濟的構成の何たるかの把握でなければならぬ。

これについてレーニンは次のやうに云つてゐる。

「人類の歴史のこれらの大きな時期の各々——奴隸所有者的、農奴的及び資本主義的——は數十、數百世紀を包括し、夥しい政治的諸形態、多種多様な政治學說、意見、××を示してゐる。——そして特に有産者學者及び政治家の政治、哲學その他の學說と結びついたこの凡べての極端な複雑さと甚しい多様性を辯別することを得るのは、社會のこの階級分裂、階級支配の形態變化を基本的な導きの絲としてかたく握り、且つこの見地から經濟、政治、精神、宗教、等の如きあらゆる社會的諸問題を辯別する場合のみである。」¹

¹ レーニン、新しい論文と手紙（原文）、九四頁

實例を擧げてこれを説明して見よう。

我々は古代支那の「商業」について研究しようと思つてゐる。まづ、「商業」そのものが所興の社會の構成と無關係には提起できない。それは一定の生産様式と結びついて始めて生れ、發展し、隆盛に達するものであり、また生産様式の如何に従つて異なる逆影響をその土臺に與へるものである（資本論、三卷、二十章參照）併し單にその研究の資料についても次のことが云へる。文献的史料として、詩經・尙書・易經・竹書紀年・周禮があるとする。併し我々はこの史料に信用することができない。尙書のうち古文尙書、それから竹書紀年はその文體の研究、逸文等との比較によつて偽書たることが充分明らかであるとすればまづ問題はないとして周禮は周初の法制の傳説化したものを集成したと云はれるが、この傳説化による周初の制度の歪曲は如何なる方向に行はれ、如何なる程度にまで行はれたらうか？ また周禮の如く傳説化したものが後に至つて記されたものでなく、後人の手によつて着色變色せしめられる點が比較的少いと考へられる詩經・尙書・易經にしても、既にそれが文献として記録された當時において必ずしも事件の真相を傳へてゐはしまいと思はれる。このことは極く卑近な例をとつて云へば、讀者諸氏の身邊に起つた出來事が新聞紙に報導されてゐた場合を想起して見れば充分である。この報導は事件の真相を大體に

おいて傳へてゐるがそのままに傳へたことは決してない。而して新聞記事なるものが型の如く一定方向に事件を歪曲してゐることを思へば詩經尙書の文字もまた型の如く一定方向に當時の社會の眞相を歪曲して傳へてゐると考へることはできないであらうか？ 然らばこの「一定方向」とは如何なるものであり、その深さはどの程度であらうか？ そこで即ち、次のやうに云はなければならぬ。支那の古代商業史を研究するために、詩・書・易その他の史料を利用せんとする時、まずその史料そのものが、たとへ偽書や傳説の集成にあらず、正真正銘の記録であるとしても、その記録の際の歪曲の方向・深さを見る必要がある。然らばこの「歪曲の方向」「深さ」は何が決定するか？

ここで我々はマルクスの次のテーゼを想起しなければならない。

「人々はその生活の社會的生産において、特定の、必然的な、彼等の意志に依存せざる諸關係を結び、この生産諸關係は彼らの物質的生産諸力の特定の發展段階に應當するものである。これらの生産諸關係の總體は社會の經濟的構造、即ち實在的基礎——この基礎の上に法律及び政治の上層建築が聳え立ち、又この基礎に特定の社會的諸形態が對應する——

—を形づくつてゐる。物質的生活の生産様式は社會的の、政治的の、及び精神的の生活過程一般を制約する。」¹

1 マルクス、經濟學批判序文、マルクス・エンゲルス全集、第七卷、四一五頁

即ち我々がこのテーゼを採用する限り、一定時代の精神的所産である詩・書・易はその時代の生産様式によつて制約されてゐること、従つてその「歪曲化」の方向と深さも結局はこの生産様式の命ずる方向に、その必要とするだけの深さにおいてなされてゐると云はなければならぬ。かう見てくると周代の傳説化された法制の後代における集成化する周禮の文献的價値の規定も容易になる。周禮は漢代に編纂されたものだと言ふ推定が正しいとすれば、問題は周代と漢代との社會構成の異同によつて決せらるべきものである。

かくて問題は次のやうになる。周代の商業史の如きものを研究しようと思つても結局出發點は當該社會の生産様式、社會經濟的構成の如何と云ふことになる。この點を明らかにせずして問題に入ることとは丁度地圖を持たないで山に入るやうなものである。

此處に一つの困難らしいものがある。周代の商業史の研究の出發點がその文献的史料の

價値の設定であり、その設定がまた當代の社會經濟的構成の設定に出發するとすれば、かかる社會經濟的構成の設定のために如何なる史料があるだらうか？ 矢張り、文献？ 然らば此處に一つの循環論法が得られはしないか？ 文献の價値設定のために社會構成を研究し、その社會構成の設定のためにその文献を用ひる。併しこの議論は唯物辯證法的認識論への無智から起る。我々の認識なるものは我々の持つ相對的眞理から一步一步築かれて行く絶對的眞理である。而して非常に初步的な相對的眞理としては必ずしも科學が必要でなく「常識」で間に合ふやうに、歴史的認識の最初の出發に際し文献的史料の「歪曲の方向及び深さ」の社會構成的見地からの検討と云ふが如き大ダンピラは要らない。我々は「ナポレオンが一八二一年の五月五日に死んだ」と云ふ記録の持つ信實性の程度で充分間に合ふ。併しこの場合にも當該時代が一般的に云つて階級社會であるか否か、また資本主義社會であるかそれ以前の社會であるか位をでも知つてゐることは知らないには勝る。何故なら最も自由主義的な資本主義社會では喪を秘すると云ふやうな習慣は割合に少いが、コチコチの封建社會ではそれが普通のことだからである。従つて我々の主張は一層正確に云へ

ば、兎もあれ、歴史認識の最初の段階はあらゆる確實らしき資料をもつてする當該社會の社會經濟的構成の設定であると云ふことになる。そして我々はこれから出發して所與の社會の諸現象を研鑽し、それによつて當該社會の社會經濟的構成の把握が一層正確化され、さらにこの正確化された認識を出發點として所與の社會の諸事象の一層正確な認識を得る。従つて我々は此處にその社會構成史的歸屬の不明な「古代東洋社會」なるものを持つのであるから當面我々の全努力はその社會經濟的構成の如何と云ふ問題に捧げられなければならぬ。これ 第一の、當面最も主要なテーマである。

第二、第三のテーマは既に一旦その社會經濟的構成が明らかになつた後の問題である。我々は「古代東洋社會」の社會經濟的構成を他の社會、ギリシヤ・ローマ、中世のヨーロッパまた未開時代の社會構成等と比較することによつて後者の意義、内容を一層正確に把握することができる。さらに所與の社會の生産様式を知り、そこから出發してその社會の諸事象の解明を正確に行ふことができる。最後に結局、これらの諸事象の一つなのであるが、所謂西歐思想と云ひ東洋思想と云ひ、いづれもかかる「古代」に淵源を有するものが多く、

然もそれらは今なほ我々の生活に大きな力を持つてゐるのであるから、かかる方面の研鑽に努力が加へられなければならない。1

1 我々は本書で最後のテーマを除いた諸テーマを一應取上げたつもりであるが、本書の頁数の關係、然も問題の重要性よりしてこの最後のテーマを取上げることができなかつた。併し近き將來において必ずこのテーマに向つての著者の努力の跡を發表できるやうにしたいと思つてゐる。

第二章 ギリシヤ—ローマ社會論

第一節 ギリシヤ史の素描

ギリシヤの最古文化は所謂エーゲ文化である。これは勿論文献的記録などに全く據ることのできない（クレタの遺跡に文字が発見されてゐるが未だ解讀できない）、ギリシヤ人の記憶にさへ残つてゐない文化でその発見は主として一八七二年以降に於ける Schliemann の發掘に據り、只エジプト文化との關係において始めてその年代を紀元前二〇〇〇—一五〇〇年（最盛時）と比定される。恐らくその文化の擔當者はギリシヤ人とは人種を異にしたらうと云はれ、その發端を紀元前三五〇〇年にまで溯らすことができ、そこではなほ全く金屬の使用を知らず、石器、手づくねの土器、圓形の小屋に住み、村落を形成してゐた。然るにその後土器製作に進歩の跡が認められ、銅器青銅器が用ひられ、文字ができ、當時

既に開化の域に達してゐたエジプトとの間に活潑な交通關係が示される。我々はこの文化の最盛時にクレタ島に發掘されたクノソス及びフェスタスの二大宮殿を持つ。1この宮殿は庭園・長き廻廊・多くの部屋・部屋の一つに「王座」・「王座」の左右にさらに腰掛等を持ち、壁畫については「屢々君主の臣下は堂々たる行列を作り參殿して貢賦をもたらし、宮殿は盛裝の婦人と流行を追ふ紳士とがあるひは坐し、あるひはたち、あるひは身振りをなし、あるひは遊戯せるを見る、淑女は東洋婦人の如く容貌に白粉を施してゐる、尙ほ廷臣等は牡牛調練者の一群を眺めてゐる」(アーサー・エズアンズ)2と報告せられてゐる。我は以上のやうな材料だけで當時の社會構成を充分に判斷することはできない。只それがエジプト人の殖民地、集團居住地として榮へたものでなかつたことだけは、「Independence and Power of Cretan artists in spite of Egyptian influence」3と云はれてゐるので明らかなり、その富が對エジプト貿易によるものでないことは、かかる富が貿易だけによつて得られたものならばそれは仲介貿易でなければならぬが、その證跡が發見できない點に見られる。従つてこの文化は奴隷の上にか、あるひは近隣共同體の貢納の上にか、あ

るひは自由農民の「自由」意志による、あるひは強制による餘剩勞働の提供の上にか築かれたものであると推定さるるが、そのいづれとも斷定はできない。唯宮殿の壯大なる點から、み當時の社會の階級分化の深刻さを斷定してはならぬ、と注意しなければならぬ。この宮殿が「王」のものであるとしても、かかる「王」は有能な統卒者、魔術者として全種族員の推戴の結果かかる地位に達したのであると考へることもでき、彼の持つ富や奴隷の數に依るとしても、決してその位置は完全な意味での「階級」ではない。當時なほ種族員の協業の習慣が強かつたとすれば、技術の低度を考慮しても、かかる大建築物を作ることには少くとも中世のある時代より困難ではなかつた。宮殿の規模の大は奴隷制の展開の徵標にもならぬ。英雄時代のギリシヤにも可成り大規模の建築物があるが、奴隷制は社會の壓倒的制度ではなかつた。エンゲルスは「英雄時代のギリシヤの制度においては、古い氏族組織がまだ生きてゐたが、併し既に滅亡し始めてもゐた」4と云ひ、「バジレウスを王と翻譯するのは成程語源的には全く正しい、何となれば王 (Kuning) なる語は Kuni, Kuninge より由來し、氏族の首長を意味するからである。併し今日の王なる語の意味は古代ギ

リシヤのパジレウスとは決して一致しない。ツキディデスは *Basileia* を、明らかに *Poira* 即ち氏族より由来したるもの、と呼び、それは確定的な、従つて限定的な職権を持つてゐた、と云つてゐる。アリストテレスは英雄時代の *Basileia* は自由人に對する指揮であり、パジレウスは軍司令官、裁判官及び神官長であつた、と云つてゐる。即ちパジレウスは、後世における統治権ではなかつたのである。4 と云つてゐる。

1 平凡社版、世界美術全集、第一卷、一二四圖、一二六圖参照

2 ボッフオード、西洋古代史概説、七五頁

3 Brausted, *ancient Times. A History of The Early World.* P. 233.

4 エンゲルス、家族私有財産國家の起源、マルクス・エンゲルス全集、第十二卷、七五九頁

5 同書、七五八—九頁

これに續いて所謂ミケネ文化（紀元前一五〇〇—一〇〇〇年）がある。これは矢張りクレタの如き、多くの部屋と廻廊・庭園・大廣間・浴室・寢室などのある宮殿と、それを取巻く石壁と、古墳と、宮殿以外の私人の家屋、貴族・奴僕¹の住宅の遺跡とより成る。

古墳が「王」とその家族のものである點より見て宮殿の性質も明らかである。城壁を廻らしてゐる點より見てその外部に「種族奴隸」がゐたのではないかと云ふ想像は可能である。現在ミケネが全アルゴリスを統治してゐたらうと云ふ點では學者の意見が一致してゐる。以上を綜合して考へて見てミケネ文化はたとへ未展開なものであらうと奴隸制を持つてゐた。この奴隸の基礎の上に近隣共同體に對する貢納賦課が可能になり、この文化の大を致さしめたと云ひ得る。併し社會構成の上から見て既に氏族共產時代を脱却してゐたか、奴隸制がどこまで發展してゐたかと云ふことはあまり明らかでない。ミケネには既に貴族と自由民の區別があつたらしい。「國王及び貴族は戰爭に際して胄を冠り、頭部より足部に達する巨大なる楯を携へ、毛製又は革製の脛當を着ける。護身の武器は刀槍であつた。斯くの如き重き武器は自ら遠く携ふ能はざるが故に戰車に乗り、二匹の馬を以てこれを曳き、格闘の際は下車する。平民は輕裝し防禦の武具を着け、主に弓と抛石器とを以て戦ふ。然し平民は戰爭と政治とは重要視せられなかつた。2

1 平凡社版、世界美術全集、第一卷、一二五圖参照

併し以上二つの文化は所謂ギリシヤ文化とは直接には結びつかない。ギリシヤ人は殆どそれを記憶から消し去つて了つてゐるが、北方から移住してこれらの文化を持つ「民族」を驅逐しギリシヤに地歩を占めたのである。

我々はその社會構成の發展に従つてギリシヤ社會を三つの段階に分けて述べる。

一、英雄時代（紀元前一〇〇〇——七〇〇年）

二、アテネニスバルタ時代（紀元前七〇〇——三五〇年）

三、マケドニヤ時代（紀元前三五〇——一〇〇年）

所謂「英雄時代」とは、有名な二大叙事詩、イリアドとオデッセイに語られた時代である。これは勿論完全な意味での史實としては認め難いものであるけれども、當時の社會状態を知るには充分に役立つ。既にこの時代には鐵の使用が知られ、奴隸を使役し、富と權力を持つ貴族が「王」を取捲いて生活した。併し、社會の單位はなほ今日に見るが如く領土でなく血縁關係に基く種族・部族・氏族であつた。勿論その氏族制度は刻一層解體に

向ひつつあつた、併しなほ共通の宗教的祭典・共同墓地・相互的相續權・暴行に對する相互的防衛、共有財産の部分的保存等が残されてゐた。貨幣はまだ存在せず、奴隸制は捕虜のそれから自己の種族員や氏族員をすら奴隸化する兆しがあつた¹が、なほ充分に發展してゐないから平民は田園に勞働し、トロイ戰爭の結末において見られるが如く奴隸の好材料たるべき男子を盡く殺して女子と小兒のみを捕虜となすやうなことさへあつた。「國王の權力は決して絶對的なものではなかつた。國王は貴族會議の希望を尊重しなければならなかつた。」²そして自由民も重大なる計劃を議する會議には出席する權利を持つてゐた。

1 エンゲルス・家族・私有財産・國家の起源、七五一頁

2 ポツフォード西洋古代史概説、八八頁

この時代の末期にアテネでは「土地は既に分割されて私有財産に移つてゐた。これは未開の上段の終りに既に比較的發達してゐた商品生産、及びそれに相應する商品取引に適合するものである」¹そして「小さな農民經營及び獨立の手工業經營は……本來東洋的な共同體的所有が崩壞した後、および奴隸制がまだ眞剣に生産を支配しなかつた當時、その全盛

期における古典社會の經濟的基礎をなしてゐる、²「ギリシヤはすでに英雄時代において一つの階級構成を以て歴史に現はれる。(この階級組織それ自身はまた長い知られざる前史の明白な産物である)。しかしそこでも土地は主として獨立の農民によつて耕作されてゐる。貴族や酋長が大なる土地を所有することは例外であるばかりでなくその後直ちに消滅する」³と云ふ點を指摘して置く必要がある。即ち「英雄時代」の末期はアテネに關する限り全體としてなほ氏族制度が支配してゐるが、土地は既に分割されてゐる。人口の大多數は自由小農民で、その富裕なものは多少の奴隸を助手に用ひてゐる。この自由小農民に對する族長の權力が次第に加はり、末期にはそれを取巻く「貴族」と共に彼らを收取し、「一つの階級構成」とさへなつた。さてかかる社會を如何なる構成の社會と云ふべきであらうか? 唯物史觀世界史教程は「ヘラスの最古の社會的政治的秩序は封建的秩序であつたと云へる。」⁴と云つてゐるがこれは正しいであらうか? もしこれを封建主義なりとすれば社會發展の繼起的構成は、氏族制時代、封建主義、奴隸制時代、封建主義、資本主義と云ふことになり、甚だ妙なことになる。而して同じ封建主義の一方からは奴隸制社會

が生れ、一方からは資本主義が生れると云ふやうに、社會發展の必然性と云ふやうなものも失くなつて了う。一部の論者はこれこそ「アジア的生產様式」であると云ふ。この議論に對しては後に詳しく述べる(第三章参照)つもりであるが、少くともこれだけのことは云へる。生産様式たるからには勞働力と生産手段との結合様式において何らかの特異點が見られなければならぬのであるが、そこにあるのは社會を包んでゐる氏族制度、社會の最下層の土臺となつてゐる奴隸、(家内奴隸)族長的な「王」及び貴族と自由農民との間の隷農的關係(併し人格的從屬にまで行かず、「王」や貴族の地位もそう固定はしてゐない)であるに過ぎない。

- 1 エンゲルス・家族私有財産國家の起源、マルクス・エンゲルス全集、第十二卷、七六〇頁
- 2 マルクス、資本論、第一卷、第十一章、邦譯新潮社版、四二四頁
- 3 エンゲルス、アンチ・デューリング論、マルクス・エンゲルス全集、十二卷、三四九頁
- 4 ボチャロフ・ヨアニシアニ、唯物史觀世界史教程、第一卷、一八八頁

この時代の社會構成に對する正しい見方はこれを氏族共產時代と奴隸所有者的構成時代

との過渡と見ることである。過渡とは「もしそれを經濟に適用するならば所興の制度のうち資本主義のも、社會主義のも、要素、部分、斷片のある」(レーニン)ところのものである。一方においては氏族制度がなほ社會を包んでおり、他方においては氏族制時代の土地共有が破れ、富者と貧者とが生じ、また將來ギリシヤ社會の土臺となるところの奴隸制が、未だ未展開な形で、即ち大部分家内奴隸制の形で、存在してゐる。この奴隸制を基礎として、民族的傳統によつて家柄が貴く、且つ、奴隸を多く持つことによつて權力を得た貴族が起り、この貴族達による一般自由農民の「收取」が可能になつた。併し自由農民の地位は決して封建時代の農奴のそれではない。「王」の權力はナポレオン三世の權力がフランスの中農民に基礎を置かなければならなかつたと云ふ程度と意味においては自由農民の上にもあつた。なほ此處でさらに注意すべきことは「過渡」と云ふ言葉が、二つの社會構成のどつちにもつかぬと云ふ「逃口上」になつてはならぬことである。凡べての點から判斷するに所興の場合全體としてはなほ氏族制時代に包含されると見るべきであらう。次の時代は所謂「アテネ—スパルタ時代」である。舊史家は前時代とこの時代の中間に「ギ

リシヤ殖民時代」なるものを置き、唯物史觀世界史教程の著者の如きも、これを採用して「最古代におけるヘレネスの社會」なる節と、「スパルタとアテネ」なる節との中間に「ギリシヤ人の殖民」なる一節を置いてゐるが、この過渡時代はむしろアテネ—スパルタ時代の前史と見てそれに包含すべきであらう。特に社會構成史的に見てさうである。此處で——否、既に前時代の末期に——ギリシヤ史は二つに分れる、アテネにおいては既述のやうに「英雄時代」の末期に共有地が分割されて私有地ができた。これはそこに早くから發達してゐた商品生産に照應するものであるが、この商業關係は一層發展してエーゲ海の海上貿易權をアテネ人に與へ、同時にそこには近隣の各地から種々雑多な異種族人が集り氏族制度を破壊して行つた。まづゼウスの改革によつて種族同盟機關の強化が起り、次いで紀元前五九四年にソロンの改革があり、結局氏族制度に代つて國家が現はれた。奴隸の數は益々増加し、然もこの奴隸は「監督者の下に一所に働く」やうなものであつた。然も商品生産がアテネに多くの手工場を興したから彼らは「手工場の廣い場所」集團的に働いた。奴隸制度の發展と並んで自由民の階級分化が起り、彼らは土地を失つて債務奴

隷化の危険にさらされた。併し自由民は奴隷に對抗して奴隷所有者の権力を維持すべき力の源泉であつたからソロンの改革は債権者を抑へてこの債務者の利便をはかつたと云はれてゐる。併し同時にソロンは自由民を財産の差等に從つて四等に分け、この四等の間に政治的權利及び軍事義務の差等を設け、結局、富の権力を固定化した。その後自由民はピシストラス以下の僭王を押立て貴族と抗争した。奴隷制を基礎とする商工業の發達はまた商工階級なる新しい階級をつくり、これが舊來の貴族を打倒した。奴隷に對しては一般自由民より採用された軍隊が、一般自由民に對しては奴隷より採用された警察があつた。

最盛時にアテネには自由民九萬、四萬五千の外國人及び被解放者、三十六萬の奴隷があつたと云はれてゐる。

スパルタにおいてはこれと異つてゐた。そこには征服者たるスパルタ人、自由を有するも參政權なく被征服者たるアケイア人、奴隷たるヘロトの三階級があつた。ヘロトはアテネの奴隷と異り、スパルタ人の共有物であつて、城外に進んでスパルタ人の田畑を耕作し、一定の現物地代を支拂つた。スパルタ人はこのヘロトに對する恐怖から城内に軍事的共同

生活を營んだ。氏族制時代の慣習は比較的スパルタに多く保存された。商工業は發達しなかつた。

スパルタとアテネとの對極性はギリシヤ史の半ばを充す兩者の抗争となつて現はれた。多くの都市國家が主としてその構造があるひはヨリ多くスパルタに接近し、あるひはヨリ多くアテネに接近してゐる點からスパルタ及びアテネと同盟を結びこの鬭争に参加した。併し外部よりの壓力、例へば紀元前四九二—四七九年のギリシヤ—ペルシヤ戰爭の如きでは奴隷所有者的構成の擁護のために兩者共同して起つてゐる。

併しスパルタ、アテネの奴隷制度はその繁榮の基礎であると共に没落の原因でもあつた。スパルタにおいてはヘロトに對抗すべく組織されたスパルタ人の軍事組織が禍して相次ぐ戰爭によつて次第に人口を喪失させ、リウクトラの戰爭（紀元前三七一年）においてスパルタが敗北するや、在來スパルタの習慣及び規則では遁亡者からは市民權を剝奪する規定であつたが、既に滅じて千五百（曾て九千と云はれた時代がある）に過ぎぬ市民からは如何にしてもこれ行ふに忍びず、特例を設けてそれを不問に付した程であつた。

アテネにおいては「商工業の發達と共に少數者の手に富が蓄積、集中し、自由民の大衆は貧窮化して、自己の手工業労働に依つて奴隷労働と競争するか——それは恥づべきこと、賤しいことと考へられたし、又大した効果も期待し得なかつた。——あるひは零落するかの外はなかつた。彼らにかかる事情のもとに必然的にこの後者を選んだ。而して彼等は大衆を構成してゐたからそれに依つて彼らは全アテネ國家を滅した。アテネを滅したものは、ヨーロッパの御用教師の主張するが如くデモクラシーではなく、自由民の労働を驅逐したる奴隷制度であつた。」¹

¹ エンゲルス、家族私有財産國家の起源、マルクス・エンゲルス全集、第十二卷、七六一八九頁
普通ギリヤ史はこれで終るとされてゐる。實際典型的な奴隷所有者的構成の社會としてのアテネ・スパルタ史はこれで終る。そして次の一頁はマケドニアのギリヤ征服をもつて始まる。「奴隷制度、これが生産の支配的形態であるところでは、労働は奴隷のすることとなり、従つて自由人にとつては不名譽なものとなる。これによつてかかる生産様式からの出口が閉ざされることとなるが、一方更に一層發展した生産は奴隷制度に制限を感じ、

その排除へと驅りたてられる。この矛盾に逢着するや奴隷制度を基礎とする生産、それを基礎とする國家は没落する。多くの場合解體は先行の國家が他のもつと強大な國家によつて強力的に征服されることによつてもたらされる。(ギリヤはマケドニアによつて、後にローマに依つて)。¹

¹ エンゲルス、自然辯證法、岩波版、上卷、一六六―七頁

紀元前四世紀の頃、在來からギリヤ人の一部ではあつたが未だ開化の域に達せず、發展せる奴隷制を持たず、「尙ほホメロス時代のギリヤと等しき状態にあつた」マケドニア人が急速に興起して國家を組織し、國王を戴くやうになつた。紀元前三五〇年頃からその王フィリッポスはギリヤ全土の經略を始め、三四〇年を過ぐる頃にはほぼ目的を達してゐた。フィリッポヌの子アレクサンドロスは父王の統一したギリヤ全土の勢力をもつてベルシヤと争ひそれに勝つた。アレクサンドロスはかくしてギリヤの西端よりインドのヒファシス河に至り、ヤクサルテス河よりヌビアに達する世界最大の帝國をつくつた。この帝國組織の特徴はギリヤが中心となり、各地にギリヤ人とマケドニア人の退役兵

士よりなる植民地が設けられ、被征服地を統治した點にある。ギリシヤは在來の都市國家分立制より、マケドニヤ及びギリシヤ全土を中心とする「貢納制」國家となつた。然らばこの「貢納制」國家は如何なる基礎の上にできたものであつたか？ たしかにマケドニア社會の未發展にもその理由がある。それは紀元前四世紀の頃なほ半野蠻人であつた。奴隸制は發展してゐなかつた。この發展せざる奴隸制は「貢納制」によつて補足されねばならなかつた。フィリッポスがアムフィポリスを占領するや彼は新附の住民に「本國マケドニヤ人よりもさらに多くの權利を與へた」と云はれてゐる。併しマケドニヤ人の奴隸制は彼らの覇業と共に急速に發展しつゝあつた。フィリッポスがオリンタンその他三十の都市を占領するやその住民の凡べてを奴隸にしたと云はれ、チル市を占領するや數千の住民を殺し、數千を奴隸として賣つたと云はれてゐる。奴隸所有者的なギリシヤがアレクサンドロスの覇業と共に急速に「貢納制」——尤もそれも多かれ少かれギリシヤ人の間における奴隸制に立脚するものであるが——に移行した秘密はむしろ被征服者たる東方諸國の社會構成そのものにあつたやうに思はれる。これらの諸國は未展開な奴隸を基礎として征服者

都市と被征服者村落とよりなる獨特な關係を形成してゐた。

これを占領せるギリシヤ人はその力の微力なために同じ方法を踏襲するよりほかに統治の方法がなかつたものと思はれる。

然らば斯かる社會構成は如何なるものと見なすべきであるか？ マルクスは次のやうに云つてゐる。「あらゆる征服には三通りの形が可能だ。征服民族が自分自身の生産様式のもとに被征服者を屬従させる。（例へば今世紀の 아일랜드 における、ある程度まではインドに於けるイギリスの場合の如き）か、もしくは被征服民族の在來の生産様式を存続させつつ征服者は貢物を得て満足する（例へばトルコ族やローマ人の場合の如き）か、もしくははまたそこに相互影響が働いてもつと新しい様式が、一つの綜合が成立する。（ゲルマン族の征服運動におけるある程度までの事實）——今、問題の場合がその第二項に當るとは云ふまでもなからう。然らばマルクスが「被征服民族の在來の生産様式を存続させつつ」と云つてゐる點に注意すべきである。即ちかかる場合には征服者と被征服者とは二つの別々な生産様式が相並んで存するのである。従つてギリシヤのそれと、被征服地たる東

方諸國のそれと、兩者の社會構成を一つにして論すべきではない。そこで結論としてはギリシヤは依然として奴隸所有者的社會構成であつた。これは明らかなことである。被征服地の社會構成はギリシヤのそれに左右されることなく在來のままであつた。而してそれが如何なるものであるかについては後(第三章以下)に述べるであらう。

1 マルクス、經濟學批判の序論、マルクス・エンゲルス全集、第七卷、三九七頁

アレクサンドロスの「大帝國」は彼の死後數ヶ國に分裂した。而してその地中海沿岸以外に設けられた征服者都市は數世紀にして周圍の東方諸國のうちに没し去つた。それはギリシヤ的な社會關係も、文化も殆ど被征服地に残さなかつた。マケドニヤを中心とするギリシヤは紀元前一世紀頃、ローマに併せられた。

第二節 ローマ史の素描

我々は便宜上ローマ史を次の四時期に分けて解説しよう。

一、ローマ都市—國家形成時代(紀元前八〇〇—五〇〇年)

二、ローマ國家興隆時代(紀元前五〇〇—二〇〇年)

三、最盛時代(紀元前二〇〇—紀元二〇〇年)

四、衰退時代(紀元二〇〇—五〇〇年)

ローマ人もギリシヤ人と同じく氏族制時代をもつて出發點とした。

「ローマ建設の傳説によれば最初の定住は一の種族に結合せる多數のラテン氏族(傳説によれば百氏族)に依つて行はれ、間もなく之に、矢張り百氏族より成つてゐたと云はれるザベリア種族が加はり、最後に第三の、雜多の分子より成り、同じく百氏族が加はつた。この全物語を一見してすぐ氣付く事は、ここでは氏族以外のものは最早餘り自然發生的でなかつたこと、及び氏族自身もまた多くの場合古い故郷において存続しつつある母氏族の嫩枝にすぎなかつた、といふことである。種族はその額に人爲的組織の刻印を押されてはゐたが、併し大部分は親族的要素よりなり、且つつくられたのでなく發生したところの、古い種族の手本に従つて組織せられてゐる。但しこれは、これら凡べての三種族の核心は眞の古い種族であり得ることを妨げるものではない。中環たる部族は十氏族よりなり、ク

ローリアと呼ばれた。即ちローリアは三十あつた譯である。ローマの氏族がギリシヤのそれと同じ制度であつたことは一般に認められてゐる。」¹

1 エンゲルス、家族私有財産國家の起源マルクス・エンゲルス全集、第十二卷、七七〇頁

併し非常に早くからこのローマの種族中に世襲的に「王」や元老院議員となる貴族的な種族が分離し、さらにローマの種族による附近の土地の征服が平民（プレブス）なる新階級をつくつた。平民は小土地所有者で、納税及び軍事義務を持つてゐたが政治権力がなかつた。而してローマに商工業が発達する（前五世紀頃から）と、大部分この平民から、一部分舊來の貴族から商業貴族ができてきた。奴隸制はこの頃まで存在したが未だ社會の壓倒的制度ではなかつた。それはファミリアなる語が最初家庭を意味せずして奴隸を意味した點から見て家内奴隸であると考へられ、且つかかる奴隸の存在は未だその主人を農耕労働より解放しない點に見られる。紀元前四〇〇年頃になつても、例へばデクタトルに任ぜられたシンシナタスはその四町歩の田園において耕作に従事してゐたと云はれてゐる。この労働がたとへ何らか慰安のための労働であつても問題は變らない、彼らが労働する習慣か

ら大して遠くなかつたことがわかる。氏族制度はセルヴキウスなる「王」がそれに改革を加へ、プレブスをも合して全ローマ人民を五等に分け、富によつて軍務に差等を設けた、と云はれる時既に地縁制度に變りつつあつた。それによつて貴族と平民との舊來の種族的區分が失くなり、社會の單位が氏族や種族以外のものになつてきた。そしてプレブスはその零落化と鬭争しつ一方政治への参加を求め、結局そのうちから二名の護民官なる代表者を出すことになつた。

ローマは紀元前五〇〇——二五〇年にこの貴族と平民の力によつてイタリア全土を統一し、戰時に出征する義務を引受ける多くの同盟諸國をつくつた。同時にこのイタリア全土の統一戰時代にローマの奴隸制度が展開した。ローマはサムニテ戰爭に勝つや數萬の男女を奴隸としたと云はれてゐる。紀元前二五〇——一五〇年にかけてローマの勢力はイタリア以外に向つても擴張した。これによつて對内的には奴隸の數が一層増加し、對外的には、シシリー、サルジニヤ及びコルシカ、イスパニヤ、ガリア、イリリウム、ギリシヤ、アフリカ、アジア等の多くの屬領ができた。

紀元前二〇〇——紀元二〇〇年のローマ最盛時代と云ふのは、内容上には奴隷制度が益
益發展し、この奴隷制度の地盤の上に商工貴族と土地貴族、貴族と平民、貴族及び平民の
全自由民と奴隷との鬭争が最も激烈であつた時期である。

平民は如何なる運命に置かれたか？ マルクスは一八七七年「祖國誌」宛の書簡におい
て次のやうに記してゐる。

『資本論』の諸個所で私は古代ローマの平民の運命を指示した。最初彼らは自分自身の地
面を自己の計算で耕作した自由農民であつた。ローマ史が續くうちに彼らは徐々に收奪さ
れ、そしてこの場合、彼らを生産手段および生活から引離した同じ運動が大土地所有およ
びまた大貨幣資本の形成を齎した。かくて、ある晴朗なる朝、ここに一方では労働能力の
外、すべてを奪はれた自由人々が、そして他方では——労働の收取のために——すべて
の獲得された富の所有者が現はれた。それからどうなつたか？ ローマのプロレタリアー
トは賃銀労働者にはならないで、怠惰な暴民、北アメリカの南部諸州の「貧窮白人」さへ
より一も層低い道德的水準にたつところの“mob”となり、それと同時に、資本主義的生

産様式でなく、奴隷的生産様式が形成され且つ繁榮した。」

土地を奪はれた自由民は己れの代表者グラッカス兄弟を通じて土地の再分配を要求した。
「イタリアの野獸はその棲家を有する。而もイタリアの防禦に生命を賭する人々は空氣と
日光の外に何物をも持たぬ。休息すべき家なく土地なく妻子と共に漂泊する。而も彼等の
指揮官は自己の墳墓と殿堂とを守るため、欺いて兵士を戦場に送る。されど多數のローマ
人のうち、一人だもその家族の祭壇と祖父の墳墓とを有するものなく、唯他人の富と奢侈
とのために戦ふ。彼らは眞に自己の所有と稱する一片の土塊なくして而も世界の君主と稱
へられて死す。」と、チヴェリウス・グラッカスは叫んでゐる。チヴェリウス・グラッ
カスは紀元前一三三年護民官となり、何人も五百ユグラ（二百五十エーカー）以上の公有
地を使用すべからず、何人も公有地において百頭以上の牛もしくは五百頭以上の羊を飼育
すべからず、農園労働者のうち一定数は自由民たるべし、現在の土地占有者の男兒（二名
以内）は各々二百五十ユグラの公有地を所有することを得る。部落會の選出する三名の委
員は殘餘の土地を必要ありと認めるものに、各三十二ユグラ宛に區分して分與すること。

と云ふ法案を通過せしめ、その實行に着手した。併し彼は怒れる富豪黨に殺害された。チ
ヴリウスの弟、カユス・グラツカスは護民官となり、市民に穀物を廉賣する規定を設け、
同盟諸國の住民にもローマ人と同様の市民権を與へることを提議したが、この提議は富豪
黨に阻止され、彼は叛亂を起して、その叛亂中に死んだ。かくて自由民の土地喪失化は依
然として進行し、彼らは尨大なるルムペンプロレタリア群を形成し、若干の大都市に集り、
主として政府のあたへる施物によつて養はれた。紀元前六二年に零落した貴族、カチリナ
はルムペンプロレタリア層を地盤として門閥家の財産の没收・分配を計劃して失敗した。

1 ボツフォード、西洋古代史概説、四六六―七頁引用による

斯やうな鬭争に關聯して貴族内部にも大土地所有者と商工業者との鬭争が起つた。紀元
前八八―八〇年に商工層を地盤とするマリウスと大地主を地盤とするスルラなる二將軍
が公然たる戦争を行つた。結局スルラが勝利し、大貴族の権力が強められた。

最後に奴隸が貴族及び自由民の凡べてに對して反亂した。奴隸の叛亂は紀元前二世紀の
凡べてを埋め、特に紀元前一三四―一二五年のシシリアのそれは規模が大きかつた。そ

の後紀元前七三―七一年にはトラキア生れの奴隸スパルタカス（彼は生來の奴隸ではな
かつた）が、奴隸＝闘技士、大領地の奴隸等十餘萬を率ゐて起ち、全ローマを震撼させた。
併し結局、クラッススに率ゐられた八軍團のローマ軍に粉碎され、さらにイスパニヤより
歸國せるポムпейウスに鎮壓された。

この頃までローマは共和制であつたが、斯やうな奴隸叛亂の恐怖、それから獲物さへ與
へれば何人にも加勢するルムペンプロレタリア層の充満による將軍權力の強化によつて紀
元直前から帝政になつた。そしてこの帝政の下に暫時平和がもたらされた。併しこの平和
は上からの壓力と、ルムペンプロレタリア群の不斷の買収によつて實現されたものである。
紀元二〇〇年頃からローマ史は新たな局面に入る。それは自由民の零落と奴隸制の凋落
によるコロナトス制度の生誕、ローマ領への蠻族の侵入である。

「農業は全古代社會において決定的な生産部門であつたが、今やそれは、再び以前にも
増してさうなつてゐた。イタリアでは共和制の末頃から殆んど全領域を占めてゐた大私有
地（ラチフォンヂウム）は二つの方法で利用せられてゐた。その一つは牧場。そこでは住民

は羊や牛に驅逐され、而して之等の世話は極く僅かの奴隷で足りた。第二は別荘。そこでは大勢の奴隷をもつて大規模の園藝が一部は所有者の奢侈のために、一部は都市の市場への販賣のために營まれた。大牧場は維持せられたし、恐らく更に擴張せられてゐた。別荘所有地及びその園藝はその所有者の窮乏並びに都市の衰微と共に衰へてゐた。奴隷労働に基く大私有地経済は最早や儲らなかつた。然るにそれは當時の大規模農業の唯一の可能な形態であつた。小規模栽培が再び唯一の引合ふ形態となつて了つた。別荘は續々と小分割地に分けられて、一定額を支拂ふ永代小作人又はバルチアタイに貸與された。後者は小作人といふよりも寧ろ管理人であつて彼らの労働に對して年生産物の六分の一、又は實に九分の一しか受取らなかつた。併しこれらの小さい分割耕地の大部分はコロヌスに貸與された。コロヌスはその代りに一定の年額を支拂ひ、その土地に拘束されてゐたし、又、その分割地と共に賣られても仕方がなかつた。彼らは決して奴隷ではなかつたが、併し自由でもなく、自由人と結婚し得ず且つ彼等相互の婚姻は完全に有效なる婚姻とは認められずして奴隷のそれと同じく單なる同棲と看做された。彼らは中世的農奴の先驅者であつた。」

1 エンゲルス、家族私有財産國家の起源マルクス・エンゲルス全集、第十二卷、七九五―六頁

併しこのコロナトス制度のみをもつてしては眞の中世的農奴制度も奴隷制度の止揚も、従つてまた奴隷所有者的社會經濟的構成から封建主義への移行も成し遂げられなかつた。

「古代の奴隷制度は盛りを過ぎてゐた。それは田舎の大規模農業においても、また都市の工場手工業においても、もはや勞力に價する利益をもたらさなかつた。その生産物のための市場が衰微してゐたのだ。然るに帝國の最盛期における巨大生産が萎縮して出來た小規模農業や小規模手工業には、多數の奴隷を容れる何らの餘地もなかつた。唯富者 家庭奴隷及び奢侈奴隷のみが社會に存在の餘地を持つてゐた。しかし亡びゆく奴隷制度は未だ依然として凡ての生産労働を奴隷の仕事とし、自由なローマ人——而して今や實際何人もそれであつた——にとつては卑しいものと考へられしむるには十分であつた。その結果、一方においては過剰の、厄介物となつた奴隷の解放は益々増加し、他方においてはここではコロヌス、かしこではおちぶれた自由民が増加した。……奴隷制度はもはや引合はなくなつた。そこで亡びたのだ。併し亡び行く奴隷制度は、自由人の生産労働の驅逐と云ふ毒

針を残して行つた。ここにはローマ社會が陥つた出口のないデレンマがあつたのだ。奴隷制度は經濟的に不可能であり、自由人の勞働は道德的に驅逐されてゐた。社會的生産の基本的形態の一つはもはやなり得ず、他はまだなり得なかつた。」¹

¹ エンゲルス、家族私有財産國家の起源、マルクス・エンゲルス全集、第十二卷、七九六頁

そしてこの「出口」は、またしても「先行の國家が他のもつと強大な國家によつて強力的に征服されることによつて」(エンゲルス)あたへられた。蠻族の侵入がこれである。ローマ帝國の北部にはゲルマン種族が住んでゐた。彼らはなほ氏族制度の末期にあつた。既に紀元前一世紀に彼らはイタリアに侵入してきてゐる。その後もローマ人とゲルマン人との衝突は繰返されたがローマ國內の秩序が保たれてゐる限り勝味はローマ側にあつた。三世紀になると衰退期に入つたローマはもうこれらの蠻族の攻撃に對して僅かに國境を保つてゐるに過ぎなくなつた。四世紀にかけてこれらの蠻族はローマの行政上、軍事上の機構に採用され、その樞要な地位を占めだした。四世紀に入るとアジアからヨーロッパへのフンヌの侵入があり、これに驅りたてられたゲルマン人は益々ローマ領内に入つてきた。

五世紀の終りに遂にゲルマン人のローマ占領が完了した。そしてこの占領は舊來のローマの生産様式と新しいゲルマン人の生産様式との「相互影響が働いてもつて新しい様式(封建主義——引用者)が、一つの綜合が成立する」¹結果を生んだ。

¹ マルクス、經濟的學批判の序論、マルクス・エンゲルス全集、第七卷、三九七頁

かくてローマ史は終る。紀元三九五年にローマ帝國が二つに、西ローマ帝國と東ローマ帝國に分裂して出來た東ローマ帝國は、その後ビザンチン帝國の名のもとに存続したが、その社會經濟的制度もまた急速に奴隷所有者的性質を失つて行つた。富豪は土地に投資して大土地所有者となり、國家への貢税から貧困化した農村人口をそこに收容した。小土地所有者は國家に對する貢納と諸義務から免れるために大地主に土地を寄託した。八——九世紀に政府は蠻族の侵入を防ぐために屯田制度を布いたが、その結果その將軍が地主となつた。教會が土地を占領した。皇帝は國有地を臣下に分與した。結局十一世紀頃にかけて封建制度が樹立された。

以上説いたローマ史は本質的な點においてギリシヤ史に一致するが、その相異を見るこ

とも重要である。相異點は如何なるところにあるか？ギリシヤにおいては（一）氏族制度の解體は各氏族（もしくは種族、種族同盟）の内部で行はれた。それは外的な攪亂條件なき最も純粹な「實驗室的」過程として行はれた。（二）それによつてギリシヤ各地に並存的にいくたの都市國家ができ、それらが最後まで覇權を争つた。ローマにおいては（一）氏族（種族、もしくは種族同盟）は最初から被征服者たるプレブスに對する閉鎖的貴族であつた。種族全體が支配階級となつた（勿論、貴族的家族の分出を見たが）。その後この貴族と平民は奴隸及び被征服地との對立上必ずしも最重要な階級對立ではなくなつた。彼らは相合して奴隸及び屬領の征服に活動した。さらに（三）ギリシヤとローマとを比較するに、兩者共に奴隸所有者的社會經濟構成であるが、その發展段階において後者が一層高度であつた。そこでその矛盾は一層奴隸制特有な形で一層鋭く發現した。ギリシヤが各都市國家の並存よりなり、ローマが全體として一國家を形成したと云ふ點からは、前者においては奴隸對全自由民、平民對貴族の鬭争が屢々都市國家相互の鬭争と云ふ形で曖昧化されてゐるのに對し、後者は、少くとも全イタリーの規模において純粹に、「實驗室的」

にこの階級對立が發展した。

併しともあれ、ギリシヤ史もローマ史も世界歴史における唯一の典型的な奴隸所有者的社會經濟的構成の場合を示してゐる。次に、それらから奴隸所有者的社會經濟的構成の發展法則として學ぶべき點を見よう。我々は、「物理學者が自然現象を最も充實した形に現はれるところ、他の影響に攪亂されることの最も少ない所に觀察する、あるひは又、なし得るところに在つては、これが純粹の過程を確保せしめる條件のもとに實驗を行ふ」やうに、そしてこの方法に倣つてマルクスが資本主義經濟の分析のために「資本主義的生產様式とそれに照應した生産事情並びに交換事情の本場のイギリス」を取上げたやうに、奴隸所有者的構成を知るためにその最も典型的な場合を取上げなくてはならない。

1 マルクス、資本論、第一卷、新潮社版、九頁

第三節 奴隸所有者的社會經濟的構成と奴隸制度

我々は最初に奴隸と奴隸制度（經濟制度としての）と奴隸所有者的社會經濟的構成の三つ

を區別するところから始める。

ある社會に單に奴隷が存在するだけでは未だ決して奴隷制度の存在でもなければ奴隷所有者的社會經濟的構成の存在でもない。ある社會に一人二人の奴隷が存在するからと云つてその社會に奴隷制度が存在すると説く人々はあるまい。殆ど凡べての資本主義國には今なほ若干の非合法的な奴隷の存在するを見る。このことは往々かかる事實が發覺して新聞種となつてゐる點を見ればわかる。併しあらゆる資本主義國に奴隷制度があると主張する人はあるまい。少くともかかる事實の潜在を強調しようとする場合でない限りそうである。資本主義にして奴隷制度を持つものは、その最も後進的な、それが半封建的秩序と絡みあつた資本主義國、特に半殖民地國に限られる。奴隷の存在と奴隷制度との關係については北米合衆國における奴隷史を参照することができる。そこでは「アメリカ奴隷所有者との市民戦争後ネグロは奴隷制から解放された。」¹併しその後もなほ若干の奴隷が非合法的に存在した。またツアルのロシア及びソヴェート同盟の奴隷史について見ることができる。(此處で私はその農奴制度については云はない。これは別な問題だからである。)

ツアルのロシアには疑ひもなく奴隷が存在した。その中央アジアにおける殖民地においては一夫多妻制が行はれ、この「妻」達は婦人部屋にあつて手藝労働をした。勿論ソヴェート同盟の成立はこの奴隷を是認しなかつた。併しこれが絶滅は一舉に行はれたわけではない。それが家族制度と絡みあひ、婚姻關係の外被をまといつてゐるため鬭争は特に困難であつた。然るにレーニンはその論文「食糧税について」(一九二一年)及び「左翼」小兒病及び小ブルジョア性について」(一九一八年)において決してこれを經濟制度としては數へあげてゐない。そこには「(一) 父家長的な、即ち可成りな程度に自然物的な農民經濟、(二) 小商品生産(穀物を賣る農民の多數がこれに入る)、(三) 私經濟資本主義、(四) 國家資本主義、(五) 社會主義」が數へられてゐるのみである。²

1 レーニン、ロシア人とネグロ、全集、第二版、第十六卷、二九九頁

2 レーニン、全集、第二版、第二十六卷、三三二頁、同二十二卷、五一三頁

奴隷制度と奴隷所有者的社會經濟的構成を考へるには經濟制度と社會經濟的構成との關係を見て置くのが便利である。

まづ社會經濟的構成とは如何なるものであるか？ これについてはマルクスの次の有名な章句を引用することができる。

「人々はその生活の社會的生産において特定の、必然的な、彼等の意志に依存せざる諸關係を結び、この生産諸關係は彼らの物質的生産諸力の特定の發展段階に應當するものである。この生産諸關係の總和は社會の經濟的構造、即ち實在的基礎——この基礎の上に法律及び政治の上層建築が聳えたち、又この基礎に特定の社會的意識諸形態が對應する——を形づくつてゐる。物質的生産の生産方法は社會的の、政治的の、及び精神的の生活過程一般を制約する。……社會の物質的生産諸力はその發展のある一定の段階において現在の生産諸關係——その内部でこの時まで生産諸力が發展してきたところの——と、あるひはただこれの法律的表現に過ぎないのであるが、所有諸關係と矛盾するやうになる。この諸關係は生産諸力の發展形態からその桎梏に變ずる。……經濟的基礎の變動と共に巨大な上層建築の凡べてが、或ひは徐々にあるひは急激に變革される。……極く大づかみに云へば、アジア的生產様式、古代的生產様式、封建的生產様式及び近代ブルジョアの生產様

式を社會の經濟的構成の進歩の段階であるといふことができる。」¹

1 マルクス、經濟學批判の序文、マルクス・エンゲルス全集、第七卷、四一五—六頁

而してこの引用について五つの點を注意しなければならぬ。第一に「この理論（社會經濟的構成の理論——引用者）はあらゆる人間の共同生活にとつて根本的な事實、即ち生活手段の獲得様式を出發點とし、生活手段の所與の獲得様式の影響下につくられてゐる人間との關係をその出發點との關聯のもとにおいた。そしてこれらの關係の（マルクスの用語に依れば『生産關係の』）體系中に政治法律的形態及び社會思想のある種の流によつて着物を着せられてゐるところのその社會の基礎を示した」¹と云ふ點。即ち社會的關係を嚴密に生産諸關係へ還元し、生産諸關係を生産諸力の高度に還元すること」²と云ふ點。第二に社會經濟的構成とは單に社會の經濟的方面のみでなく、法律及び政治形態、さらにイデオロギー形態にまで及ぶ社會の全部を統一し抱擁した概念である、と云ふ點。この點についてミイチンは次のやうに云つてゐる。「社會の根底をなす經濟的構造だけでは、未だ社會經濟的構成と云ふ概念がすべて云ひ盡されてはゐない。經濟的基礎とそれに照應す

る上部構造、即ち政治形體や觀念形體との具體的統一においてのみ、各々の社會經濟的構成はある全一的なものとして、『生ける社會的生產的有機體』(マルクス)として現はれる。³ またグーコフスキーは次のやうに云つてゐる。「その基礎にそれあるひはこの、それを規定する生産様式を持つ構成——これは單に所與の生産様式のみでなく、あらゆる上層建築的諸現象の總和でもあると云ふ全く正しい思想。」⁴ 勿論レーニンに見これと異なる如くとれる表現がある。即ち彼はマルクスが「社會經濟的構成の概念を所與の生産諸關係の總和として定立し」たと云つてゐる。併し同時に彼は同じ場所で「これが『資本論』の『骨組』である。だが問題の主要點はマルクスがこの骨組に満足しなかつたこと、普通の意味の一個の『經濟理論』に局限されなかつたこと、所與の社會構成の構成と發展を『専ら』生産諸關係に依つて『説明』しながらなほこれらの生産諸關係に適應する上層建築をつねに、そして至る處、精査し、血と肉とをもつてこの骨組を包んだと云ふことのなかにある。斯くして『資本論』は偉大なる成功を収めた。故に『ドイツ經濟學者』のこの著書はあらゆる資本主義的社會構成を、その實生活的方面、生産諸關係に内屬する階級對立の現

實的社會現象、資本家階級の支配を擁護するブルジョア的政治的上層建築、自由、平等、等々のブルジョア觀念、及びブルジョアの家族關係を含むきたままを讀者に開陳した、⁵と云つてゐる點を強調すべきであらう。第三の點は社會經濟的構成の概念が決して恣意的に、勝手に定められた社會發展の「段階」ではないと云ふことである。マルクスが「アジア的・古典的・封建的・近代資本主義的生產様式を社會經濟的構成の進歩の段階であると云ふことができる」と云つた時、それらの各々は決してどうでもよい單なる「エポック」ではなかつた。例へばアジア的・古典的・封建的・近代資本主義的の最後のものを産業資本主義と、主義の二つに分けて「アジア的・古典的・封建的・産業資本主義的」、主義的」と稱して差支へないやうなものではなかつた。何故か？ 何故なら「古典的」「封建的」「近代資本主義的」の各々はいづれも社會經濟的構成であるが、産業資本主義や帝國主義はそうではないからである。「アジア的」については後に述べる。さてそれについても今少し詳しく述べるには我々は此處で「質量」及び「質量の結節線」なる概念を述べるのが便利である。何故なら「その各々が生産諸力と社會的勞働の生産性の特定水準によつて特徴づけられる

各種の社會構成の順次的交替に於る社會の統一的歴史は質量の統一的結節線を構成する」6からである。さてそれによればあらゆる「質」はその質として量的發展を遂げる。そしてその一定の量的發展段階に至つて他の「質」に轉化する。新しい「質」はまたかゝるものとして量的發展を遂げて行く。そしてその一定の量的發展段階に達して更に新しい「質」となる。そしてこれが續いて行く。この各々の「環」を「質量」と云ひ、それを結び合せたものを「質量の結節線」と云ふ。併し「質量の結節線」は決して同系次のもの、謂はば同「群」のものだけには限らない。結節線の各「環」において所與の「質」の上に遂げられるところのその量的發展も一聯の「質量の結節線」として現はれる。即ち矢張り一定の「質」の量的發展と、その一定段階における新しき「質」への轉化、さらに新しき「質」の量的發展とその一定段階におけるさらに新しき「質」への轉化として。そこで我々はAの「結節線」、 $A_a \cdot A_b \cdot A_c \cdot A_d$ と、例へば A_b を構成するBの「結節線」、 $B_1 \cdot B_2 \cdot B_3$ とを同一視することはできない。 $A_a \cdot A_b \cdot A_c \cdot A_d$ は次第に高度化する矛盾を内包するが、それは謂はば同系次の矛盾である。併し $B_1 \cdot B_2 \cdot B_3$ はこれと系次を異にする矛盾である。(唯、 $B_1 \cdot B_2 \cdot B_3$ が

その總和において A_b を構成すると云ふ理由においてのみ $A_a \cdot B_1 \cdot B_2 \cdot B_3 \cdot A_c \cdot A_d$ なる系列が認められ、また $B_1 \cdot B_2 \cdot B_3$ 等は A_b の部分としてたとへ往々潜在的にもせよ A_b 固有の凡ゆる矛盾を含有すると云ふ理由においてのみ $A_a \cdot B_1 \cdot A_c \cdot A_d$ などと云ふ系列が認められる。さて然らば「古典的・封建的・近代資本主義的」における同系次の矛盾と何か？それは階級の存在である。成程三つの社會經濟的構成においてそこには各々異なる階級がある。併しそのいづれもが階級を持ち、それら相互の區別をそこにおける階級種類の相違によつて行ふと云ふ點において一貫してゐる。「そのなかでこの餘剩勞働が直接的生産者、勞働者から汲みとられる形態のみが社會の經濟的構成を區別する。例へば奴隸制の社會を賃銀勞働の社會から區別する。」7 「奴隸所有者と奴隸——これが最初の階級的大分裂である。歴史的にこの形態に續く他の形態は農奴制度である。」8 「生産の社會的形態の如何を問はず、勞働者と生産手段とはつねに生産上の因子たるを失はない。然しそれが相互に分離された状態について云へば、これらのものはただ可能的にのみ生産の因子たるに過ぎぬのであつて、苟くも生産が行はれる爲には兩者の結合を必要とするのである。この結

合が行はれる特殊の様式に従つて（階級差別が出来るのだが——引用者）社會構造の種々異つた經濟的時期の上に區別があたへられる。」⁹

- 1 レーニン、「ナロドニキ主義の經濟的内容」全集、第二版、第一卷、二八三—四頁
- 2 レーニン、「人民の友」とは何ぞや」同書、六一頁
- 3 ミーチン、史的唯物論、白揚社版、九〇—九二頁
- 4 グーコフスキー、「西ヨーロッパにおける封建主義」七頁
- 5 レーニン、「人民の友とは何ぞや」、全集、第一卷、六二頁
- 6 シロコフ、ヤンコフスキー唯物辯證法、三四三頁（原書）
- 7 マルクス、資本論、第一卷、新潮社版、一六七頁
- 8 レーニン、新しき論文及び手紙、九五頁
- 9 マルクス、資本論、第三卷新潮社版、二〇頁

例へば産業資本主義と、主義とを兩者の持つ、の相違によつて區別することができらうか？ 封建主義の各段階について斯やうなことが可能であらうか？ 勿論、できない。併し例へば封建主義は地代形態の相違に基いて、労働地代、現物地代、貨幣地代の差別に基いて段階づけることができる。また封建主義の胎内における資本主義の發展段

階に従つて段階づけることができる。

尤も社會構成の概念を階級の存在とのみ結びつけるのは誤りである。社會構成の基礎なりとされる生産様式、生産手段と労働力との結びつきの仕方と云ふ概念は階級よりは範圍の廣い概念であつて、必然的に、原始社會等における獨特な生産手段と労働力との結びつきの仕方をも包含するものである。かくて次のやうに云へる。「構成と云ふ尊敬すべき呼稱は對抗的・階級的社會にのみ與へるべきであらうか、あるひはそれは前階級社會にも關聯することができ、またさすべきであるかと云ふ問題も鬭論で論争された。併しここでも、論争さるべき眞面目な原因なき問題に鬭論が持込まれたのである。何故ならたつた今示された構成概念の限定づけられた解釋はその基礎づけの地盤がないからである。」¹

1 グーコフスキー、西ヨーロッパにおける封建主義、七頁

併し、原始社會においては階級社會一般とはその發展形態が著しく異つてゐたのは事實である。その前にまずエンゲルスが、生物界と人間社會とを相對立するところの二つの段階、二筋の「質量の結節線」としたことを指摘しよう。エンゲルスは一八八三年の「マルクス送

諸關係は生産諸關係としてはあらはれないで家族及び親族の諸關係として、血族關係として現はれ、人口増殖の爲の諸必要、例へば優勢學的顧慮とか、嫉妬心による群の分散化的傾向の排除によつて規定されると主張してゐるのだと云つた例へばクノーがさうである。¹

¹ クノー、マルクスの歴史社會國家理論、平凡社版、五一五—五一六頁、參照

併し、勿論、それはクノーが押付けんとしてゐるが如きものではない。エンゲルスは此處で單に原始社會における血族關係の持つ意義を強調せんとしてゐるに過ぎない。生産諸關係さへもが血族諸關係の「姿」で現はれねばならぬ點を指摘してゐるに過ぎない。それは既に前掲引用の個所においてエンゲルスが明瞭に述べてゐるやうに、生産諸力の未發展に歸着する。かゝる未發展においては生産諸力の諸要因として労働要具の役割は著しく僅かなものである。労働對象と労働力が甚だ大なる役割を演ずるが、特に労働力がさうである。然るにこの労働力はその自然生的性質においては血族關係としてのみ生み出される。そして一方においては技術の低級がかかる血族關係を利用しての協業を必要とし、他方においては労働力以外に殆ど何らの顯著な生産諸力の要素もないところからそれが持つ自然

生的諸關係以外において労働力をば組織する必要なく、また階級關係の如きが未だないから、かかるものによつてこれが打破されると云ふこともない。勿論既にこの段階においても決して道具や一般に生産手段が無意義なものではない。否、反對に道具の存在、正確にはその製造が始めて人間の群を動物の群から分化させたのである。併しその役割はなほ小さくて労働力の持つ自然的諸關係を打破して、道具に適應するやうな人々の組織形態をつくる必要を生まないし、その力もない。せいぜいこの自然生的な血族的諸關係を己れの要求に従つてあれやこれやに變化・適應させるだけで満足する。併しこの「適應化」は「鐵の意志」をもつて實行される。樹上から、果實をたたき落し、動物の屍體だけを求めて食つてゐる猿人と、棍棒や石斧で野獸を追ひ廻し、火食する野蠻人と、弓矢を用ひ、石斧や土掘棒での農業を行ふ野蠻人と、また森林を焼拂つてその跡に田畑をつくり、協同して鯨や象の如き大型獸をも捕へることのできる未開人と、凡べてが同一の組織形態をもつて生活することはできない。火、舊石器・投槍、新石器、弓矢、獨木舟、土器は各々己れに適應した生産諸關係を要求する。そしてこの「適應した生産諸關係」は凡べて血族的諸關係

の外部につくられずしてその内部に、この血族的諸關係の適應化としてつくり出される。生産諸關係は血族的諸關係に従屬し、その一つの側面として發達する。

家族の關係と生産諸關係とが有史前と歴史時代に互る二つの異なる段階でなく、二つの側面であること、原始時代には生産諸關係が家族の關係の側面としてたちあらはれると云ふ點についてはドイツエ、イデオロギーの次の個所にも示されてゐる。

「我々は無前提的であるドイツ人の間にあつて、一切の人間的存在の、それ故にまた一切の歴史の第一の前提を、即ち『歴史を作り』得るためには人間は生きてゆくことが出來ねばならぬといふ前提を、確認することをもつて始めなければならぬ。しかるに生きてゆくには何はさておき、食ふことと飲むことと、住ふこと、着ること、その他なほ若干のものが必要である。従つて最初の歴史的行為は、これらの欲望を満足するための手段の生産、即ち物質的生活そのものの生産である。しかもこれは人間の命だけをつなぐために、今日もなほ、數千年前と同様に、日々刻々遂行されねばならぬひとつの歴史的行為であり、日刻々充足されねばならぬ一切の歴史のひとつの根本條件である。……第二のものは、満

足された最初の欲望それ自體が、欲望満足の行動並びに既に獲得されたところの欲望満足のための道具が、新たな欲望に導くといふことである。——そして新たな欲望のこのやうな生産は、最初の歴史的行為である——第三の關係——そもそも初めから歴史的發展のうちに入込んでゐるところの——は彼等自身の生活を日々新たに作る人間が、他の人間を作り始める即ち繁殖し始めるといふ關係である。——夫と妻、親と子の間の關係、即ち家族がそれである。この家族なるものは、當初は唯一の社會的關係であるが、後になつて、欲望の増加が新しい社會諸關係を作り出し、そして人口の増加が新しい欲望を生産するに至るや、一の從屬的な關係となり（ドイツにおいては例外である）、そしてそのときには、ドイツにおいてなされるのをつねとするやうに『家族の概念』に従つてではなく、存在する經驗的な所興事實に従つて、取扱はれ、展開されねばならぬ。……尤も社會的活動のこれら三つの側面は、三つの異なる段階として把握さるべきでなく、却つてまさにただ、歴史の端初以來且つ最初の人間以來同時に存在し來り、そして今日もなほ歴史のうちに自己を主張しつつあるところの三つの側面として、或ひはドイツ人にわかるやうに書けば三つ

の『繫機』として把握さるべきである。——ところで生の生産、労働における自己自身の生の生産並びに生殖における他の人間の生の生産は、直ちに二重の關係として——一方では自然的な關係として、他方では社會的な關係として——現はれる。ここに社會的といふのは、如何なる條件のもとに、如何なる仕方において、そして如何なる目的のためにであるにせよ、多數の個人の協働が社會的として理解される場合の意味においてである。』¹

1 マルクス・エンゲルス、「ドイチェ・イデオロギー」、岩波版、五六—五九頁、(傍點引用者)

唯生産諸力の一定の發展段階に達して始めて今度は家族の關係が生産諸關係に從屬する。

「家族の關係」は一夫一婦制家族として「社會の細胞形態に過ぎないものとなる。」

第四に、經濟學批判のマルクスの主張に關聯して注意すべき點は社會經濟的構成の概念は一定の抽象化として、あらゆる國々における同一社會經濟的構成の反復性を豫想してゐると云ふ點、例へば支那の封建主義と西ヨーロッパの封建主義、またロシアの封建主義とでは相互に殆ど似てもつかない程相異してゐるが最も根本的な點においては互ひに一致してゐると云ふ點、それから第五に、(三)の社會經濟的構成は質量の結節線である、と云

ふ考へから當然出てくることであるが、それは「低い段階から高い段階へと向ふ社會の前進的な發展段階である」¹と云ふ點が、それである。

1 ミーチン、史的唯物論、自揚社版、第一分冊、九三頁

次に經濟制度と云ふ概念は何か？

レーニンは一九一八年のソヴェート同盟に「(一) 父家長的な可成りの程度に自然物的な農民經濟、(二) 小商品生産(穀物を賣る農民は大部分ここに加はる) (三) 私經營資本主義 (四) 國家資本主義 (五) 社會主義、」の五つの經濟制度を擧げてゐる。この場合そこには經濟制度と云ふ概念のもとに、私經營資本主義の如き前代の社會經濟的構成の遺物がある。また將來の萌芽を示すものもある。國家資本主義はそれだけでは如何なる歴史的構成の物質的基礎ともなり得ない。有産者社會においては國家の側からの資本の統制はその補強を意味するし、過渡期の經濟では小商品經濟及び私經營資本主義と闘争するために採用された。小商品生産は種々な社會經濟的構成に伴ひ、勿論條件の如何によつては資本主義をも生み出すが、他の條件のもとにおいては他の發展方向を採る。(例へば初

期ギリシヤ、ローマの小商品生産者)。

1 レーニン、全集第二版第二十六卷三二二頁、

以上によつてあらゆる經濟制度を社會經濟的構成にまで展開すべきもの、またその一段階、かかる社會經濟的構成の消滅後における遺制と見ることは許されないことがわかる。勿論社會經濟的構成と經濟制度の兩者はあらゆる場合において辯證法的統一をなしてゐる、併しそれ以上のものではない。そして只特定の經濟制度のみが社會經濟的構成の萌芽であり、段階であり、遺制である。併し逆もまた眞ならずと云ふことはできない。これについて例へばグーコフスキーは、「あらゆる社會構成において既に新しい支配的諸關係によつて征服された併し新しい社會構成の經濟制度として生きながらへてゐる先行の諸構成の遺物が保存されてゐる。また反對に社會構成内には社會發展の後續段階に固有な諸關係の諸要素——それもまた所與の社會構成を克服しつつあり、新しい構成の到來を準備しつつある、その社會構成の經濟制度として見るべきである、——が発見される。」と云つてゐる。ある社會經濟的構成は必ず最初先行する社會經濟的構成内の經濟制度として生れ、後に展

開して社會經濟的構成にまでなり、その後かゝる社會經濟的構成の消滅後一部分經濟殘制度としてゐる。勿論このことは機械的に採用されてはならない。例へば最終的階級社會から次への移行においてその胎内に將來の社會經濟的構成の萌芽たる經濟制度ができるなど考へることはできない。そこでは新しい社會經濟的構成に移つた後もなほ舊來の經濟制度が勢力を保存し經濟の壓倒的部分は例へば小商品生産で、將來その社會の物質的基礎たるべき經濟制度はほんの萌芽に過ぎぬやうな場合さへある。次にここで注意すべきことは社會經濟的構成は經濟制度の單なる總和もしくは單なる量的擴大ではないと云ふことである。例へばレーニンはさきに記した過渡期の五つの經濟制度において「小農民國に於て小ブルジョアの自然力性が壓倒的である。そして壓倒的ならざるを得ぬことは明らかである」²と云つてゐる。かゝる壓倒性がただちに社會經濟的構成の存在を意味するであらうか？勿論、否。尤もこの場合「壓倒性」について今少し考へてみる必要がある。小商品生産者の生産總額が九〇%で、統制經濟の生産總額が一〇%であつたとしても必ずしも前者の經濟的支配を意味せぬのは云ふまでもない。然らばかゝる「經濟的支配」さへあれば社會經

濟的構成を云々し得るであらうか？ なほそれさへ、否である。最も重要なことは政治の經濟に對する優越性でなければならぬ。そして政治をも考慮に入れて社會經濟的構成の概念は始めて完全であり得る。

1 グーコフスキー、西ヨーロッパにおける封建主義、一九頁

2 レーニン、全集、第二版、二十六卷、三二二頁、三三八頁

以上可成り長く記してきたことによつて社會經濟的構成と經濟制度とを何故區別しなければならぬか、如何に區別すべきであるか、兩者の關係は如何と云ふことがわかつたと思ふ。そこで次に奴隸所有者的構成と奴隸制度について述べてみよう。

最初に經濟制度としての奴隸制が凡べて同一ではないことを述べなければならぬ。マルクスは次のやうに云つてゐる。「それは〔本來の奴隸經濟〕……引用者〕主として自家用のためにする家長制度から世界市場のために活動する本來の植民者制度に至る一つの段階を通過する」我々は奴隸制度を次のものに區分することができる。(一)家内奴隸制(二)種族奴隸制(三)古典的奴隸制(四)植林地奴隸制。父家長的奴隸制を家内奴隸制と別個のも

のとする論者もあるが筆者はこれを採らない。問題は要するに家族内に置かれる奴隸に關するもので、その家族形態が父家長的家族であるか、それ以外のものであるかに従つて父家長的奴隸と單なる家内奴隸の區別ができるのである。かゝる段階における家族が主として父家長的家族であり、従つて家内奴隸の大部分が父家長的奴隸であることに異論はないが、それが父家長的家族であるか、單なる一夫一婦制的家族であるかに従つて家内奴隸としての奴隸の地位に變化を來すものではない。家内奴隸制を父家長的奴隸制と區別する點を、後者を筆者が此處で述べた家内奴隸制の意味に採り、前者を家庭内における下僕的奴隸とか妻妾的奴隸とか云ふ所謂「奢侈奴隸」の意味に用ひることによつて行はうとする人もあるが筆者はこれに賛しない。何故なら一夫一婦制的家族内における「父家長的奴隸」と云ふが如き用語は若干ナンセンスであるのみでなく、この「家内奴隸」の語をもつて意味せんとしてゐる家內的な「奢侈奴隸」を經濟制度の一型として筆者の所謂「家内奴隸」一般から區別することは無意義だからである。それは「家内奴隸」における使用部門の問題であるに過ぎぬ。そしてエンゲルス自身決して家内奴隸の語をかゝる狭い意味に用ひてはゐない。

まづ、父家長的奴隸制もしくは家内奴隸制から始めよう。エンゲルスはその發生を未開の中段と結びつけてゐる。彼は「蓋し當時は奴隸制もまた發明されてゐたのである。下段の未開人には奴隸は無價値であつた」と云ひ且つ次のやうに云つてゐる。

「かくして建設せられたる男子獨裁の最初の効果は當時出現しつゝあつた家長的家族と云ふ中間形態に現はれた。家長的家族の主たる特徴は一夫多妻——それは後述する——ではなく『一團の自由人及び非自由人が家長の父權の下に、一の家族に組織せられることである。セム人の形態においては、この家長は一夫多妻の生活をなし、非自由人は妻子を持つ、而して全組織の目的は一の區劃せられたる地域上で畜群の世話をするにある。』この家族に本質的なことは非自由人の同化と父權である。従つてその完成せる型はローマの家族である。ファミリアの語は本來、センチメンタリズムと家庭不和とをつなぎませたとこの今日の俗人の理想を意味するものではない。それはローマ人の間では、最初は決して夫婦とその子供を指さずして専ら奴隸を示してゐる。ファルムスとは一人の家内奴隸を云

ひ、ファミリアとは一人の男に屬する奴隸達の總體の謂ひである。ガイウス時代にもまだファミリアは相續分で、遺言によつて遺贈せられた。この言葉は一つの新しい社會有機體——その長が妻子及び一團の奴隸を全員の生殺權を含むローマ的父權の下に所有するといふ有機體——を指示するためにローマ人がつくつたのである。」

1 エンゲルス、家族私有財産國家の起源、マルクス・エンゲルス全集、第十二卷、七一六—七頁
それは家族員の助手として勞働に参加する勞働力である。エンゲルスは家内奴隸制から古典的奴隸制への發展を叙述しつゝ次のやうに云ふ。

「前の段階ではまだ發生しつゝあり且つ偶發的なものであつた奴隸制は、今や社會制度の本質的構成部分となる。奴隸は單なる助手たることを止めて彼らは幾十人となく畑でも工場でも驅使される。」¹

1 前掲書、八〇七頁

同じ思想はエンゲルスによつて自然辯證法でも述べられてゐる。

「東洋における家内奴隸制は別の問題である、即ちここにおいてはこの奴隸制は直接に

ではなく、ただ間接に、家族の成員として生産の基礎をなしてゐる。」¹

1 エンゲルス、自然辯證法、マルクス・エンゲルス全集、第十五卷、七八頁

何故それは「助手」たる位置に満足しなければならぬのであらうか？ 直接に生産の基礎になり得ないのであらうか？ それは家内奴隸制と云ふ形態そのものが奴隸制の發展の制限となるからである。父家長的家族は奴隸を收容するに最も適した家族形態である。然もなほかかる家族は奴隸の收容によつて破壊し去らぬためには奴隸の數と家族員の數とを一定比率以下に置く必要がある。そして奴隸の數が制限されてゐると云ふことは家族員を勞働から解放しない原因となる。

一般に云つて家内奴隸制は奴隸所有者的構成の基礎たり得ない。そこでは奴隸は「助手」であり、この「助手」を使用する、あるひは使用せざる「小さな農民經營及び獨立手工業經營こそ……社會の經濟的基礎をなす。」そしてそこでは「奴隸制はまだ眞剣に生産を支配しない」。¹「まだ發生しつつあり、且つ偶發的なものであつた奴隸制」、²「奴隸制が支配的生產形態たる」のとは「東洋における家内奴隸制は別の問題である」。³。そしてこ

の家内奴隸制は一定の發展段階に達した時には奴隸制の他の形態となる。主人の家から離れて設置されたラチンヂウムにおいて數十百人が群をなして勞働する奴隸制の形態は既に家内奴隸制とは異なるものである。エンゲルスも「前の段階では發生しつつあり且つ偶發的なものであつた奴隸制は今や社會制度の本質的構成部分となる。奴隸は單なる助手たることを止めて彼等は幾十人となく畑でも工場でも驅使される」⁴と云つてゐる。

1 マルクス、資本論、第一卷、新潮社版、四七二—三頁

2 エンゲルス、家族私有財産國家の起源、マルクス・エンゲルス全集、第十二卷、八〇七頁

3 エンゲルス、自然辯證法、マルクス・エンゲルス全集、第十五卷、七八頁

4 エンゲルス、家族私有財産國家の起源、マルクス・エンゲルス全集、第十二卷、八〇七頁

奴隸制の次の形態は種族奴隸制である。此處では奴隸は奴隸所有者の氏族なり、種族なり、共同體なりの共同の財産である。この形態は家内奴隸制の直接の發展として生ずるものではないが、多くの場合この家内奴隸制を持つ共同體が近隣の共同體を征服することによつて生ずる。例へばスパルタのヘロトについて云ふに「現在まで残つてゐる古典的古代のあらゆる證據によつて見るにヘロトは武器の力でラケデモンの公民たるスパルタ人の農

奴となつたのである。「我々は古代の著者のあらゆる最も權威ある立證が、ヘロトは戰場における敗者として農奴となつたのだと云ふ點で一致してゐるのを見る。既に五世紀に Gellanic はラコニアの都市の公民のヘロトのうちに、執拗な抵抗の後にスパルタによつて征服された Heloi を見てゐる。Efor, Feopomq, Pavsamy もヘロトを征服の結果の被征服者と見てゐる。」アリストテレスはその政治學でヘロトの状態をテッサリア人が征服し、己れのために土地を耕作せしめたベネストの状態と同一視してゐる。プラトンもまたヘロトをテッサリアのベネスト等に比してゐる。ストラボンは一ヘラクレアの地を占領せるミレト人は以前その地を占領せるマリアンディ人をヘロトとしたと云ふ」と語つてゐる。1 即ちスパルタのヘロトについてはマイヤーの如きの若干の異説を見るとは云へ被征服民であると云ふのに衆口が一致する。その他テッサリアのベネストが被征服民であると云ふ事は以上に引用したなかでも若干云はれてゐるが、エンゲルスも同じ見解を採つてゐる。2 勿論、ヘロトその他の二三が征服の結果による奴隸であるからと云つて凡べての種族奴隸がさうであると云ふことにはならない。實際、この問題に關聯して「特に力説しなければ

ならないことはクノー、カウツキー一派が喜んで見ようとするやうに、この『奴隸』種族をある獨立種族の形成過程にある敵對社會の征服および下層階級への轉化の結果と見る試みの正しくないことである。チュルクメン人の『民族的』語彙並びにすでに上に引用されたこれに照應するソマリ人の民族用語の分析は、ここで『氏族』および『種族』の模範に倣つて形成された新發生物、種々の起源を有する戰爭捕虜奴隸から形成されたカストを見さす。これと同様に特權的『氏族』および『種族』も、この模範に倣つて形成された、分化された、以前の氏族的種族的同盟の社會的上層である。」3と證言してゐる人もある。併し實際問題から云つて、インカ帝國の「種族奴隸」、我が古代史の「部」民等、この種のもの殆ど凡べてが征服と關聯する。そして「個々人は未だ其種族又は共同體の臍緒から斷ち切られざること、なほ個々の蜜蜂が其の巢房から分離されざるが如くであつた」4 また「私個人でなく、各家族、各種族が夫々個別的に相對する文化の初期」5 においてはつねに種族制度を維持しようとする努力が行はれるのであつて、種族内に起つて對立の如きも種族間の對立に轉化され勝ちであり、かかる方法によつて種族の分裂の時期をヨリ後に押しやる

ことが企てられる。かくて「異種族間の衝突から延いて一種族による他種族の征服が行はれる。」⁶そしてこの征服戦における捕虜が家内奴隸乃至「古典的」奴隸に、征服された土民がそのまま種族奴隸とされるのが最も自然な過程で、捕虜から土に植へつけられた種族的奴隸ができ、被征服民をまで古典的奴隸にしてう場合はそれぞれ所與の社會が特に激しく種族奴隸の形を、あるひは「古典的」奴隸の形を要求してゐる場合であらう。東洋史は前者の多くの實例を、ギリシャローマ史は後者の多くの實例を示してゐる。

- 1 V. V. スツルヴェ・ブレベイとヘロト、論集、前資本主義社會
- 2 エンゲルス・マルクス宛書簡、一八八二年、十二月二十二日
- 3 ガイムク編、東洋封建史論、九九—一〇〇頁
- 4 マルクス、資本論、第一卷、四二三頁
- 5 同書、四四八頁
- 6 同書、四四八頁

種族奴隸制の他のもう一つの重要な特徴はそれが農奴的形貌をとつてゐることである。スパルタのヘロトは多くの人々によつて農奴的なることが指摘されてゐるが、エンゲルス

もスパルタで農奴たるヘロトは別に農場に住んでゐた¹と云つてゐる。またテッサリアのベネストについては「農奴制及び隸農制と云ふことは何ら特殊の中世紀的封建的形態ではなく、征服者が其の領土の舊領民を耕作させたところではそれは殆ど至るところにあつた。例へばよほど早くからテッサリアにもあつた。是等の事實は僕及び多くの他の人々をして中世紀農奴制度と誤らしめた。人々は全く好んでそれを征服の上に基礎づけやうと欲した。」²と云つてゐる。

- 1 エンゲルス、家族私有財産國家の起源、マルクス・エンゲルス全集、第十二卷、七二一頁
- 2 エンゲルス・マルクス宛書簡、一八八二年、十二月二十二日、マルクス・エンゲルス全集、第二十卷所收、この個所の邦譯は意味が通じない。それ故ロシア語より重譯した。ちなみに云へばエンゲルスが「人々は全く好んでそれを征服の上に基礎づけようとした」と云つてゐるのに注意。凡べて以上に云はれたやうな事情にも拘らず「征服」は條件であつて、原因ではない。

種族奴隸は「種族所有が古代の諸民族において一都市のなかに數多の民族が住んでゐる時は國家的所有として現はれる」¹やうに、時として國有奴隸として現はれる。スパルタ

のヘロトがそれである。奴隷所有者種族の氏族制度が崩壊し、父家長的親族群なり、父家長的家族なりが前面にあらはればかかるものの所有物となることもある。併し注意すべきは他の奴隷形態のやうに個人の所有とはならぬことである。何故ならそれは依然としてその本來的な場合の烙印と限界とを負つてゐるからである。

1 ドイツチェ・イデオロギー、マルクス・エンゲルス全集、第十五巻、四〇八頁

最後に種族的奴隷と奴隷所有者的社會經濟構成との關係如何？ 種族奴隷はそれだけで社會經濟的構成の基礎たり得るであらうか？ 確かにスバルタのヘロト、我が古代史の「部」民などは社會經濟的構成の基礎となつてゐる。併しこれは後に述べるやうにヨリ高い奴隷制形態たる古典的奴隷制の補足物、代行物としてであり、決してその本來的なものとしてではない。本來の種族奴隷制は奴隷所有者の間における氏族制の維持をこそその前提とすると言ふ點から、また斯くの如く勞働生産力の水準の低き社會では本來的な奴隷勞働こそ最も効果的な收取形態であり、農奴的相貌を持つそれは奴隷に對する收取を可成り制限し、従つて奴隷制の貫徹を妨げると言ふ點から社會經濟的構成の基礎として見出すこ

とは困難なものである。

奴隷制の第三の形態は「古典的」奴隷制、もしくはラチフンヂウムにおける奴隷制である。「紀元前二世紀の終りにイタリアには大私有地が形成された（ラテン語でいふところのラチフンヂウム）。同じ私有地はローマの諸州に、即ちシチリア、イスパニア、北アフリカに發生した。そこでは奴隷勞働が廣く用ひられた。大私有地では奴隷は數千に上つた。彼等は部隊に區分され、時には鐵鎖をはめられて、慘酷な監督者の指揮の下に、極めて苛酷な條件の下に働くことを餘儀なくされた。しかし鑛山および石切場における奴隷の收取は特に慘酷であつた。」¹ギリシヤでは奴隷制度の最も發達した場所は工業的企業であつたが、そこでは「勞働者數五十人を超へない小さな奴隷の仕事場が支配的な型であつた。しかしヨリ大きな型の企業も屢々見受けられた。我々はギリシヤに三十人乃至四十人の奴隷が働いてゐた仕事場が存在したことを知つて居り、そして約百人の奴隷が雇はれてゐた楯製作場に關する一つの證據さへある。」²

1 コザアリョフ、古代社會の經濟、古代社會論、一〇頁

そしてこの「古典的」奴隷制の上に奴隷所有者的社會經濟的構成が樹立された。1 奴隷を生産の基礎とし、2 奴隷所有者的構成特有の政治形態を持ち、イデオロギーを繁茂させたところの。「奴隷制が始めて農業と工業との間の分業を大規模に可能ならしめ、従つてまた古代世界の精華たるギリシヤ文化を可能ならしめた。奴隷制なくしてギリシヤの國家なく、ギリシヤの藝術及び科學はない。」³

1 「古典」的奴隷制は奴隷所有者的社會經濟的構成の基礎である。併しこの場合にも經濟制度としての奴隷制と社會經濟的構成としての奴隷所有者的構成との範疇上の差別はある。「レーニン『經濟制度』と云ふ表現を屢々社會的構成の經濟的構造と云ふ意味に用ひてゐる」(ミーチン)併し社會經濟的構成が經濟的構造のみに限られる概念でないことはさきに見たとほりである。

2 ギリシヤにおける奴隷及び自由民の數についてイングラムは次のやうに云つてゐる。「ギリシヤにおける奴隷の數は、否なアテネだけについてすら正確に近い程度に決定することも殆ど不可能である。アテネウスは紀元前三〇九年のデメトリウス・ファレレウスの人口調査がアテネの人口を二一、〇〇〇の市民、一〇、〇〇〇のメチツクス、及び四〇〇、〇〇〇の奴隷と計上してゐると云

ふことをクテシクレスを根據として述べてゐる。コリントが四六〇、〇〇〇の奴隷を、又エーギナが四七〇、〇〇〇を有して居つたことも亦同じ著者の述べてゐるところである。ヒュームはその論文『古代諸國民の人口について』において、アテネに關するアテネウスの測定は全く信用がでないと云ふこと——アテネの奴隷の數は『少くとも總て憶測によつて増大されてゐるのであつて四〇、〇〇〇以上と考へらるべきではない』と云ふことを主張した。ベツクー及びルトローヌは、その後この問題に關して新たな研究題目を提供した。前者はアツチカの奴隷の數を約三六五、〇〇〇となし、後者は一〇〇、〇〇〇乃至一二〇、〇〇〇となした。ワロン氏はこれらの諸學者の勞作を訂正して彼自身の一層進んだ見解を示した。……彼は結局アツチカの奴隷人口が一八八、〇〇〇と二〇三、〇〇〇の限界内にあり、自由民が約六七、〇〇〇、メチツクスが約四〇、〇〇〇となることと云ふ結論に達してゐる。……アテネウスがコリント及びエーギナについて示した奴隷數はベツクーに依つて承認せられたが過大であるやうであり、クリントン及びワロン氏に依つては拒否されてゐる。』(イングラム、奴隷制度史、邦譯版、一七—一八頁)。エンゲルスは、アテネについて自由民九萬、無權被護民四萬五千、奴隷三十六萬と云ふ數字を(家族の起源、マルエン、十二卷、七六八頁)、コリントにおいては奴隷四十六萬、エーギナにおいては奴隷四十七萬、共に自由民人口の十倍と云ふ數字(反ヂユーリング、マルエン十二卷、三三四頁)を擧げてゐる。

ローマにおける奴隷については同じくイングラムが次の數字をあげてゐる。「ローマにおける、又はイタリーにおける奴隷の總數如何といふことは非常に困難な問題であり、恐らくは稍々正確に

近いといふ程の概數に到達することすら不可能であらう。ギボンはクラウヂウスの治世におけるローマ帝國內には少くとも自由民と同じ程の數の奴隸がゐたと想像してゐる。併しブレイアがこの數字はもつと古い時代については當つてゐるかも知れないが、その指定せる時代に關しては甚しく眞理に遠いといふ信じてゐるのは正しいやうである。彼は自由民に對する奴隸の割合を、ギリシヤ征服（前一四六年）からアレキサンドル・セヴェルスの治世（後二二三—二三五年）に至るまでの時代において一對三と決めてゐる。結局イタリーにおける奴隸の總數はクラウヂウスの時代において二〇、八三三、〇〇〇、これに對して自由民の人口は六、九四四、〇〇〇位であつたであらう（前掲書三四頁）因みに云へばローマ帝國を單位とするかローマII都市を單位とするかに従つてそれぞれ奴隸人口對自由民人口の比率の異つてくるのは勿論であるし、ローマの奴隸がギリシヤと異り、農業方面にも大規模に用ひられた、而してこれはローマ都市内では用ひられなかつたと云ふ事情を考慮せねばならぬからローマ帝國とアテネの一都市を比較するのは勿論、ローマII都市とアテネを比較することも當を得た方法ではない。

3 エンゲルス、反ヂューリング論、マルクス・エンゲルス全集、第十二卷、三五三頁

家内奴隸制と「古典的奴隸」とは直接に、種族的奴隸制は傍系的に結びついて、いづれも奴隸所有者的社會經濟的構成の基礎たる「古典的奴隸制」へ向つての上昇段階をなして

ゐる。これに對し全然別個の種類に屬するのが所謂植民地奴隸制である。植民地奴隸制は直接本論には關係ない故詳説しないが、唯、以上の如き奴隸制諸形態の特徴を明確化するために二三の指摘を行つて置く。

植民地奴隸制は資本主義的生産様式の、特に賃銀労働形態の充分に發展しない間におけるその補足物である。従つて第一に云へることは資本主義的生産様式を前提とせずしてその存在を考へることはできない。初期イギリス工業の兒童奴隸制が既にさうであるが、アメリカにおける奴隸制は全くイギリスの木綿工業に基因するものである。「木綿工業はイギリスに兒童奴隸制を移入すると同時に從來多かれ少かれ家長制的であつた合衆國の奴隸經濟を商業的收取制度に轉化する衝撃を與へた」¹とマルクスは云つてゐる。エンゲルスもまた「北アメリカ合衆國における奴隸制は暴力に依據するよりも、寧ろイギリスの木綿工業に依據してゐた」²と云つてゐる。資本主義的生産様式はそのある發展段階においてはこの奴隸制なしにはやつて行けない。「直接の奴隸制は機械、信用等のやうに現在の産業の樞軸である。奴隸制なくしては木綿なく、木綿なくしては現代の工業は存在しない。

奴隷制は殖民地に價值を與へ、殖民地は世界貿易を作り出した。そして、世界貿易は現代工業の必然的條件である。黒人貿易以前においては殖民地の舊世界に供給したところは甚だ少なく、世界の面貌を變ずるやうなことは殆んどなかつた。故に、奴隷制は最も重要な經濟的範疇である。奴隷制なくしては最も進歩した國土であるアメリカは家長的國土に變化して了ふであらう。北アメリカを世界地圖から抹殺するならば貿易と現代文明との無政府状態、突然なる没落を生ずるだらう。奴隷制を消滅せしめることは世界地圖からアメリカを抹殺することを意味する」³

1 マルクス、資本論、第一卷、第二十三章、

2 エンゲルス、反デューリング論、マルクス・エンゲルス全集、第十二卷、三三四頁

3 マルクス、一八四六年、十二月二十八日付、アンネンコフ宛書簡、マルクス・エンゲルス全集、第二十二卷、六七頁

この奴隷制は直接剩餘價值の生産を目的とするが故に「古典的」奴隷制に比してさへも驚くべき激烈な收取を伴ふ。「一つの經濟的社會構成において交換價值ではなくて、使用

價值が支配してゐる場合には剩餘労働は大なり小なりの欲望範圍によつて制限される。…それ故古代においては、過度の労働は剩餘價值をその獨立の貨幣的形態において獲得しようとするところにおいて、金銀の生産において驚くべきものがあつたのである。死ぬまで働かせる強制労働がここでは公認的形態である。…しかしこれは古代世界では例外だ。…アメリカ合衆國の南部諸州における黒人労働は生産が主として直接的自己需要を目的としてゐた間は適度に家長制的性質を保持してゐた。然るに棉花の輸出がこれらの諸州の死活的利益となるにつれて、黒人の過剩労働——ここかしこでは七年間の労働で生命を消費したものさへあつた——が計算的な體制の要因となつた。」¹

1 マルクス、資本論、第一卷、第八章、六一—二頁

かかる酷烈な收取による磨滅した労働力の補充は周知のやうに主としてアフリカ大陸からされた。ここで注意すべきことはこの奴隷源泉において奴隷制の二つの形態、奴隷所有者的社會構成におけるそれと、資本主義的社會構成におけるそれとが相互に絡みあひ、補充し合つたことである。奴隷狩において直接ニグロ土人を捕へたのは奴隷を所有する土人

Ⅱ 酋長であつた場合が多くある。1 殖民地奴隸制は労働力の安價によつて機械の發達を妨げ、また、奴隸労働によつて賃銀労働を驅逐し、結局資本主義的生産様式の一層の展開のための桎梏となる。それ故それは資本主義の發展のある段階においては廢止されねばならなかつた。

1 ラングカール、人類及び人種、二六八頁

最後に奴隸所有者的社會經濟的構成について若干述べてこの節を終らう。

奴隸所有者的構成の基礎は「古典的」奴隸制である。併しそれが家内奴隸制や種族奴隸制の形態を全然消去し去つたのではないことは云ふまでもない。イングラムは古代ギリシヤにおいて「古典的」奴隸のほか「家事管理人、食卓その他における侍従、護衛人、乳母、馬丁等の如き家庭的仕事に使用せられる」奴隸や、「料理人、笛吹等の如き私人の家庭における勞務」を果す奴隸を擧げ、「尙又公有奴隸なるものもあつた」と云つてゐる。それはコリント、シシリ島等における寺院奴隸で、半賣春婦であつた。また公共の役所にも使用され、また多數が「スキタイ人と稱せられる射手」であつた。1 古代ローマについて

も「洗濯、入浴、食卓、臺所等の如き家内僕婢の仕事に携はるもの、また舞踊、音曲その他の諸藝によつて主人及び來客の接待に當るもの、」等々のほかに官公衙、寺院、公共事業等に働く「公奴隸」を擧げてゐる。2

1 イングラム、奴隸制度史、一六一—一七頁

2 同書、三二頁

また極く特殊な場合には家内奴隸制や種族奴隸制の「上に」奴隸所有者的社會經濟的構成が可能であるかに見へることさへある。例へばスパルタにおいては種族奴隸制の一形態としての「國有」奴隸制が社會の基礎となつてゐる。併し此處で注意すべきは、スパルタの奴隸制度をアテネのそれとの相互規定において見ること、スパルタの「國有」奴隸制が本來の種族奴隸制から偏倚してゐる點を見ることである。そしてまたかかる種族奴隸制の一形態をもつて「古典的」奴隸制に代行せしめることによつて生じた特殊な奴隸所有者的社會經濟的構成の狹隘さを見ることである。スパルタはその喧傳せられる武力的強大さにも拘らず、ギリシヤ史における指導的地位をアテネに譲らねばならなかつた。そして相つ

く戦争によつてその人口を失ひ、自滅するより道がなかつた。

第四節 奴隸所有者的社會構成における階級闘争

奴隸所有者的社會經濟的構成の社會にはどんな階級があつたらうか？ マルクスはある著書で「自由民と奴隸、貴族と平民……があるひは隠然たる、あるひは公然たる闘争を行つた」と云ひ、同じ個所でまた「古代ローマにおいては我々は貴族、騎士、平民、奴隸を持つてゐる」と云つてゐる。騎士と云ふのは商工業に従事する貴族である。従つてマルクスはローマ社會の階級構成を貴族、平民、奴隸の三つと認め、ヨリ詳細にはこの貴族が農業貴族と商業貴族に分れると見てゐたことがわかる。而して貴族と平民とは相合して自由民を構成する。階級闘争は如何なる階級の間に行はれたであらうか？ 勿論これらの階級凡べての間にある。農業貴族と商業貴族間の闘争史上の最大事件としては紀元前八八一—八〇年におけるマリウスとスルラの戦争がある。商業貴族はマリウスの周圍に、農業貴族はスルラの周圍に集つた。貴族と平民との闘争史上の最大事件としてはグラッカス兄弟

の進出がある。自由民對奴隸の闘争史における最大事件としては有名なスパルタカスを首領とする奴隸叛亂がある。併しこれらの種々な闘争の間で最も根本的なものは何であつたらうか？

マルクスは「古代國家は奴隸制をその自然的基礎として持つてゐた」¹と云ひ、エンゲルスは「古代國家は何よりも先づ奴隸抑壓のための奴隸所有者の國家であつた」²と云ひ、また「ギリシヤ人と未開人、自由民と奴隸、市民と無權被護民、ローマ市民とローマ臣民（包括的な表現を用ゐれば）」とが平等な政治的力に對する要求權を持つといふが如きは、古代人には必ずや狂氣の沙汰と思はれたであらう。ローマの帝政治下においては、自由民と奴隸との差別を除くの外、すべてこれらの差別は、徐々に消滅した」³と云ひ、彼らの意見は明らかである。奴隸所有者的社會經濟的構成の基礎は奴隸である。「奴隸制度なくしてギリシヤの國家なく……ローマ帝國はない。」⁴従つて奴隸對自由民以外の階級間の凡べての階級闘争は奴隸の存在を前提として始めて可能なものであり、またギリシヤ—ローマ社會の基礎そのものを揺がすものではない。せいぜい奴隸所有者的社會を一つの形態

から他の形態に移すものであるに過ぎない。

- 1 マルクス、神聖家族、マルクス・エンゲルス全集、第一卷、六四六頁
- 2 エンゲルス、家族私有財産國家の起源、マルクス・エンゲルス全集、第十二卷、八一四頁
- 3 エンゲルス、反デューリング論、マルクス・エンゲルス全集、第十二卷、二六四頁
- 4 エンゲルス前掲書、三五三頁

併しこのことからして奴隷所有者的社會經濟的構成の唯一の階級闘争は奴隷的自由民の間の闘争であつたとか、それほどのことでもなくとも、その政治的階級闘争の大部分は奴隷對自由民の間のものであつたとか云ふならば大きな間違ひである。勿論シリヤ島における奴隷暴動とか、スパルタカスによつて指導せられる奴隷叛亂とか云ふやうにそれが政治闘争にまで至つたいくたの例があるが、普通、奴隷階級そのものの本來の性質からして闘争はそこにまで行かない。中世の農奴でさへその階級独自の見解に従つて封建領主と闘争し、自らを解放して小農民とした例はむしろ例外的であつて、その場合も宗教のための闘争の形をとつてゐる。封建領主の下層とか、ブルジョアジーとかが指導した場合にのみ闘

争は大規模に展開し、併しその果實は結局封建領主とかブルジョアジーに奪はれてゐる。奴隷は、利害の平等は持ち得ても共通性を持ち得ないこと、解放後における經濟的地盤のないこと、(農奴は配賦地の形でそれを持つてゐる)によつてその團結と闘争の政治闘争へまでも昂揚を困難化される。従つて奴隷にとつては個々の奴隷の主人への反抗と、逃亡が闘争形態として普通である。そしてプロレタリアが何時如何なる處に生活しても資本の鐵鎖を斷ち得ない、また農奴が人跡未踏の邊境地方に行くか都市において異つた生活形態をとるか以外に逃亡によつては解放され得ないのに對し、奴隷は逃亡によつて直ちに奴隷たる身分を放棄することができる。ここにまた奴隷の闘争の非政治性が條件づけられる。「奴隷は無權利で無意志で、自己を解放することは不可能であつた。既にスパルタカスの敗北が示した如く。」¹ 「奴隷制にあつては、過渡状態なくしてただ即時の個別的解放が可能である(勝ち誇れる反抗による奴隷制の廢止を奴隷は知らない)。」²

1 エンゲルス、ブルノー・パウエルと原始キリスト教、マルクス・エンゲルス全集、第十二卷、

従つて奴隷所有者社會における政治闘争の大部分はむしろ奴隷對自由民の間ではなくして、自由民中の貴族と平民との間に闘はれた。ローマが閉鎖的な特權的種族と、この種族外の、政治權利を持たぬプレブスとより成つた間は後者の政治的權利のための闘争が行はれた。その後ローマ市民と全イタリア人との間に政治的權利の水平化のための闘争が行はれた。同時に大土地所有者—奴隷所有者と自作小農民（往々家内奴隷を持つ）との間の經濟闘争が起り、それが政治闘争にまで發展した。自作小農民は敗北した。經濟的には奴隷労働との競争に、シシリ、アフリカ等からの穀物の輸入、自己の土地を不斷に離れねばならぬ戦争を原因として。政治的にはグラツカス兄弟の敗北によつて。そして彼らは土地を失ひ浮浪民となり、この浮浪民は彼等も自由民（奴隷所有者）の一員であり、奴隷の餘剰労働の分前に興る權利のあることを主張しだした。そしてローマのプロレタリアートは近代社會のプロレタリアートが社會を養つてゐるのは凡そ正反對に社會の費用によつて養はれるやうになつた。彼らはローマにおいて「パンと見世物」を要求し、ローマの貴族は

これを受入れ、それを奴隷と掠奪される屬領の肩に轉荷した。

然らば奴隷所有者的社會經濟的構成の發展は如何なる力を推進力として行はれたであらうか？ 「階級闘争としての歴史」と云ふ命題を機械的に適用してはならない。専ら奴隷對自由民の階級闘争のそれぞれの形態變化に應じて奴隷所有者的構成の各段階が規定され、最後に奴隷階級の一撃によつてローマ社會が次の社會に移行するなど云ふこと程ローマ史の事實からかけ離れて了うことはない。ローマ史は最初舊き氏族制とこの氏族制を打破せんとする奴隷制との闘争として始つた。氏族内の奴隷所有者の家族はローマ種族内の平等を破壊して貴族的家族となつた。ローマにおける奴隷所有者的種族による近隣諸種族の征服は歸するところ奴隷制擴大、舊き氏族制克服のための闘争であつた。そしてまたプレブスの閉鎖的貴族的種族に對する權利水平化のための、全イタリア人のローマ市民に對する權利水平化のための闘争は歸するところ奴隷所有者の利益のために利用せられつつある舊氏族制度の打破のための闘争であつた、そしてこの最後のものについて云ふ限りで勝利は平民側にあり、貴族と平民との間を種族的徵標によつて區別することは撤せられた。

次に奴隷を所有する大土地所有者と奴隷を所有せざる、あるひはせいぜい家内奴隷を所有するに過ぎぬ小土地所有者との闘争は、既に一旦成立してゐる奴隷制の發展史であつた。氏族制時代の平等の残存物が自由小農民として残つてゐたのであるが、これが最後の一撃を加へられつつあつた。そしてある天氣晴朗な日、ローマは大奴隷所有著たる貴族と、經濟的基礎を全然持たず、單に傭兵材料たるに過ぎぬルンペン||プロレタリアと、最後に奴隷とから構成されてゐた。奴隷の反抗の激化に驚愕したローマは傭兵を地盤とするイムペラトルの統制下にたつた。

ローマ史には赤き一線を劃して奴隷對自由民の闘争が貫いてゐる。併しその個々の發展段階を條件づけたものは必ずしも専ら奴隷の闘争ではなく、むしろ奴隷制の上にたち、且つ奴隷の闘争と絡みあつた大土地所有對小土地所有、貴族對平民の闘争であつた。

第五節　ギリシヤ——ローマ社會の没落

自然辯證法においてエンゲルスは次のやうに云つてゐる。

「奴隷制が生産の支配的形態たるところでは、労働は奴隷のすることとなり、従つて自由人にとつては不名譽なものとなる。これによつてかかる生産様式からの出口が閉されるが、一方更に一層發展した生産は、奴隷制に制限を感じ、その排除へと驅りたてられる。この矛盾に逢着するや、奴隷制を基礎とする生産、それを基礎とする國家は没落する。多くの場合、解體は先行の國家、他のヨリ強大な國家によつて強力的に征服されることによつて齎らされる。ギリシヤはマケドニヤによつて、後にローマによつて。しかしこれら自身が奴隷制の上に立つてゐる限りは、中心がただ移動したにすぎないのであつて、最後に（ローマの如く）或る國民がこれを征服して奴隷制の代りに他の生産形態を置くに至るまでは、その過程はヨリ高い段階で繰返される。だが、奴隷制が強制によつてか、自由意志的にか廢絶される場合には從來の生産様式は没落する。大農耕作の代りに、アメリカに

おけるが如き官有地租借者による割地耕作が現はれる。さう云へばギリシヤもまた奴隷制のために没落したのである。それについてはなほアリストテレスの次の言葉がある。即ち奴隷との接觸が市民を頽廢せしめたのである、と。彼は奴隷によつて市民が勞働の道を斷たれたことを度外視してゐる。」¹

¹ エンゲルス、自然辯證法、マルクス・エンゲルス全集、第十四卷、七七―七八頁

同じやうな思想はマルクス・エンゲルスの其他の二三の著書にも見出すことができる。然らば奴隷所有者的社會經濟的構成は「出口のない袋町」であるか、没落するより外に道のない社會構成であるか？ この點を考へて見なければならぬ。

奴隷の進出が奴隷所有者社會を弱め、それを没落に導いたと云ふことは何人にとつても疑ひのない事實である。ここに論争點はない。併し奴隷が奴隷所有者を倒して封建社會を生誕せしめたとなすことは全く笑止沙汰である。奴隷所有者の社會に次いで生誕せるものは奴隷もしくは解放された奴隷＝小農民の社會ではなくて封建領主の社會であつた。このことは封建制度を止揚したのも結局農奴それ自身ではなくて、それと同盟せる、そして

闘争のヘゲモニイを握れるブルジョアジイであつたと云ふ點を比照することができる。然らばブルジョアジイが都市に逃亡せる農奴の間から生れたと云ふことがある程度に云へるやうに、中世の封建領主は奴隷の間からでてきたであらうか？ 生きた具體的な歴史をひからびた類推の歴史に化さない限りそんなことは云へない筈である。我々は都市に逃亡せる農奴がブルジョアジイの先驅となつて行く経路を一步一步具體的にたどることができ、併し奴隷もしくは解放された奴隷が封建領主になるべき必然性を考へ得ない。

奴隷所有者社會を倒して次の社會を生誕せしめたものは奴隷以外になければならない。そこで自由民か？ 我々は奴隷所有者的社會經濟的構成における自由民の運命については既に見た。

そこで歸するところ矢張り奴隷所有者の間から新しい社會經濟的構成における支配者がでたと云ふことになる。此處に困難がある。奴隷所有者が奴隷所有者を變革するなど云ふことが如何にして可能であらうか？

エンゲルスはこれについて次のやうに云つてゐる。「奴隷勞働に基く大私有地經濟は最

早や儲からなかつた。……小規模栽培が再び唯一の引合ふ形態となつて了つた。莊園は續續と小分割地に分けられて、一定額を支拂ふ永代小作人又は *Partarii* に貸與せられた。後者は小作人といふよりも寧ろ管理人であつて彼等の勞働に對して年生産物の六分の一、又は實に九分の一しか受けとらなかつた。併し之等の小さい分割耕地の大部分はコロヌスに貸與せられた。コロヌスはその代りに一定の年額を支拂ひ、その土地に拘束せられてゐたし、又その分割地と共に賣られても仕方がなかつた。彼等は決して奴隸ではなかつたが、併し自由人でもなかつた。……彼等は中世的農奴の先驅者であつた。」これによつて見るに、エンゲルスはローマの田園地方においてはローマ時代の末期から在來の奴隸所有者的大領地に農奴制度が起り、それにつれて舊來の奴隸所有者の間から「農奴所有者」を分出したと見てゐたことは明らかである。只この「分出」は決してはかばかしく行はれなかつた。新しい「農奴所有者」はなほ奴隸所有者としての過去に引きづられて居り、可能なところではいつでも奴隸制度に逆戻りする。家内奴隸及び奢侈奴隸は未だその經濟に残つてゐる。新しい「農奴所有者」は都市になほ残つてゐる奴隸所有者と鬭争せんとする何ら

の決定的な意志をも持ち得ぬ。解放された奴隸及び零落した自由民は未だよい農奴にはなり得ない。凡べてかう云ふ點にローマ社會の陥つたと云ふ「出口のないヂレンマ」があつたのだ。そしてこのヂレンマをゲルマン人の征服が解決してくれた。「征服」によつて社會の發展が遂行されると云ふことは決して偶然論に力をかすものではない。ローマ社會の崩壞はローマ社會の發展の內的必然的歸結であり、これに對する「蠻族」の「征服」は外的偶然的事件ではあるが、奴隸所有者的社會が四方を取捲く「蠻族」の「海」の中にある孤島である以上、その衰退時にそれによつて「征服」されることは必然的であり、それは外的偶然性の內的必然性への轉化の一つの場合でなければならぬ。エンゲルスは云ふ。「かくしてかやうな太陽系が自己の生涯を終へ、有限的なるものの運命、即ち死に歸するとき、次にはいかになり行くであらうか？ 太陽の殘骸は永劫に殘骸のまま、無限の空間を廻轉しつづけるであらうか？……我々の宇宙系の諸太陽系となるべき灼熱せる原素材は、運動する物質に本性上内屬する運動の諸轉化によつて自然的な方法で創り出されるものであり、従つてこの轉化の諸條件はたとへ幾百萬年の後においてでなければ現はれないであ

らうとはいへ、やはり物質から多かれ少かれ偶然に、しかしながら偶然に内在する必然性をもつて再生産されねばならない。」² 尤も奴隷所有の構成のそれと太陽系のそれとはこれ以上の點では一致しない。既に見たやうに、クレタ||ミケネ——ギリシヤ——マケドニヤ——ローマと云ふ相ついでの「征服」は次第に上昇する基礎の上に行はれたのであり、最後にローマでは微弱ながら封建制への傾向があらはれてゐる。そしてこの封建制への傾向が貫徹されるためにはゲルマン人の「征服」が必要だつたのであるが、もしこの「征服」がなくとも非常に長い年月の後には封建制に移行したのではあるまいか？ 筆者は奴隷所有者的なギリシヤの上でできたビザンチン帝國のその後の歴史がこれを立證してゐるやうに思ふ。併しこの點ではビザンチン帝國の歴史への一層の接近が必要だと云ふことだけしか現在の筆者には云へない。

- 1 エンゲルス、家族私有財産國家の起源、マルクス・エンゲルス全集、第十二卷、七九五—六頁
- 2 エンゲルス、自然辯證法、岩波版、下、二六一—二八頁

第三章 古代東洋社會論 (一)

第一節 所謂「アジア的生產様式」の理論

マルクスの劃時代的名著、「經濟學批判」の序文には次の句がある。「大づかみには、アジア的、古典的・封建的及び近代ブルジョア的の生産諸様式が社會經濟的構成の前進的諸紀元として區別される。」¹ 同じ意味の章句は他の二三の著書にも見出すことができる。「經濟學批判」の序論では「かくてブルジョア經濟學もまた、ブルジョア社會の自己批判が始つた時初めて封建的、古代的及び東洋的社會の理解に到達した」² と云ひ、「資本論」第一卷では「古代アジア的、古代的等々の生産様式の下においては生産物の商品への轉化は、隨つてまた人類が商品生産者として存在することは從屬的の役割を演ずるに過ぎない。」³ と云つてゐる。

- 1 マルクス、經濟學批判の序文、マルクス・エンゲルス全集、第七卷、四一六頁
- 2 マルクス、經濟學批判の序論、マルクス・エンゲルス全集、第七卷、四〇五―六頁
- 3 資本論、第一卷、新潮社版、六五―六頁

然るにここで「古典的」封建的及び「近代ブルジョアの」の内容がそれぞれ明らかでない。ここに問題が起り、マルクスは何を指して「アジア的生産様式」と云つたかと云ふことについて多くの議論が行はれた。

斯種の主張と思はれるものは既にマルクス以前にもあつた。例へばヘーゲルは次のやうに云つてゐる。「此の抽象的な規定に従へば世界史は精神がそれ自體として存在してゐる自己の知識を獲得しようとして自己を加工してゐるその精神の表現であるといふことができる。東洋人は精神又は人間そのものがそれ自體として自由であるといふことを知らない。彼等はそれを知らないからそれ自體として自由でないのである。彼等は單に一人者が自由であるといふことを知つてゐるに過ぎない。……自由の意識はギリシヤ人の中にはじめて

現はれてきた。そして、それ故にギリシヤ人は自由であつた。だが彼等もローマ人も同様に若干の者が自由であると云ふことを知つてゐただけであつて人間が人間そのものとして自由であると云ふことは知らなかつた。……それ故にギリシヤ人は奴隷を所有し、その生活とその美しい自由の存立とを奴隷に負うてゐたばかりでなく、彼等の自由そのものも又、一方においては單なる一つの偶然的な、未完成な、一時的な、制限せられた花であつて、一方においては自由は同時に人間的なもの、人道的なもの、苛酷な隷屬であつた。ゲルマン系の諸國民に至つてはじめて、キリスト教のなかで、人間が人間そのものとして自由である。精神の自由は精神の最も獨自的な本性を成すものであると云ふ意識が獲得せられた。此の意識は先づ第一に宗教の中に、精神の最も内的な領域のなかに現はれてきた。だがこの原理を更に世俗的な存在者の中へも作り込むといふことは、その解決と遂行とに一つの困難な長い間の教養の勞作を必要とする次の課題であつた。」
古代東洋、ギリシヤ、ローマ、中世及び近代ヨーロッパの各社會の持つ諸特徴は觀念論者ヘーゲルの眼にも映ぜざるを得なかつた。そして彼はそれらの諸特徴を捉へて、自由の意識の歴史として説明しよ

うとした。人々は自由について知らなかつたから古代東洋社會が存在した。次に自由について僅かしか知らなかつたからギリシヤ||ローマ社會が生じた。自由を宗教のなかにおいてしか知らないから民主主義的なブルジョア社會はまだ生れない、等。結局、彼にあつては思想が社會をつくつてゐる。社會が思想を生むのではない。併しそれにも拘らず彼は現實彼の眼の前にある過去の社會史を特徴づける諸段階を彼の理論中に多かれ少かれ反映させることができた。ヘーゲルの觀念論的辯證法を唯物辯證法としたマルクスは科學のこの部分でもそれを直立させた。彼はギリシヤにおける「自由」をギリシヤ社會の社會經濟的構成から説明した。宗教改革の原因を當時の社會經濟的事情のなかに見た。

1. ヘーゲル、歴史哲學緒論、白揚社版、七〇—七一頁

併し此處で我々は注意しなければならない。マルクスはヘーゲルの觀念論的辯證法をそのままに直立させたのではない。ヘーゲルの辯證法に唯物論をつけ加へたのではない。辯證法は觀念論的なものから唯物論的なものとなることに依つて本質的な修正を與へられねばならなかつた。同様にマルクスはヘーゲルの世界史の發展を直立させることによつて、

その各段階をそのままに認め、且つ特徴づけたとすることはできない。最も早い話がヘーゲルにあつてはヘーゲルの生活した半封建的ドイツを反映して中世封建主義と近代ブルジョア社會との界線は曖昧であるし、後者が過去の一切の歴史に對して持つ壓倒的意義は強調されてゐない。従つてマルクスにおいてもヘーゲルにおいても、「アジア社會」が存するが、両者が同一特徴を持つものとして把握されてゐるかどうか、また歴史上占むる位置において同一意義を有するかどうかと云ふことは大きな問題である。

たしかに一見するにギリシヤ||ローマ社會に「アジア社會」なる一つの形態が先行する。これは何人も否定できぬ事實であると思ふ。ただ外見上のこの相違が科學的研究において結局二者一に歸するかどうか、例へば鼠とかうもりは結局同類目に屬すると云ふやうなことになるか否かと云ふことが問題なのである。従つて多くの人々がマルクスの「アジア的生產様式」を根本的に検討せずして、また「古代東洋社會」を具體的、科學的に解剖せずして「アジア的生產様式」なる社會段階を認めてきた。プレハーノフ然り。またローザ・ルクセンブルグの如きも既に見た如く漠然とはあるがこれを暗示するものを示して

ゐる。

結局問題がマルクスの「アジア的生産様式」並びに「東洋社会」の根本的検討を喚起するまでに沸蕩したのは東洋諸國、特に支那における政治的昂揚に基因する。

かかる昂揚に關聯して支那社会とは何であるかと云ふことが問題になつた。そしてこの地盤の上にスターリンとトロツキーの論争が行はれた。その時一部の論者は支那社会の封建性を否定するために「アジア的生産様式」を持出したのである。「私は支那の農村に存在するところの社会的諸關係の型を、非常に條件的に、それはヨーロッパの中世とは殆ど似つかないと云ふ保留を付してのみ封建主義と名付け得るにすぎぬと考へる。マルクスが名付けたやうにアジア的生産様式と名付けた方がよいと考へられるところのこの獨立的支那封建主義の遺制……。」と、かゝる一人たるとロミナツゼは云つた。この見解を一層はつきりさせたのがマジヤールである。「マルクスが列強の植民地政策が支那においてもこのアジア的生産様式の經濟的基礎を破壊したと考へてゐたことは疑ひのない事實である」と云ふのがマジヤールの主張である。同様な見解は支那のいくたの政論家の間に起つてきた。

そこで支那社会の封建性を否定するために援用され出したこの「理論」を打破するために結局マルクスの「アジア的生産様式」とは何かと云ふことを根本にまで溯つて検討する必要が起つてきた。尤も支那の近世史に關して云ふ限りこの「理論」は何ら根據なきものとして葬り去られた。支那には矢張り封建主義が存在したのだと云ふことになつた。主唱者たるマジヤール自身自説を放棄して近世支那史に封建主義を認め、ただ「非常に古い」時代における「アジア的生産様式」と近世・近代におけるそれを主張するに止まつた。

1 マジヤール、中國農村經濟研究、希望閣版、上、四頁

併し問題は依然として解決しない。一たい「アジア的生産様式」と云ふやうなものが存在するのだろうか？ もし存在する——假令、アツシリア、バビロニヤ、エジプトの昔であらうと——とすれば如何なる内容のものであらうか？ 存在しないとすれば、人々をしてそれが存在するかの如く思ひ込ませるそれらの社会の諸特徴は何に基因するのであらうか？ またそれは如何なる社会經濟的構成に歸屬するのであらうか？

そしてこの問題は日本古代史の研究に關聯して特別な意義を帯びてきた。周知のやうに

日本古代史は、一見するに、ギリシャローマ社會よりも「古代東洋社會」と通ずるものが多い。國家的土地所有、共同體的土地所有の意義、奴隸制の未發達、官人支配、そのイデオロギー形態等々。そこで問題は單に世界史及び唯物史觀一般の課題たることからこの國歴史にとつて重要なものとなつてきたのである。

第二節 マルクス・エンゲルスは如何なるものを

指して「アジア的生產様式」と云つたか？

マルクスは「アジア的生產様式」と云ふ用語は用ひたが直接その内容を明らかにしてゐない。併しこの用語に關聯すると思はれるもので、その内容に關して言及したらしいものは少からずある。そこでこれらの斷章を整理することによつて彼の主張の奈邊にあるかを明らかにしようとする企てがなされてきた。元來云ふとこの方法はそれ自身では正しくない。マルクス觀念論化の危険を多分に妊んでゐると云ひ得る。何故ならば、マルクスの語句の背後にはそれぞれ現實的諸事象がたつてゐるのであるが、マルクスの語句の研究に

終止することは兎もすればこの現實的背後を忘れ勝ちとなり、かくして綜合せられたマルクスの語句は、その個々の斷章がマルクスの眞意とはかけ離れて解されると云ふ意味において、必要な斷章が忘却され、無關係なものがまぎれ込むと云ふ意味において、また幸ひにして以上二點において大過なかつた場合においても、理論總體中におけるマルクスの個々の斷章の持つそれぞれの比重がマルクスの興へんとしたのとは異つたものとなるために理論總體の意義に變化を來すと云ふ意味において、凡そマルクスの云はんとしたところは變化したものとなつて了う。恐らく何人もマルクスの語句のみを追窮して彼と同じ道をたどることのできるものはあるまい。

而して實際問題としてマルクスの語句のみを追窮し、それをたどつたかに見へる論者と雖も、實際には多かれ少かれその語句の背後にあると思はれる諸事象を念頭に置き、この諸事象に對する自己の見解とマルクスのそれとの一致を立證せんとしてかかる方法をとつてゐるのだと云ひ得る。

併しながら「アジア的生產様式」に對する見解を述ぶるものは必ず自己の見解とマルク

スにおける「アジア的生産様式」との關聯を述ぶる義務があると云へるであらう。何故なら「アジア的生産様式」なる用語そのものがマルクスに由來するのであるから。自己の見解がマルクスのそれと一致せざる場合はそれでもよし、一致する場合は尙更である。兎も角自己の見解とマルクスのそれとの間に如何なる一致點があるか、相違點があるかが明らかにされねばならぬ。而してかかる一致點と相違點との闡明のためにはマルクス自身における「アジア的生産様式」が明らかにされねばならぬ。さきにマルクスの語句のみから彼の「アジア的生産様式」を云々することは多分に彼の眞意からかけ離れる危険を妊むと云つたが、それは「危険を妊む」のであつてかけ離れることそれ自身ではない。彼の語句が既に文字として固着されたものである以上さうどうにでも解釋できるものではない。マルクスの語句がマルクス自身から離れ去る距離には一定の限度がある。この意味において「アジア的生産様式」に關するそれぞれの意見をマルクスのそれと比較・對照することは決して無意義ではないし、また義務でもある。そして自己の主張にマルクスを切縮めんとして彼の語句を偽造し・煮直してゐる一切の人間が曝露さるべきである。彼の理論と自己

のそれとが異つてゐるならゐるでよい、堂々とそれを主張すべきである。偽造と贋造によつて「一致」を作らんとするが如きはブルジョア道徳の上からも一つの背徳行爲であり、また卑怯な態度と云はなければならぬ。

第一に「アジア的生産様式」とは原始社會であると云ふ主張がある。それに依ればマルクスの「アジア的・古典的・封建的及び近代ブルジョア的」と云ふ列記は謂はば、「前階級的、古典的、封建的及び近代ブルジョア的」と云ふ列記に置きかへてもいささかも差支へないと云ふのである。その根據は主として、列記において「アジア的」が「古典的」（奴隸所有者的）の前に位すること、マルクスの「アジア的生産様式」に關聯すると思はれる章句にインド共產體を論じたものがあると云ふことの二點である。併し單に列記において「古典的」の前に位するからと云つてそれを原始社會そのものと同一視することが正しいであらうか？ マルクスもエンゲルスも「アジア社會」における國家について述べてゐる。「アジアには古代より、政府の省として、財政即ち國內掠奪の省、戰爭即ち外國掠奪の省、最後に公共事業の省の三つのみが存在してゐた。……「文明低度にして面積空漠

に過ぎる東洋では中央集権的政府の権力干渉を必然的なものとする。」¹ 「如何に多くの専制政府がペルシヤやインドに興亡盛衰したにせよ。そのいづれの政府も自分は何は兎もあれ、流域地方における灌漑——これをしなければ其處に農業は行はれない——の總括的企業家であることを充分知りぬいてゐるのである。」² 然るにまた別な個所では次のやうに云つてゐる。「氏族制度は壽命を終つた……それは國家に依つて代られた。」³ そして以上三つの引用の上になつて考察する時、「アジア的生産様式」は前階級社會であると云ふ主張は直ちに維持できなくなる。第二の論點、マルクスは「アジア的生産様式」に關聯して「インドの原始共產體」を語つたと云ふ點について云へば、原始共同體の存在が必ずしも原始社會の存在を示さない。多くの國々で原始共同體は奴隸所有者的社會構成のもとにも、封建主義のもとにも存在した。ドイツのマルク共同體、ロシアのミール、等、いづれも封建主義のもとに見出されてゐる。他方マルクスはインドについても國家を語つてゐる。「村民（インドの……引用者）は王國の倒壞にも、分割にも少しも憂ふところがなかつた。彼等の村が打撃をうくることなくば誰の権力下に入らうが又如何なる支配者に

歸屬しようが意に介するところではない。」⁴ 「インドにおけるイギリスの支配権はいかにして達成されたか？ モグール大帝の絶大なる権力はモグールの副王により打破され、副王の権力はマハラジャにより、マハラジャのそれはアフガン人により打倒された。凡てのもの凡べてに對する戰爭が激化してゐる間にイギリス人が侵入し來り、凡べてを抑壓し得た。」⁵

- 1 マルクス、支那インド論、マルクス・エンゲルス全集、第六卷、九一頁
- 2 エンゲルス、アンチ・デューリング論、マルクス・エンゲルス全集、第十二卷、三五二頁
- 3 エンゲルス、家族私有財産國家の起源、マルクス・エンゲルス全集、第十二卷、八一二頁
- 4 マルクス、支那インド論、マルクス・エンゲルス全集、第六卷、九四頁
- 5 同書、一〇三頁

第二の主張は「アジア的生産様式とは農村共同體である」と云ふ主張である。而してこの農村共同體とは血縁關係に基いて組織された氏族共同體と異なり、既にある種の階級關係を内包し、血縁によつては結ばれざる共同體的諸關係の最後の段階をなすのである。こ

の主張に對しては「アジア的生産様式は原始社會である」と云ふ主張と同様に對することはできない。何故ならそれはとも角ある種の階級關係を内包するので、マルクスがそこで國家等々を語つてゐると云ふことは一應この説と矛盾しないからである。併し次のやうな觀點からこの説を維持することはできないと思ふ。第一に「農村共同體」なるものは如何なる獨立した社會經濟的構成でもない。社會經濟的構成の概念(第二章、第三節、參照)に照して見てその内容はあまりに狭い。それは所與の社會の生産諸關係の總和ではない。農村共同體がロシアのミールのやうに全體として封建領主の支配下にある時、この共同體外部の封建的關係はこの概念には入らない。農村共同體は社會的經濟的構成よりはるかに狭い概念であるから殆どあらゆる社會經濟的構成のもとに見出される。奴隸所有者的構成のもとにも、封建制度のもとにも。その上、實例の上から云つても農村共同體を持つ社會をそれだけで「アジア的生産様式」の社會などと云つたことはない。例へば一八〇〇年代前半のロシアにはこれがまだ生々と社會全般に存在した。「ロシアは『農業共同體』が今日まで國民的な規模で保持されてゐるところのヨーロッパの唯一の國です。」¹⁾と、マルクスはヴェラ・ザス

リツチに語つてゐる。そしてその遺制はそこに最も最近まで残つてゐた。然らば、マルクスか、エンゲルスかあるひはレーニンかがロシアにおける「アジア的生産様式」及び「アジア的生産様式」の遺制について述べたことがあるだらうか？ 斷じて否、我々はそんなものを一度も發見できない。(レーニンは農村共同體とは關係なく、土地國有については一度この語を用ひてゐるが)却つて直接、ロシアにおける封建主義及び封建主義の遺制が語られてゐる。レーニンは原始社會、奴隸制社會、農奴制社會、の繼起的發展を語つた後で「これが例へばロシア、或は今日もなほ農奴制の支配的な全く時代おくれのアジア諸國に存在してゐるところの農奴收取であつたのである。」²⁾と語つてゐる。また「二月十九日(一八六一年の農奴解放令——引用者)の法令はブルジョア的(資本主義的)生産様式による農奴制的または封建的生産様式の代置の挿話の一つである。」³⁾とも云つてゐる。たしかに後述するやうに共同體的諸關係の存在及び遺在は「アジア的生産様式」の重要な一徵標であり、條件である。共同體はその「孤立封鎖性」によつてアジア的政府と最もよく共棲し得る、併しそれは「アジア的生産様式」を存在せしむべき謂はば消極的原因であ

つて積極的なそれではない。アジアの政府、都市＝國家、等々はこの共同體のどこから生れてくると云ふのであらう。この孤立的な共同體から分出した族長達のみが孤立的でなく、集つて都市＝國家を作り、「國家的土地所有」を形成すると云ふのであらうか？ 従つて「アジア的生產様式は農村共同體である」と云ふ主張は、それ自身においても、また多少それに補強工作をほどこして、「農村共同體こそアジア的生產様式の基因である」と云つた場合においても保持できるものではない。殊に後者の場合、假にこの主張を一應是認するとしても、何故農村共同體にのみ限らねばならぬのか、解體期における氏族共同體をも含めて、「共同體の存在及び遺在こそアジア的生產様式の基因である」と云ふことができぬのか、甚だ了解できないことである。

- 1 マルクス、ウエラサスリツチ宛書簡、マルクス・エンゲルス全集、第二十一卷、四〇六頁
- 2 レーニン、新しき論文と手紙、一〇四頁（原本）
- 3 レーニン、全集、第十五卷、九三頁

そして實際、マルクスにおいても、エンゲルスにおいても農村共同體をも含めて共同體

は「アジア的生產様式」の一徵標、一條件としてより以上には語られてゐないのである。

第三に「アジア的生產様式」とは「農民の剩餘生産物の收取の一定の形態に照應するところのアジア的社會にとつて特徴的な土地所有の形態（土地の國有）である」と云ふ見解がある。たしかに土地國有、それに伴ふ租税＝地代の一致は「アジア的生產様式」と云はれるものの一徵標である。「土地所有者たると同時に、主權者として直接農民に對立するものが、もし私的の地主でなく、アジアに見られる如く國家であるとすれば、その場合には地代と租税とは一つのものとなつてくる、といふよりも寧ろ、斯かる地代形態と相異つた租税なるものは存在しなくなるのである。斯やうな事情のもとにおいては隷従關係なるものは政治上にも、經濟上にも、この國家への一切の臣屬關係に相共通するところよりも苛酷な形態を採るに及ばない。この場合には國家が最高の地主であつて、主權とは國民的規模に集積された土地所有に外ならない。が他方にまた土地の、私的並びに共同的な占有及び用益は行はれるとは云へ、土地私有なるものは何ら存在しないのである。」¹併し、「アジア的生產様式」とは封建的な土地國有であるとまで云ひ切れるであらうか？ もし

この説を受容するとすれば、「アジア的生産様式」は支那、日本におけるやうに、奴隸所有者的構成の後に、あるひは少くとも並行的に存在すると云ふことになり、マルクスの列記順序（あらゆる場合に一定な）は無意味になる。同時に「アジア的生産様式」がこれだけのものならばそれは封建主義と本質上何等異ならぬものであるが、マルクスは古代エジプト、アッシリア、バビロニア等にもこれを見たのであらうか？もしさうとすれば歴史上、封建主義は二度現はれると云ふことになる。矛盾撞着は單にこれだけに限らない。マルクスは「アジア的生産様式」に關聯して、共同體について非常に多くを語つてゐるが、それは何故だらう。單に「國家的土地所有」のみについて云へば農民が共同體に組織されてゐるか否かは一應どうでもよい問題ではないか？さらにこの理論は自分自身の、即ち「國家的土地所有」そのものの發生過程を明らかにし得ない。何故封建領主達は一都市に集團生活を營み、己れの「所領」を共有してゐるのだらうか？そこで例へば灌漑の役割が持出される。併し灌漑が大して必要なかつたり、必要あつても國家的規模でなく、地方的規模でこと足りたところ（例へば日本）にもそれが存在したのは何故であらうか？然

も同じ原因が存するのに消滅した（例へば日本）のは何故であらうか？遊牧民や外國の侵寇が擧げられる。併しこれは第一に所興の社會にとつて外的、偶然的な事情である。そして第二に、この外的偶然的な事情のない國にもかかる土地所有が存在し、同じ事情が存するにも拘らず消滅してゐる。（例へば蒙古襲來時代の日本）農民戦争が擧げられる。併し同じやうにこの農民戦争にも拘らずかかる形態の存しないいくたの場合があるし、この形態の存するところに必ずしも農民戦争は激烈ではなかつた。

1 マルクス、資本論、第三卷、新潮社版、下、四五九頁、

「アジア的生産様式」に關する最も普及した見解は大體以上の如きものである。尤もその他に「アジア的生産様式は共同體的私有である」などと云ふ論者もあるが、それは原始的共有から私有へ向つての過渡的一段階に過ぎず、且つこの「共同體的私有」からマルクス・エンゲルスが「アジア的生産様式」に關聯して述べてゐる崩壞期の共同體などを引出すことはできるが、「土地國有」、「アジア的專制政府」などを引出すことはできない。且つそれはいやしくも共有と私有の二段階の存する限り存在する世界史的普遍的な過渡的段

階であり、ギリシヤ・ローマ史にも存するものであるが、このギリシヤ・ローマ史に地代
|| 租税の一致を伴ふ「土地國有」や、「アジア的専制政府」を特に前者を見出すことがで
きるであらうか？ 従つて「アジア的生産様式」に關聯してかかるものを力説してゐるマ
ルクスが共體的私有をそれと考へたのでないことは明らかである。

然らば「アジア的生産様式」とは何であらうか。まづマルクスの引用から始めよう。

「奴隸制、農奴制及び貢納制（原始的共同體について云ふ限り）等の諸關係の下におい
て生産の所有者たり、隨つて販賣者たりしものは奴隸所有者であり、封建領主であり貢納
を受けるところの國家であつた。」¹

¹ マルクス、「資本論」、第三卷、上、新潮社版、四〇二頁

ここで「アジア的生産様式」に關して語られてゐるのかどうかと云ふことはさしあたり
どちらでもよい。併し少くとも奴隸制とも農奴制とも異なる「貢納制」なる一形態が述べら
れてゐる。而してまづ奇異に感ずることは「國家」が封建領主や奴隸所有者と並べて語ら
れてゐることである。封建領主や奴隸所有者も國家を持たなかつたか？ 勿論持つてゐる。

もしさうとすれば何故特に「國家」について語つてゐるのだらうか？ この「國家」は單
なる奴隸所有者や封建領主の國家ではない。そのことは次の引用から見られる。

「一部のにはまた、斯くの如き初期の生産様式の下においては商人の取引相手となつて
ゐる所の餘剰生産物の主要所有者たる奴隸所有者や封建領主や國家（例へば東洋の専制君
主）などが享樂的の富を代表してゐた結果である。」¹ 即ちこの「國家」の代表者は奴隸
所有者とも封建領主とも異なる「東洋の専制君主」である。

¹ マルクス資本論第三卷新潮社版、四〇八頁

次にこの「貢納制」では「共同體」が大きな役割を演じなければならぬ。マルクスは
殆ど凡べての場合にそれを共同體と關聯せしめてゐる。そのうち一つだけ引用しよう。

資本論、第一卷、第十二章でマルクスは次のやうに語る。「例へばインドにおける、か
の矮小な太古的な共同體は、一部のには今日なほ存續してゐる所であるが、それは土地の
共有と、農業及び手工業の直接的結合と、新たなる共同體の設立に方り與へられたる方案
及び設計として役立つところの固定的分業に基礎を置いてゐた。此等の共同體はいづれも

一百エーカー乃至一千エーカーの地域を占むる自足的の生産體を成して居り生産物の主要部分は共同體それ自身の直接的必要のために作られるものであつて商品として作られるものではなかつた。かくて此等の共同體における生産それ自身は、インド社會全般における商品交換に依つて媒介される所の分業からは獨立したものとなつてゐたのである。而してただ過剰の生産物のみが商品に轉化されたのであるが、それも一部分には國家の手を通して初めて行はれるといふ様であつた。インドにおいては、いつとも知れぬ古き時代から、一定量の生産物が現物地代として國家の手に流れ込むことになつてゐたのである。』¹

1 マルクス、資本論、第一卷、新潮社版、四五六頁

何故「原始共同體」は貢納制の基礎となつてゐるのであらうか？ 少くともそれと伴つて存在してゐるのであらうか？ 併し周知のやうに原始共同體はその最も本來的な場合において、たとへそれが「貢納制」であらうとも、收取の制度に伴ふものではない。氏族制時代に「戰爭は種族の破壊をもつて終結し得るが、併し決してその征服をもつては終結しない。氏族制度が支配及び隷屬を容れる何等の餘地をも持たぬことはその尊い所である

が、併しまた制限せられた所でもある。』¹ただ共同體の解體期に至つて、共同體的關係の對立物として始めて貢納制をも含む收取制度が生れてくる。此處で二點を注意すべきである。第一にこの「解體期」とは一部の人々が云ふ如く何ら「農村共同體」に限られるものではない。例へばアメリカ・インデアン中のイロクオイ人及びその四周の未開人は農村共同體でなく、氏族制度のもとに生活してゐたが、既に「貢納制」を萌芽として持つてゐた。「この領域は新たに征服したものであるから、此等諸種族が追拂はれた者に對して習慣的に結束する事は自然であつた。さうして遅くとも十五世紀の初めには正式の『永久的同盟』即ち聯盟に發達し、それはまた直ちにその新しい力の自覺のために攻撃的性質を帯ぶるに至り、その最盛期たる一六七五年頃には周圍の廣大な地域を征服して、その住民をあるひは追拂ひ、あるひは貢納せしめてゐた。イロクオイ同盟は未開の下段以上に出でざるインディアンに到達したる社會組織中最も進歩せるものを示してゐる。』²ただ農村共同體なる形が原始共同體の最終段階であると云ふ意味においてのみ、多くの場合それが「貢納制」の基礎となつてゐるのである。然もその場合にも「共同體」の研究者が多くの場合、ブル

ジョア社會學者であるため、ブルジョア科學の本來の性質上所謂「經濟史」家と「文化史」家との狹量な排他的分業が行はれ、同一種族について一方では土地共有の事實のみが、他方では氏族制度のみが、別々に切離されて報告されてゐることを念頭に置くべきである。従つて一般に農村共同體として報告されてゐるものもヨリ良く接近して觀察するならば氏族制度の少くとも遺制を非常に多く含有することを忘るべきではない。また一般に云つて農村共同體なる形態は氏族共同體から發展して出来るものであるが、歴史の正常な場合を示すものではない。最も典型且つ正常な歴史過程においては、共同體的な所有關係もまた氏族制度と共に滅び去る。例へばそれはギリシヤ史においてさうであつた。3そして歴史的過程が他の諸事情によつて攪亂されたところにおいてのみ、氏族制度の消滅後にもこの共同體的な所有關係が本來の形からは歪められた、遺在的關係として残つたのである。

1 エンゲルス、家族私有財産の家の起源、マルクス・エンゲルス全集、第十二卷、八〇三頁

2 エンゲルス、同書、七四七頁

3 エンゲルス同書、八一〇頁

第二に、「貢納制」と云ふ形態は何ら、「共有」から生れてくるものではない。従つて原始共同體からも、農村共同體からも生れてくるものではない。それはむしろ「共有」の對立物として、従つて原始共同體及び農村共同體の對立物として生れてくるものである。それは貢納を受くる共同體の内部に、階級制度——共有の對立物としての私有に基く——が多かれ少かれ生じて始めて生じ得るものである。そしてまた貢納を納付する共同體がこの貢納關係に満足してゐるとすれば、それはこの共同體の族長層のことであつて、一般共同體員に關することではない。而してこの族長層は共有に對立する私有に基いてのみ分出するものである。

併し、凡べて以上のものにも拘らず、共同體的關係は收取關係の「貢納制」なる形のもとに最もよく保存される。それは「被征服民族の在來の生産様式を存続させつつ征服者は貢物を得て満足する、」¹からである。そして共同體は「政治の表面においてあらゆる無駄な運動が行はれてゐるにも拘らず」停滯的に、「アジア諸國家の間斷なき興亡と、休止する所なき王朝轉變とに對立して」、「限界された小天地」のなかに保存されるのである。

同時に共同的關係の保存こそ「貢納制」を可能ならしめる。

1 マルクス、經濟學批判の序論、マルクス・エンゲルス全集、第七卷、三九七頁

併しその前に貢納制及び「貢納を受ける國家」について今少し研究して見よう。

マルクスは「經濟學批判」の序論の二ヶ所で貢納制を征服と結びつけてゐる。即ち「(一)生産一般」の節では「貢物で生活する征服者」¹と云ひ、「(二)分配、交換、消費に對する生産の一般關係」の節では「あらゆる征服には三通りの形が可能だ」と云つた後で「征服者は貢物を得て満足する」²と云つてゐる。エンゲルスもイロクオイ人の徴收ける貢納を征服と結びつけてゐる。³征服者は何人か？ 勿論單なる抽象的な「國家」ではあり得ない。また「東洋的君主」一人でもあり得ない。それは「國家」に組織された人々の群、そして所與の段階ではこれも「共同體」もしくは「共同體」の同盟でなければならぬ。ドイツ・エ・イデオロギーでは次のやうに云はれてゐる。「(財産の)第二の形態は古代的な、公共團體財産及び國家財産である。これは特に契約もしくは征服による數多の種族の一都市への結合から生ずるものであつて、そしてこの場合にも奴隸制は依然として繼續して存在す

る。」⁴ 此處では「國家」なる語に「都市」が置換へられてゐる。併し此意味の「都市」も「國家」と、「古代ギリシヤの都市」⁵「國家」などと云はれて相通用され、本質上共同體乃至共同體の同盟に外ならない。マルクスが「國家」⁶「都市」をこの意味に解してゐたことについては彼がベルニエの「デルヒイ或ひはアグラの如き首都全體が殆んど全く民兵隊のみによつて生活し、従つて國王がある期間戰場に赴く場合には彼に従つて行く必要に迫られると云ふこと、だからこれらの都會は、決して一つのパリーのやうなものでもなく、またそのやうなものたり得るわけでもなく、本來野原よりは幾分かよく幾分か氣持よく設備された一個の野營に過ぎぬ」⁷と云ふのを引用してそれに同意してゐるのに徴するところができる。

1 マルクス、「經濟學批判」序論、マルクス・エンゲルス全集、第七卷、三八七頁

2 同書、三九七頁

3 エンゲルス、家族私有財産國家の起源、マルクス・エンゲルス全集、第十二卷、七四七頁

4 マルクス、ドイツ・エ・イデオロギー、岩波版、一三七頁

さて前論にたち返ると、もし「貢納する共同体」が崩壊するならば、共同体内部に奴隸制や農奴制が生じ、それは多くの場合、かかる都市＝國家による共同体の征服及び貢納賦課でなしに、直接の奴隸所有者の諸關係や農奴制度を生み出すからである。

以上「貢納制」についてそれが「アジア的生産様式」と一應關係なきものとして研究してきた。併し、既述した諸點からもそれは「アジア的生産様式」であると云へるであらう。奴隸制とも農奴制とも一應異るところの、そして共同体の存在と密接に關聯するところの、然も地代は貢物として「國家」のものとなるところの、特殊な、パリーの如きとは似てもつかぬアジア的都市を持つところの、そして最後に、「アジア的政府」を持つところの「貢納制」、その諸特徴はいづれもマルクスやエンゲルスが各所で「アジア」の諸特徴として語つてゐるところに一致する。

「アジア的政府」についてなほつけ加へればマルクスは次のやうに云つてゐる。「ロシアには、あらゆる意味において、それに敵對的な、その弱點を持つところの、「農業共同体」

の一特質があります。それは、その孤立であり、一つの共同体の生活と他の共同体との間における連結の缺如であり、我々がこの型に内在する性質としてどこでもそれに遭遇するのではないが、しかも、共同体の上に多かれ少かれ中央集權的な専制主義を發生せしめてゐるところのかの限界された小天地であります」¹エンゲルスは次のやうに云つてゐる。

「古き共同体は、その存続した處にあつては、數千年來最も素朴な國家形態たる東洋的専制政府——インドからロシアに至るまで——の基礎をなしてゐる。ただこの共同体の崩壊した處においてのみ諸民族は自分みづからの舊套を脱して進歩を續けたのである。」²

1 マルクス、ヴェラザスリツチ宛書簡、マルクス・エンゲルス全集、第二十一卷、四〇七頁

2 エンゲルス、反デューリング論、マルクス・エンゲルス全集、第十二卷、三五四頁

マルクスもエンゲルスも「アジア的生産様式」の停滯性について語つてゐる。この停滯性は共同体の持つ停滯性と破壊に對する抵抗性から説明さるべきものである。「これらの自足的共同体は不斷に同一の形態をもつて再生産されるものであつて、たまたま破壊される時は同一の名稱をもつて同一の場所に再現して來るのであるが、我々は此等の共同体の

單純なる生産組織によつて、アジア諸國家の間斷なき興亡と、休止する所なき王朝轉變とに對立して、アジアの諸社會が何故かく不變的であるかの秘密を解くべき鍵を與へられる。社會の經濟的根要素の構造は政治的風雲の襲來によつて影響を受くるところはないのである。」¹ 「政治の表面においてあらゆる無駄な運動が行はれてゐるにも拘らずアジアのこの部分が停滯的な性質を持つてゐる所以を完全に説明するものは、相互に支へ合ふ次の二つの事情である。即ち一、公共施設は中央政府の仕事であると云ふこと、二、それと並んで、全國は——數個の大都市を除いては——完全に祕密的な組織を持ち、それ自體小さな一個の世界を形成してゐるところの村落（村落團體）に分れてゐると云ふこと、これである。」²

1 マルクス、資本論、第一卷、新潮社版、四五七—八頁

2 マルクス、一八五三年六月十四日付、エンゲルス宛書簡、マルクス・エンゲルス全集、四六四—五頁

「アジア的生產様式」における大規模土木事業の存在については後に述べるつもりであ

るから此處では説かぬが、一言で云へばそれは全く共同體の存在に伴ふ協業の可能、貢納制に伴ふ都市—國家の手への餘剩労働の疊積に基くものである。これによつてまたその侏儒的な、人工的な藝術が生れ、灌漑工事が可能になり、所謂、「水の」文化が生れる。これについても次章で述べるつもりであるから此處では述べない。その他エンゲルスは「アジア的生產様式」に關聯して次のやうに云つてゐる。「宗教については、問題は、何故に東洋の歴史が諸宗教の歴史と見へるか、といふ一般的な従つて容易に解答し得べき問題に歸着する。」¹

1 マルクス、一八五三年、六月二日、エンゲルス宛書簡、マルクス・エンゲルス全集、第十七卷、四五五頁

「貢納制」のもとにおいては王朝の交替は征服種族の交替である。そしてこれらの征服種族は各々己れの種族宗教を持つて居り、征服者たることによつて「己れの祭り」を他種族に強制する。かくて征服種族の交替は支配宗教の交替の歴史となる。そして征服種族の交替を既に忘却した後世においてはそれは單に「諸宗教の歴史と見へる」のである。同じ

理由によつてそれは「系譜の歴史」——相ついで支配權を獲得した諸種族の——と見へることもあるであらう。

以上においてマルクスの所謂「アジア的生産様式」とは「貢納制」に外ならないことを見た。この「貢納制」が、所謂「古代東洋社會」の實際の歴史に如何によく一致するかは、第五章における、古代東洋社會の具體的歴史を扱ふ際、及び第六章の古代支那の社會構成を研究する際に述べる。次に、この「貢納制」が社會經濟的構成として獨自なものであるか否か、もし獨自でないとするならば、如何なる社會經濟的構成に屬するかを見よう。

第三節 社會經濟的構成としての「貢納制」

「貢納制」は奴隸所有者的社會經濟的構成、農奴所有者的社會經濟的構成と異なる何らか特別な生産様式であり、社會經濟的構成であらうか？ 貢納制の特徴は「被征服民族の在來の生産様式を存続させつつ征服者は貢物を得て満足する」¹とところにありとすれば、その社會經濟的構成を論ずるに當つては征服者||共同體におけるそれと、被征服者||共同體

におけるそれとは一應別個にして考察されねばならない。而して征服者||共同體におけるそれは征服者||共同體と被征服者||共同體との相互關係において能動的な力であり、指導的な要因であると云ふ意味において、それこそ「貢納制」の社會經濟的構成を規定するものでなければならぬ。

併しその前に念のために被征服者||共同體の社會經濟的構成を見て置く。共同體が維持せられ得るがためにはたとへ奴隸制や農奴制がその内部に生じてゐるにしても、共同體を破壊する程のものであつてはならない。共同體的關係がなほ奴隸制や農奴制に對して優越してゐなければならぬ。この點から見てそれは奴隸制や農奴制に向つて一步を踏み込んでゐるが明らかに原始的共同體的社會經濟的構成の一型に屬する。

1 マルクス、經濟學批判序論、マルクス・エンゲルス全集、第七卷

問題は、併し、被征服者共同體の社會構成によつては規定されない。征服者||共同體のそれこそ問題を決する唯一の鍵である。

此處で我々は「貢納制」なる用語を若干適確化して置く必要に當面する。「經濟學批判」

の序論においてマルクスは「貢納制」の例としてトルコ族やローマ人の征服を例にあげてゐる。實際これらの國々に「貢納制」が存在した。ローマの屬領地方はローマによつて征服されたが、己れの生産様式を變更させることなく、貢物を支拂つてゐた。併しこの意味の貢納制は封建社會にとつても、資本主義社會にとつても存在する。そこで私はこれを「廣い意味の貢納制」と呼びたい。「廣い意味の貢納制」以外に「狭い意味の貢納制」があるだらうか？　ローマにおいても、トルコにおいても、島津藩と琉球國との關係においても貢納を支拂ふものは必ずしも共同體ではなく、全體として「國家」、「州」、「地方」である。然るにかかる「貢納制」とは別個に、「廣義の貢納制」の一型として貢納を支拂ふものが共同體、もしくは共同體の同盟でなければならぬ場合がある。マルクスが「貢納制」||「アジア的生產様式」を云々する場合にはつねにその基礎となつてゐる共同體を云々してゐると云ふ點から見て、我々はここで特に貢納制のかかる型を抽出し、それを「狭義の貢納制」と名付けて分析する。「廣義の貢納制」と「狭義の貢納制」との間に範疇的な段階性があるか？　たしかにある。「廣義の貢納制」においてはかかる貢納制の存在は所與

の社會の文化の質は勿論、量さへ決定しない。かかる貢納納付者の消滅はローマ社會にとつても、トルコ社會にとつても、封建的な島津藩にとつても、さらにまたアメリカ獨立戰爭前のイギリスにとつても、その社會經濟的構成の本質を變化させないばかりでなく、繁榮にとつても致命的な影響はない。たかだか若干の經濟的衰退が生じるのみである。然るに「狭義の貢納制」においては、貢納制の存在によつて征服者共同體の社會經濟的構成そのものに變化を生ずるわけではないが、その繁榮には全く致命的な變化が生じる。東洋的な王朝革命によつて征服者共同體の位置から被征服者共同體の位置に貶された共同體はその後歴史の舞臺から全く姿を沒し去つて了ふ。東洋には斯やうにして歴史の記憶から忘却されたいくたの都市||國家の廢墟がある。この意味から「狭義の貢納制」において貢納制は最も大きな役割をもつて顯然とたちあらはれる、従つて「貢納制」をこの「狭義」のものに限つて論ずることは大いに意義のあることである。

さてかかる意味での「貢納制」を生ぜしめてゐる征服者||共同體の生産様式、社會經濟的構成は如何なるものでなければならぬか？

まづ第一に云へることはそれは最も本來的な共同體的諸關係ではあり得ない。何故ならかかる共同體にとつては他種族の征服と云ふことは起つて來ないからである。かかる共同體に奴隸制度と農奴制度が多かれ少かれ生じて始めて征服と貢納賦課が生じてくる。併しこのことは通常考へられてゐるやうに原始社會が終末に達して、その後、始めて起るものではない。逆にそれは原始社會の胎内に生じてくるものである。エンゲルスは未開の下段を出でざるアメリカ・インディアンのイロクオイ人の間にこれを發見した。1 未開の中段を出でざるインカ人の間に我々はこれを見出す。そこでは、土着の農業種族を征服して貢納させ、所謂「インカ帝國」が形成されてゐた。被征服者は己れ自身の土地の外に「インカ田」及び「太陽田」を持ち、その收穫は現物税としてインカ人に納付された。畜群の一部が現物税となつた。その他、鑛山、道路・治水等の賦役や若い女の進貢が被征服者の義務であつた。2 また、エンゲルスは青銅以前の時代を原始時代として規定し、それを未開の中段となしたことは周知の如くである。然るに前アジア、エジプト、地中海沿岸のいくたの「古代」國家は全く青銅時代を出なかつた。

- 1 エンゲルス、家族私有財産國家の起源、マルクス・エンゲルス全集、第十二卷、七四七頁
- 2 ローザ・ルクセムブルグ、經濟學序論、二四五―六頁、クノー、マルクスの歴史、社會國家學說、上卷、第十一章、下卷、第三章

さらにこのことは征服者共同體の内部に必ずしも奴隸制度が形をとつて現はれてゐなければならぬものでもない。一般に「貢納制」の成立は、この制度の壓力によつて征服者共同體内の階級對立を表面化させない（發展させないのではない）場合がある。少し事情が異なるがスパルタにおいては國有奴隸制の發展によつて、少くともアテネにおけるやうには共同體内の貴族的自由民の抗争が表面化しなかつた。最初にローマ市を建設した諸種族の内部においてもさうであつた。さらにスパルタにおいては國有奴隸制の發展によつて征服者共同體内の家内奴隸制さへ退行した。逆にまた原始人の間においては民族的共同體を維持しようとする欲求が非常に強いから共同體内に階級對立が激化せんとする兆候が生じるや否やこの矛盾は可能な限り外部に押出される。交換關係の發生の如きもその原因となすべきものは勿論共同體の内部に存するのであるが、「文化の初期においては私個人でな

く、各家族、（原著者は後にこの一句を訂正した——引用者）各々がそれぞれ個別的に相対立する」が故に、各異つた「種族や共同体などの相接觸する場所に生産物交換が行はれ始める。」¹ 勿論、斯く云へばとて、共同体の内部より外部に押出された矛盾が、共同体の内部に矛盾の潜在的発展を惹起し、後に至つて一層大なる矛盾として爆發することを妨げるものではない。

1 マルクス、資本論、第一卷、新潮社版、四四八頁

「征服」と云ふ現象が非常に初期から起り得るものであることについては、前掲引用と同じ個所においてマルクスが「共同体が擴大されて其人口が増殖するに従ひ、特に異種族間の衝突から延いて一種族に依る他種族の征服が行はれる」¹と云つてゐることに徴しても明らかであらう。それは原生的分業の發生時代であり、漸く共同体相互間に交換關係の生誕しつつある時代である。

1 マルクス、資本論、第一卷、新潮社版、四四八頁

他方において「貢納制」を生起せしめる社會は——少くとも通常の場合——古典的奴隸

制」を基礎とする社會以後ではあり得ない。征服者共同体内における古典的奴隸制の發生及び發展は近隣の共同體員を征服と貢納賦課でなく、破壊と掠奪とに依つて直接の奴隸に轉化せんとする要求を生み出すものである。勿論家内奴隸制のもとにおいてもかかる傾向は多かれ少かれ認められるのであるが、そこでは家族制度そのものが奴隸の發展の制限となつてゐるので、奴隸の數を無限に擴大せんとする希望——少くとも熱望——は起らない。従つて戰敗者を凡ゆる場合に奴隸に轉化せんとするやうなことはない。種族奴隸制のもとにおいてはその農奴的相貌そのものが、むしろ戰敗者への貢納賦課の方向を採らせる。以上に依つて所謂「貢納制」の時代的範圍が限界づけられてくる。それ征服者||共同體の内部に家内奴隸制と種族奴隸制の存在する段階である。併し種族奴隸制は被征服者||共同體を貢納賦課民でなく多かれ少かれ種族奴隸化する傾向をも生ずるのでむしろ「貢納制」の解體化がもたらされる。勿論この解體化は解體する推進力が種族奴隸制の域内を出ぬ限り徹底化されはしないが。斯やうに見てくると所謂「アジア的生産様式」と云はれる「貢納制」の最も古典的な時代は征服者||共同體内に家内奴隸制の盛行する時期であると

云ふことになる。此處で始めてエンゲルスが「彼等がまだ發達した奴隸制に、古代の勞働奴隸制にも、東洋の家内奴隸制にも到達しなかつた」¹と云ひ、「東洋における家内奴隸制は別の問題である」²と云ひ、「東洋」における主要な奴隸制形態として家内奴隸制を見てゐた理由がわかつてくる。

1 エンゲルス、家族私有財産國家の起源、マルクス・エンゲルス全集、第十二卷、八〇二頁

2 エンゲルス、自然辯證法、マルクス・エンゲルス全集、第十五卷、七八頁

併し、「貢納制」を生ぜしめるものが「家内奴隸制」であり、「貢納制」は征服者の共同體內における家内奴隸制の時期に相當すると云ふ理由で「貢納制」を「家内奴隸制」一般に解消させ、包含させることができるであらうか？勿論それはあまりに亂暴な話である。家内奴隸制を伴ふ共同體は他の共同體の征服によつて「貢納制」をもたらしすこともあるし、さうでないこともある。「貢納制」の發生するか否かは單に家内奴隸制の存否のみでなく具體的歴史的條件の全總和にかかつてゐる。實際ギリシヤの家内奴隸制時代には「貢納制」は——少くとも——顯著な發展を遂げなかつた。併し東洋諸國の歴史では反對であつた。

然らば「貢納制」は家内奴隸制を起動力とすると云ふ意味で社會經濟的構成として奴隸制に屬するものであらうか？これも正しくない。一般に家内奴隸制をも含めて奴隸制の存在が直ちに社會經濟的構成としての奴隸制時代を意味しないことはさきに見た（第二章參照）。而して家内奴隸制が一般に奴隸所有者的社會經濟的構成の基礎たり得ないこともさきに見た（第二章、參照）。それはその範疇的狹隘性よりして氏族共同體的諸關係を克服し、それを驅逐し得ない。併し「貢納制」の存在と氏族制度の保存との一層必然的な聯關は、氏族制度、従つて種族内の同血意識の保存のみがよく征服者共同體內への異種族の取入・同化と、征服者共同體員の異種族地方への散住を抑止し、社會の發展を古典的奴隸制へでなく種族奴隸制乃至貢納制に向つて導くと云ふ點に見られる。従つて貢納制への移行は征服者共同體內の家内奴隸制によつて條件づけられると云ひ得るが、その貢納制の埒内への保存は征服者共同體の氏族制度によつて條件づけられると云ひ得る。そして一旦貢納制が生じると征服者共同體は被征服者への對抗の必要上その氏族制度を一層強化させる。

従つて少くとも次のことが確言される、「貢納制」のもとでは被征服者と征服者は異なる種族に屬すると云ふ意識によつて統制せられてゐる。例へばインカ「帝國」においては被征服者たるウェキユア族は征服者たるインカ人と別種族と考へられてゐた。而してインカ人は「氏族團體やマルク組合を作つて生活してゐた。インカ人の主要住所たるクスコ市は一ダース半の集團營舎の合成に外ならず、各營舎は内部に共同墓地、従つて共同の禮拜を有する全氏族の一個の共產主義的世帯の場所に外ならなかつた。そしてこれらの大きな氏族住家の周りには、不分割の林地および草地と、分割耕地——同じく共同で耕作されてゐた——とを伴へるインカ氏族のマルク領域が存してゐた。」¹ インドについてはマルクスが次のやうに云つてゐる。「回教徒とヒンツール人とが對立闘争するばかりでなく、種族と種族、カストとカストが相抗争する此國は一種の社會を呈示してゐる。」² アラビアについては次のやうに云はれてゐる。「有史以來のすべての東洋諸種族間の一般的關係それらのうちの一部分の定住と他の部分の遊牧状態の繼續とのあひだの關係が確められる。」³

1 ローザ・ルクセムブルグ、經濟學序論、二四五—六頁

2 マルクス、支那インド論、マルクス・エンゲルス全集、第六卷、一〇三頁

3 マルクス、エンゲルス宛書簡、一八五三年、六月二日、マルクス・エンゲルス全集、第十七卷

四五五頁

以上によつて「貢納制」とは氏族制時代より奴隷所有者的社會經濟構成に向つて過渡期であることと云へる。勿論それは何ら特殊な社會經濟的構成でもない。生産様式として其處に見出されるのは共同體的制度と初期の家内奴隷制との混交である。それ以外のものではない。氏族共同體的制度が全體としてなほ家内奴隷制を包んでゐると云ふ意味において、その最後の段階である。尤も以上は主として範疇的分析を通じて云はれたことであるから個々の具體的な場合に無限に多數な諸事情の組合せにおいて、「例外」があり得ないものではない。我々はこれについて第五章で古代東洋の具體的諸國の歴史を扱ふ際一言するであらう。最後に此處で次のことを一言したい。マルクスは經濟學批判の序文においてアジア的生產様式を奴隷制社會封建主義、資本主義と相並べて一見社會構成であるかの様にして記してゐる。多くの人々がこれを論據としてアジア的生產様式は一個獨立した社會構成であると

主張してゐる。併しかゝるものを理由としてかゝる主張が可能ならば、レーニン等によくその例がある様に社會構成の列記において資本主義のかはりに帝國主義を置いたり、資本主義と一旦云ひながらさらに帝國主義をつけ加へたり、資本主義の後に次の時代への過渡期を置いたりするのを理由に帝國主義、過渡期時代等を一個の社會構成であると云ひ得るであらうか？ 既に第二章で云つたやうに社會構成中の一段階たる例へば帝國主義はそのなかに資本主義のあらゆる矛盾を含有してゐると云ふ理由で資本主義に代行せしめて記し、またその矛盾を特に鋭化させてゐると云ふ理由で資本主義の後に特出することもできる、併し凡べてそれで獨自な社會構成の存在を意味せぬやうに、アジア的生產様式も獨立した社會構成ではない。

第四節 「アジア的封建制」について

我々はマルクスやエンゲルスに関する限り「アジア的生產様式」とは「貢納制」（狹義の）で、それは氏族制時代の末期に位し、奴隷所有者的構成に向つての過渡をなす、例外

的な場合——諸事情の多様な組合せのうちには最も初期的な奴隷所有者的構成をなすかも知れない。併しそれは決して獨自な社會經濟的構成ではない、と云ふことを説いてきた。

併し往々「アジア的生產様式」なる用語はこれとは別個に用ひられてゐる。マジヤールの著書、「支那農業經濟」初版に對するモスコウ支那問題研究所の批評（一九二八年七月六日）においてはそれが次のやうに定義されてゐる。「斯くしてアジア的生產様式の特種的な特徴をなすものは、共同體制度（全く閉塞的な組織を持ち、各々自給自足的小世界をなす村落共同體）——カー・マルクス）の支配ではなく、『農業と工業労働の結合』でもなくて、即ち農民の餘剰生産物の收取の一定の形態（地代——租税）に照應するところの、アジア的社會にとつて特徴的な、土地所有の形態（土地の國有）である。」¹

1 マジヤール、中國農村經濟研究、希望閣版、六頁

この定義には多くの賛同者がある。ミーチンはその「史的唯物論」において、ゴードスは「アジア的生產様式」に關するマジヤール派との論争においてこの説に傾いてゐる。而

してたしかにこれに當ると思はれるものを東洋諸國の歴史に見出すことができる。日本の奈良平安時代においては後に至つてその解體現象として生じた莊園制度を考慮に入れなければ一切土地が「國有」であり、この國有地が分割して農民に貸與された。農民はその代償として、租（稻）、庸（賦役）、調（工藝品）等の地代を納付した。貴族達（大部分奈良京都に住む）は上層のものは一定の領地を所有するが、領地の管理を地方官たる國郡司に委ね、己れはただ収入のみを受納する。貴族の下層者は國庫より現物形態をもつてする「俸給」を受けのみである。

1 拙著「日本歴史讀本」二九—七七頁參照

この形態は朝鮮にも存在した。韓國時代朝鮮の諸身分を示せば王族・懿親・兩班・中人・常民・妓生・驛卒・官婢等の七般公踐、僧侶・巫女・白丁等の八般公踐、公私奴婢であつたと云はれるが、これを階級として見れば、貴族、農奴、奴隸の三つに分たれたやうである。全鮮の土地は形式上「國有」なりとせられ、その「國有地」が狹義の意味の「國有地」と貴族の「私有地」に分たれた。國有地は種々煩瑣な區別をたてられてゐるが歸する

ところ王室の各宮に分屬するもの、中央の諸官衙に屬するもの、地方の諸官衙に屬するものに分つことができる。而して宮房及び中央諸官衙のそれは京城附近のものは官奴をもつて、地方遠隔の地にあるものはその地にある農民をして耕作せしめた。地方官衙所屬の國有地も同じく官衙附近のものは官奴をもつて、遠隔の地にあるものはその地の農民をして耕作させた。私有地は中央に居住する兩班の所有するものと地方における兩班もしくは土豪の所有するものとに分つことができるが、私有地の壓倒的部分を有する中央に居住する兩班は所有地にある農民をもつて、地方における兩班は、ある時はその土地の農民をもつて、ある時は奴婢を使用して耕作した。2 以上の土地所有形態は日韓併合後「從來の所謂私田を以てその土地に對する私有權者となし、所謂公田は之を國有地に編入した」3 ため、俄然農民は土地を奪はれ、大正十一年末の調査では總戸數三百三十五萬九千五百五十二戸中、農業戸數二百七十一萬二千四百六十五戸、そのうち小作農百十萬六千五百九十八戸、自作兼小作農九十七萬一千八百七十七戸、合計二百七十七萬八千四百七十五戸、全農家の七割六分強なる事態を惹起したのである。4 併しながらそれを歴史的に溯行すれば「アジア的

封建制」を一層純粹な形で抽出することができる。遠く三國時代は暫く置き、新羅國を建つるや文武王八年に唐制を輸入し全國の土地を凡べて「國有」とし、王族文武百官に「官僚田」一般人民に「丁田」、その他賜田・口分田・祿田の制を設け、一般人民からは租庸調を徴した。「官僚田」は免税であつて貴族達はあるひは自家の奴隸で耕作し、あるひはそれを賃貸した。此處で注意すべきは我が奈良平安時代において貴族の収入の主要部分が「收租權の賜與」たる「封戸」であつたのに對し、ここでは「田」であつたらしいことである。尤も三國史記には「神文王九年春正月教を下して、内外官の祿邑を罷め、年を逐うて租を賜ふこと差あり、以て恒式と爲す」とか、「景德王十六年内外群臣月俸を除き、復た祿邑を賜ふ」とあり、「封戸」制も行はれなかつたわけではないらしい。併し少くとも賜田の比重が大であつた、而してこれは何故であらうか？ 憶測を許さるるならば奴隸勞働の比重が我が奈良平安時代より高かつたからだと云ひたい。事實、同じ「田」と稱しながら李朝以後に貴族に給せられるものは「收租權の賜與」であつて、従つて新羅時代に貴族に與へられたものは免税地であり、人民に與へられるもの（即ち國有地）は有稅地であ

るのが、李朝時代になると國有地は免税地（勿論人民にとつては有稅地である）と稱され、貴族の土地は有稅地（貴族が國家に税を納れるわけではない）と稱される。稱呼の變化は「田」に對する觀念の變化を示してゐるやうである。さて次の高麗時代になつても土地制度に本質的變化はなかつたやうである。併しその中葉以後より、王族中央貴族による一時的賜與地の世襲化と、公田の掠取が起り、弊害百出、紀綱紊亂し、そのさ中に高麗朝は滅びて、李朝に代つた。李朝太祖は前代の紊亂を正したと云はれるが、前朝の遺臣の勢力も強かつたのであるからそれがどこまで行はれたかは疑問である。太祖の制度に依れば「科田を京畿に置き、士大夫に給し、畿外に軍田を設け、軍士の恤養に供し、各地方に在りては公務に従事するものは其の所在地附近の地を分給して其の費用に宛てた。」「その收租の様式を説明すれば田は量田に依つて整理し、丁は調籍の法を詳にされた。而して丁は土地を受けて耕作し、一結に付租三十斗の割合を以つて田主に納め、租は物納とした。故に直接耕作者と收納者の二階級を生ずるに至つた譯である。而して此の兩者は性質を異にし、直接耕作者即ち丁は耕作して租を納め、田主は國家に身を委ね田丁より收租する」るもので

あつた。成宗五年に經國大典が頒布されてその土地制度は確立したと云はれるが、同書中には既にこれよりさき、田地兼併と、賃租の事實の存したことを推せしむるものがあり、土地國有制度は單に中央においてのみでなく、その土臺たる地方においても徐々に崩壊しつつあつたのではあるまいか？ 中央貴族の國有地より掠取したる莊園はこれを收公するに比較的易い、併し地方土豪があるひは隣人の所有地を併せ、あるひは開墾によつて確立した莊園を覆すことは難い、4 後者は必然的にマノール化し、さらに一轉して武士を養ひ、遂に階統制をも持つ古典的封建制度となる將來を暗示してゐる。朝鮮史がその晩年においてこの道をとつてゐたかどうかと云ふことは非常に興味ある問題である。而してこれが解明は徒らに莊園制度による土地國有制度の解體、私有地化を叫ぶことではなくて、それが中央貴族間における所領の共有から私有への轉化に過ぎぬものか、中央貴族（地方國衙所在地の貴族をも含む）による封戸莊園の所有をも含む廣義の「土地國有制度」が、地方における共同體の崩壊に伴ひその内部に生じ、單に「公法的」領有たるのみではなく「私法的」な、あるひは「私法的」「公法的」性質を兼ね具へた莊園によつて蠶食される過程で

あるかを確定することではなければならぬ。勿論莊園制度の二つの型は相互に絡み合ひ、錯雜しその分析は容易ではないが。

- 1 猪谷善一氏、朝鮮經濟史、一六六頁
- 2 大内武次氏、李朝末期の農村、朝鮮社會經濟史研究所收
- 3 津田藏之丞氏、朝鮮における小作問題の發展、朝鮮經濟の研究三一四頁
- 4 森谷克己氏に依れば、宮室・宮家の庄土に二種あり、第一は法典上の「宮房田」に淵源するものであり、その第二は宮房が開墾・買賣・投托（地方土豪の庄園寄託）によつて成立したものである。いづれも最初は中央より庄官たる「導掌」を派して管理したが、後政府の方針によつて、前者は政府が自ら收税して庄主に給與する制度に改められ、従つて導掌も廢されたが、後者はさう行かなかつた。（森谷克己氏、舊來の朝鮮の社會經濟的構造、「社會」第四卷、第六號）。ここに拙論を裏書するかに見へるものがあるが、前掲報告には地方土豪と雖も郡衙所在地の附近に在り、「村落外より」庄土を所有したと説かれてゐる。

所謂「アジア的封建制」と云はれるものは支那にも存在した。支那の土地關係を見ると勿論土地私有が壓倒的である。然もこの私有地の可成りの部分は地主の手にある。例へば

廣東省において全耕地面積の四分の一以上は地主の手にあり、湖北省において全土地所有者の四・五九%が耕地面積の六分の一を持ち、全耕地所有者の約一〇%が耕地面積の三分の一を持ち、湖南省においては耕地の七五%が地主の手にある。陝西省中部では全土地の五〇%以上、山東省では全土地の三〇——四〇%が地主の手にある。1 それに従つて封建的な借地関係のあらゆるものを見出すことができる。併しながら全體として支那農民に蔽ひかぶさつてゐる「地租」の特別な性質を否定することはできない。それは決して近代的租税ではない。それは國家に納める地代である。ワグナーは山東省の農民について「地租を一ヘクタールの土地から八兩もしくは二十四マルク支拂つてゐる。かくて支那の農民は地租として一八六六年以前のプロシヤの農民よりも十五倍も支拂つてゐる」2 と云つてゐる。張宗昌はさらにそれを五六倍にした。軍閥は地租を年に三——五——十回も徴收し、二十年さきの分を前納させ、各種の補足的租税を課する。そして「獨立農民經濟の壓倒的な地方ではまさに租税及び徴發の増大が紅槍會その他の農民組織の運動に大なる激烈さと展開とを興へてゐる。この自然發生的運動は底知らずの租税に對する鬭争を地盤として生

じたものであり、租税の増大に應じて擴大する。」3 と言はれてゐる。

- 1 マジャーール、支那の農業經濟、白揚社版、二四二頁
- 2 前掲書、二八〇—三一頁
- 3 前掲書、二七五頁の引用による
- 4 前掲書、二七六頁

この場合地代||租税の收納者は軍閥、督軍である。支那における地租の地代的性質を見ないトロツキー派のみが督軍の封建的性質を否定し得た。併しその點を見のがさないならば督軍は封建領主であると云ふスターリンの主張は正しいものである。彼は云ふ。「同志ラデックの誤謬は封建的遺制の支配と農民の收取及び抑壓の封建的中世的方法の保存のもとにおける支那農村の商人資本の存在とのこの合生、この獨自性を理解しないところにある。軍閥、督軍、省長と云ふやうなあらゆる腐敗した、掠奪的な文武の官僚はこれらの獨自性の上層建築である。

- 1 スターリン、反對派について、五六二頁(原書)

さて現代支那の地代Ⅱ租税のこの形態も歴史的に溯行することによつて一層純粹なものを抽出することができる。遠く漢魏六朝時代は暫く置くとするも、隋唐時代には明らかに我が大寶、養老二分の模範となり、朝鮮にも輸入されたやうな制度が存在した。唐制に依れば天下の丁男十八才以上の者には田百畝を給し、其の二十畝を永業田として子孫に傳へ、その他は口分田として一代を限る。女子は若干を減じて支給される。官田を受けた丁男は年に粟二石、毎年二十日の賦役、絹その他の手工品を納付する義務を負ふ。貴族は田及び食邑を興へられたが、それは唐六典に依れば、「一曰王正一品食邑一萬戶、二曰郡王從一品食邑五千戶、三曰國公從一品食邑三千戶、四曰郡公正二品食邑二千戶、五曰縣公從二品食邑一千五百戶、六曰縣侯從三品食邑一千戶、七曰縣伯正四品食邑七百戶、八曰縣子正五品食邑五百戶、九曰縣男從五品食邑三百戶」であつた。1併しこれらの食邑所有者は語の古典的意味についての封建領主ではない。それはかゝる名目をもつて收稅權を得たに過ぎない。唐代の地方制度はこれとは別に存し、天下を十道に分ち、道の下に州、州の下に縣を置き、道には巡察使、州には刺史、縣には縣令を置いた。勿論支那は廣大であるから各

地に置かれた節度使の如きが兵權・政權・財政權を握るに及んで自立して王及び帝王と稱したやうなことがないでもなかつたが、これはまたこれで小規模ながらその下に一つの「中央集權的」封建國家を作つたのである。

1 唐六典

唐代の「アジア的封建制」はその中葉より破綻を來し始めてゐる。莊園の成立これである。尤も支那における莊園の發生は加藤繁氏に依れば既に漢代に淵源することである。1併し少くともそれが社會問題化されてきたのは唐中葉以後からである。而してこれらの莊園は「食封」の私領化したもの、従つて單に「アジア的封建制」における所領國有の私有化に過ぎぬものもあつたやうであるが、可成りの部分が賣買による兼併、開墾等によつて生じたものやうである。2従つてその内部組織も單に國有地を圍込み、そこに私領權を設定したと云ふやうなものではなく、領主の所有地に奴婢、浮浪民を集めて耕作させ、漸次それを莊園農奴化したと云ふやうなものであつた。3五代・宋の時代に入つてもこの傾向は一途に發展の道をたどつた。他方、農村内の階級分化も進み、村内に地主・自作農

(主戸)及び農奴(客戸)の別が生じつつあつたと云はれる。宋代には戸数の約三分の一が客戸であつた。4 而も土地所有者と雖宋の國家に對しては農奴であつて貨幣・現物・勞働の地代||租税を納めねばならなかつたのである。元代に入ると征服者蒙古人は廣大な地域を私領となして收税し、また漢人の土地を奪つて一部分牧場となし、一部分農奴に營作せしめた。併し江南には依然として漢人の大地主があり、數千戸の農奴と二三十萬石の地代を收めてゐるものがあつたと云はれてゐる。一般農民は依然として國家に對する農奴として租税諸義務を負担した。5 明代に入ると元代の私領は大體において廢され、祿米の支給に改まつたが莊園は益々増加の傾向をたどつた。6 清代においては征服者||滿洲人は漢人の土地を奪つて分配し、此處に皇室宗室の莊田・旗地等が生じた。前者は大體において前代の皇莊その他に當るものであるが、清朝滅亡後農民は貢税を止めてそれを私地として所有したと云ふことが報告されてゐる7 のに徴すれば少くともその一部は、「公法的」に設定された莊園であつた。旗地は清朝の軍隊を養ふために置かれた不輸租地であつた。8 清代における高利貸資本は滿人貴族及び八旗官兵のこれらの土地を忽ち蠶食して了つたと

云はれてゐる。9

1 加藤繁氏、唐宋時代の莊園の組織並びにその聚落として發達に就きて、狩野教授還曆記念支那學論叢所收

- 2 森谷克己氏、支那社會經濟史、二五九頁
- 3 加藤氏、前掲書、森谷氏前掲書、二五五—二六七頁
- 4 森谷氏、前掲書、一七三—二八四頁
- 5 森谷氏、前掲書、二九三—三〇〇頁
- 6 森谷氏、前掲書、三〇五—三一三頁、清水泰次氏、皇莊の起源とその發生、史莊第八卷、第二號
- 7 マジャール、支那農業經濟、白揚社版、二〇六頁
- 8 森谷氏、前掲書、三三七—三四六頁、マジャール前掲書、二〇五—二二一頁、サファロフ、支那社會史、三八七—三九四頁
- 9 マジャール前掲書、二〇五頁

マルクスは斯かる土地所有形態について知つてゐたか？ 明らかに知つてゐた、そして次のやうに確言してゐる。

「土地所有者たると同時に主権者として直接農民に對立するものが、若し私的の地主ではなくて、アジアに見られる如く國家であるとすれば、その場合には地代と租税とが一つのものとなつてくる。と、いふよりも寧ろ斯かる地代形態と相異つた租税なるものは存在しなくなるのである。斯やうな事情の下においては、隷従關係なるものは政治上にも經濟上にもこの國家への一切の臣屬關係に相共通する所よりも苛酷な形態を採るに及ばない。この場合には國家が最高の地主であつて主権とは國民的規模に集積された土地所有に外ならない。が、他方にまた土地の私的並びに共同的な占有及び用益は行はれるとは云へ、土地私有なるものは何等存在しないのである。」¹

1 マルクス、資本論、第三卷、下、新潮社版四五九頁

此處では封建的地代について語られてゐるのであつて、さきに述べた如き「貢納制」についてでないことは充分に明瞭である。同時に、「アジア的生產様式」とは云はれてゐないことに注意すべきである。従つてこの個所を「アジア的生產様式」に編入する義務は毛頭ない。更に内容に於てもそれは「貢納制」ではない。共同體は單に貢納でなく、全餘剩

勞働を徴收されたのであり、共同體内の生產様式は「貢納賦課」者から獨立別個なものではなくて、全くそれに從屬してゐる。共同體の諸機能の可成りの部分が既に國家の手に移されてゐる。

然らばそれは所謂「アジア的生產様式」即ち「貢納制」と無關係であるか？ 卑見をもつてすれば決して無關係ではない。所謂「アジア的封建制」は斯かる「貢納制」の既に支配的になつた封建制の體制内への殘存と解すべきものである。既に述べた如く「貢納制」は奴隸所有者的構成の未展開に制約さるるのであるが、斯かる未展開は奴隸所有者的構成の全時期を通じて共同體的土地所有を奴隸をもつて破壊せず、遂に封建制にまで殘存せしめるのである。而してこの共同體的土地所有の殘存は共同體内に農奴制を樹立せしめず、従つて共同體内の農奴制的關係から次第に階級を追うて神聖ローマ帝國の帝王に至るまでの階列を生み出せず、全體として共同體が領有され、多かれ少かれ中央集權的に統治されることになるのである。實際、「アジア的封建制」のものには共同體の遺存が特徴的である。日本 奈良平安時代においては「班田制度」が存在し、これは「保」制度と並んで著

しく共同體的色彩が濃厚であつた。但し共同體の公共的諸機能の國有化（貧者の救済↓出
學、賑給。共同倉庫↓義倉制度。土地班給↓班田制度）、それに伴つてその内容の質的反
對物への轉化、貢納賦課より純然たる地代徴收への發展を注意しなければならぬし、さ
らに大化前に「部」民制度として兎も角一應展開し得たある種の古典的奴隸制形態に1よ
つて共同體の基礎が著しく弱められ、次の奈良時代にいち早く共同體の解體化が起り、そ
れに伴つて語の古典的意味における莊園制度が起り、遂に鎌倉時代における武士政權の確
立にまで至る點が特徴的である。2

1 拙論、上代における「部」、その内容、意義及び歴史、論集、日本古代史の基礎問題所收參照

2 拙著、日本歴史讀本、奈良・平安時代二九—七七頁參照

琉球史においても縮圖的に「貢納制」から「アジア的封建制」への歴史が展開されて
る、1が、ここでは極く最近に至るまでエンゲルスの「家族私有財産國家の起源」中の氏
族制度をも想起させるやうな氏族制度の遺存形態と土地共有制度が存在した。2

1 伊波普猷氏、孤島若の琉球史、東恩納寛惇氏、舊琉球の位階制度、歴史地理、第三十一卷、一

號

2 田村浩氏、琉球共產村落の研究參照

朝鮮においてはどうか？ 此處では共同體的所有の遺存は想像以上に強いやうである。

李朝時代に一種の班田制が存したらしいがこれは勵行せられなかつた。併し部落員は共有
の未耕地、入會地を持ち、耕耘除草等を共同に行ひ、一定の耕地を共有して共同耕作し、
その収入を以て租税の支拂ひ、貧困者の救済、祭祀の費用に充て、甚しきは生産物を分配
した。大家族制の遺存強く、且つ同姓不婚の風習は確守されてゐる。

1 猪谷善一氏、朝鮮經濟史參照

支那においても同様である。勿論村落内に存する共同體的傾向は單に原始的共有の形骸
に過ぎない。それは多かれ少かれ階級分化を示し、多年に亘つて封建治下にあるうちにそ
れに適態し、むしろ封建的政治機構の一環となつて了つた。また現在では村落内の土豪劣
紳が共同體的遺物を逆用してあらゆる不正を行つてゐる。共同労働の名目をもつて村民を
「共有地」に労働させ、何らかの名目でその収益を益するなど云ふことが行はれてゐる。

然もなほ、支那には氏族制度に關聯するイデオロギイは強く、私田義莊等の親族財産が見られ、1 大家族制の遺存が甚しく、2 また各地に亘つて同姓家族集團より發達した王家屯とか、蘇家屯とか、鄭家屯とかの地名となつて残つてゐる邑落がある。そのほか、次の如き例さへある、「吳族は龐玉縣の郝各屯にゐる。この種族は五百人を有し、百個の家族より成つてゐる。これらの家族は、親族關係に従つて七個の大家族に分たれる。全種族は祖先の祠堂を有し、そこで公的事件を解決し、あらゆる祭典を舉行し、族長會議を開く。種族は數千弗の價值ある土地を所有してゐる。これらの土地は種族の大多數の人々の同意を得なければ賣却することを得ない。種族の土地は貸付けられる。土地の収入は通例種族内の窮迫せる成員を援助するために、種族の防禦のために使用せられ、また種族の祭りのために要する費用のためにも用ひられる。あらゆる公的事件は種族會議においてこれを處理し、また種族會議は地祖を集め種族の収入を處理し、種族内の紛糾を解決し、全村落の事務を管理し、學校を經營し、民團を組織し、政府に對して全種族を代表し、また道路や橋梁の修築にあたる。今では政權は民團の長官たる最も富裕な種族員の手中にある。種族員の八

〇パーセントは土地を持たない農民である。彼等は富裕な種族員の土地、或ひは種族の土地を借りてゐる。借地の條件はその他の縣に普通な債務奴隸的條件と少しも區別されるところがない。窮迫せる種族員は普通の高利貸的利息によつて富裕な種族員から金錢を借用してゐる。種族員の間にはこのために屢々武裝衝突が起つてゐる。

(B)、孔族は孔子より起つてゐる。それは八家族よりなるため、百畝の種族地と祖先の祠堂とを持つてゐる。六十五畝からの収入は犠牲を供へるため氏族の祭典及び民團の費用になる。十畝からの収入は種族員の結婚を援助するために用ひられる。他の十畝からの収入は種族内の學生を援助する(毎年一人につき二元)。他の十畝からの収入は子供が生れた際の贈物として使用せられる(各人二元)。五畝からの収入は寡婦を援助するための費用となる。種族の問題は會議によつて決せられ、會議に参加するものは六十歳以上の種族員、家長及びその種族のあらゆる紳士である。試験を受け、過去、或ひは現在において國家の職に任ぜられてゐる種族員は紳士に數へられる。富裕な種族員は高利貸的利息で貧困な種族員に金を貸付ける。

(C)、王を姓にする種族は二千人から成つてゐて三百の家族に分れてゐる、種族は祖先の祠堂を持つてゐる。種族内部でも親族的聯繫が比較的近い個々のグループは個々に祖廟を持つてゐる。約四千畝の土地が種族に屬してをり、これらの土地は全種族の同意を得なければ賣却することができない。土地は貸付けられてゐる。八百畝からの収入は次のやうに分配される——教育、學校のために二千弗、種族の祭祀のために一千三百弗、婚姻の場合の補助として十五元、小兒出生の場合の補助として一元、老人に對する扶助として八元乃至十元、葬儀の場合の扶助として四元、道路の維持のために百元、民團の維持に一千元、種族の負債の利息として一千四百弗、殘餘の土地からの収入もまた大體このやうに分配される。種族會議に参加するものは四十五歳以上の成員、過去、或ひは現在において國家の職に任ぜられてゐるもの、富裕で且つ有力な人々、及び家長等である。實際的には、權力、及び金錢の處理は二三人の富豪、及び有力な種族員の手にある。會議は殆んど何等の意義をも持つてゐない。七〇乃至八〇パーセントの種族員は一樣に土地を持たない農民であり、彼らは極めて苛酷な條件で土地を借りてゐる。高利貸制度は種族中においては常の現象で

ある。」³

- 1 清水泰次氏、支那の大家制、史學雜誌、第三十八編、第二號
- 2 同氏、支那史上の相互扶助、國民經濟雜誌、第三十一卷、第二號
- 3 マジャーナル、支那農業經濟、白揚社版、二一七—八頁

勿論、支那における共同體的土地所有の解體過程は部分的には遠く周末に始まつてゐる。そして封建治下においては共同體はその内容において反對物に轉化してゐた。併しそれにも拘らず、均田制は唐代まで支配的であつたし、共同體的關係も現在我々が此處で見るとやうな形で部分的に残存したのである。而してさきに見た如き「アジア的封建制」の解體化はこの共同體の崩解と全く歩調を一にしてゐる。

なほ支那における共同體的遺物について二三を挙げよう。

「廣東省における氏族地の意義、及び比重については、我々はポーリン及びヨールクの蒐集せる最も價值ある材料を持つてゐる。省農民協會による五十五個村の調査は、氏族地は平均して全耕地の三〇乃至四〇パーセントを占めてゐることを明らかにした。省農民組合擴大會議代表の間で作製さ

れた統計は十一縣のうちで氏族地は全耕地の四〇パーセントを占めてゐることを示してゐる。更に八十一個村について特別調査を續けた後、調査された村落の五一、八パーセントには私有が壓倒的で、三七パーセントは民族的土地所有が壓倒的で、その他の村落においては私有と氏族所有地と額が同じであることを示した。今や各種の材料に基いて、廣東省においては氏族地は全耕地の三〇—四〇パーセントを占めて居り、これらの土地は一億乃至一億五千萬弗に達するといふことを斷定し得る。」¹

同志タルハーノフは、己れの調査せる廣西省の八縣において、農民の所有は平均全耕地の二一・四パーセントを占め、地主が五二・一パーセントを占め、氏族地、及び宗教團體の土地は二〇・七パーセントを占め、國家所有が五・八パーセントを占めてゐるといふことを見出した。

福建省に關しては我々は統計的な材料を持たないが、外國領事館、農民組合、及び我々の同志の通信はすべて、この省における氏族所有地が土地關係の一般體系内においてなす役割は、廣東省より大でないとしても、少くとも同一程度であることを示してゐる。

貴州省及び、四川省における氏族地の役割と意義もまた可成り大である。然しながら我々はこれらの省に關し近似的な方向を示す材料さへ持たぬ。」

1 マジャール、支那農業經濟、白揚社版、二二五—六頁

斯やうに、支那においても、特に南方では共同體的諸關係の遺在は甚だ強い。さらに殆ど凡べての村落が共有地の附屬する村の祠堂を持ち、村内の會議、土匪に對する防禦、共同の祝祭、饗宴等のためにそれを利用してゐる。併し勿論、土豪劣紳はこの「共同」事業を自家に有利に取込んでゐる。紅槍會の如きもこの祠堂を中心として組織されることがあると云はれてゐる。¹

1 マジャール、支那の農業經濟、白揚社版二二九頁

第四章 古代東洋社會論 (二)

第一節 古代東洋社會の都市と文化

「歴史的發達のために、支那の都市は他の東洋諸國の都市と同じく、封建時代のヨーロッパとは異つた役割を演じてゐることに注意しなければならぬ。『中世においてイタリーの如く封建制が都市の例外的な發達によつて解體せられないところでは至るところ、農村が都市を政治的に収取した。他方都市は至るところで例外なしに自分の獨占價格により、自分の租稅制度により、自分のツンフト制度により、自分の直接の商業上の欺瞞及び高利貸付により、經濟的に農村を収取した。』(マルクス)。これはヨーロッパの中世紀に關する事實である。併し支那においては非常に早期の發展段階において政治權力は既に都市に屬してゐた。地主は都市に生活した。都市は地代の一部を占有した。商品經濟及び貨幣商品關

係の早期の發達によつて(?)支那はロンドン、パリ、アムステルダム、ハムブルグがまだ小さな村であつた頃に大きな都市を持つてゐる。西安・北京・杭州・廣東は非常に早い歴史時代から世界の大都市であつた。支那に於ける歴史的發達および社會組織の特殊性によつて、その都市人口は同期の發展段階にあるヨーロッパ、アメリカ、或ひはインドさへもの都市人口よりも、全人口中の比較的大なる部分をなしたと考ふべき根據がある」

I マジャール、支那農業經濟、三九一四〇頁

卑見はこの引用においてただ一句に反對である。即ち「商品經濟及び貨幣商品關係の早期の發達によつて」と云ふそれである。東洋の都市の發達は後に説くやうに他の理由によつたものであつて決して商品經濟や貨幣商品關係によつて生じたものではない。勿論、東洋において「遊牧民族は最初に貨幣形態を發展させる、蓋しすべての彼等の財産は動産的の、従つて直接に讓渡され得る形態にあるから、また彼等の生活様式は彼等を絶えず他の共同體と接觸させ、従つて生産物の交換に驅り立てるからである。」と云ふ理由によつて早くから東洋的な定期市場が、従つて都市が生じると云ふことを見ないものではない。

併し支那の都市はこれとは異り遊牧民族と農業民族との接觸點に生じたものではなく、農業民族の眞中に見られるのである。東洋諸國はその國の社會經濟的並びに地理的事情に従つて早くから商業及び商業關係の發達を見たところもあつたし、またさうでないところもある。バビロニアの如きにおいてはこの點で可成り早く、商人は組合に組織され、また大「銀行資本」の統制下にあつて盛んに國外易買を行つた。そして「バビロニア第一王朝（前二一六九—一八七〇年）治下に著しく商業資本主義化した此の社會では早くから先づ商會社の形態で發達し、王朝の變遷とは無關係に存立した。例へば既に一言したアッシリア帝國のセンナケリブ王（前六八八—六八一年）時代にバビロンのエギビ（Egibi）なる資産家の創立した同名の同族合資會社が新バビロニア王國（前六二五—五三八年）波斯帝國（前五三九—三三一年）時代迄國家の借款に應じ、ニップウルにおける新バビロニア王國時代の同族會社ムラッシュ（Murasu）商會なる大金融財團の如きがそれである」²と云はれてゐる。併し此處でも高利貸資本が商業資本を統制・締付けてゐたことに注意すべきである。然もその最盛時において周圍四十哩に達したらうと云はれるバビロン

市はかかる商業資本の盛時に先行して興つたものである。奈良・平安時代の日本の如きにおいては商業及び商人資本なるものは決して發達してゐなかつた。内國商業は行商及び定期市場を主とし、一般的價值形態（鑄貨は勿論）の定立さへ困難であり、國外商業は支那其他との朝貢の形式で行はれ、商人資本の活動でなく、國營企業であつた。即ち商人資本の獨立した發達を見なかつた。³然るに平城京の如き既に立派な大都市であつた。⁴

- 1 マルクス、資本論、第一卷、新潮社版七九頁
- 2 向井章氏、古代經濟史概説、經濟史研究、第十三卷、第二號
- 3 拙論、我が古代史における交換經濟の發展、唯物論研究、一九三六年、一、三月號參照
- 4 當時奈良の人口は十數萬であつたと推定されてゐる。然るに日本の全人口は六百萬内外であつた。（拙著、日本歴史讀本、四九頁）これを「十四—十五世紀における都市の文書によるに、ドイツ及びスイツルの大多數の都市は當時五千人に達せざる住民を有してゐた、……一萬人の人口を有する都市は既に大都市であつた。二萬人若しくはそれ以上の住民を持つ都市は例外であつた。……十四世紀のイギリスではロンドンが例外として三萬五千の人口を持つてゐた」（ボチャロフ・ヨアニシアニ、唯物史觀世界史教程、第二冊、一六六頁）と比較せよ。因みに紀元前二六〇〇年代の

ウルカギナ王時代のラガシ市の人口は三萬六千人と云はれる（井上氏、シユメルにおける奴隸制成立期の研究、社會經濟史學、第一卷第三號）が、即ちロンドンと匹敵するわけである。

支那にも早くから大都市が發達した。當時その（北魏）首都洛陽は東西二十里、南北十五里、戸數十萬九千餘を有する大都市となり（洛陽伽藍記卷五）城内には百の寺院、二千有餘の僧尼、城の四方には一千四百七十八の寺院、七萬七千二百五十八人の僧尼があり、（魏書釋老志）……と云はれてゐる。

1 秋山謙藏氏、奈良時代における國分寺創設の問題、史學雜誌第四十三卷、四號

然らば、アジアの都市は如何なる原因のもとに生れたものであつたらうか？

それは「アジア的生産様式」は「貢納制」であり、「アジア的封建制」はこの「貢納制」の遺存と封建制との絡みあひであり、閉鎖的・小宇宙的な共同體の上に蔽ひかぶさつてゐる「國家的封建主義」であると云ふさきに述べてきたところから當然引出さるべきものである。それは貢納を徵收する征服者||共同體の集團的居住地もしくは、小宇宙的な共同體を統治する「アジア的官人」||封建領主の集團的居住地であつたのだ。従つてアジアにお

いて都市の發達が非常に早くから起り、相當大なる人口を擁し、それにも拘らず封建制度の對立物たり得なかつた理由がわかる。而してアジアの都市が征服者||共同體員なり、アジア的封建領主なりの集團的居住地であつたと云ふことは都市そのものの内容からも見られる。シユメルのラガシ市については「當時都市建設において重要なものは、やはり、神殿、王城、諸臣及び衆民の居住、それを保護するための城壁、その間を通貫する道路、耕地及び牧地、灌溉と交通に資する堀割等である」と云はれてゐる。1 パビロン市は神殿と王宮とを中心とし、王族、官吏、職匠、婦女の居住地があり、續いて商賈があつた。2 「洛陽伽藍記」によれば北魏の首都洛陽を大ならしめたものの一半は千餘に達する寺院であり、魏書に依れば人口十萬の洛陽の擁する僧尼の數は何と驚く勿れ、七萬七千餘人であつた。イブン・バツータは支那の「都市の中心に城塞があり、それは非常に大なるもので、中心に政府の宮殿があつた。城塞が政府の宮殿を取捲き、それがさらに工場に取捲かれてゐる。この工場では労働者達が優秀な衣服・武器軍需品をつくつて働いてゐる。……凡べて彼らは汗の奴隸である、」と云つてゐる。3

- 1 井上芳郎氏、シユメルにおける奴隸制成立期の研究、社會經濟史學、第三卷、第一號
- 2 井上芳郎氏、古代バビロンの階級制度と其崩壞的經路

3 Ibbn Bahuta's Travels in Bengal and China (1325—1344—1349) サフアローフ、支那社會史所引に據る。

アジアの都市のこの性質をマルクスは認めてゐたか？ 勿論認めてゐる。彼はエンゲルスに宛てて次のやうに云つてゐる。

「東洋諸都市の形成については我々は老フランソア・ベルニエの『モガル大帝その他の國家の記述を含める旅行記』より以上に立派な明確なそして適切なものを認めることはできない。彼はまた軍事制度、この大軍が養はれた状況などを見事に説明してゐる。彼は就中この二つについて下の如く述べてゐる。『騎兵隊が大部分を構成してゐる、若し軍隊について行く従僕や市場の人々や商人などを凡べて本來の戦闘員と混同しないならば、歩兵隊は噂ほどに大きなものではない。何となればこの場合においては、私は確かに——例へば國王が長く首都を離れることが確實であるやうな場合には、——これらのものが國王に

従ふ軍隊だけのほかに、どうしても二十萬人、三十萬人、そして往々それ以上も加はつてゐるだらう、と信ずるからである。このことは、この軍隊が非常に多くの天幕や衣服や什器や往々にして婦人達さへも、従つてまた象や駱駝や牛や馬や荷擔夫や賄方や酒保商人やあらゆる種類の商賣人や従僕などを引具して行くことを知つてゐるものにとつては、そしてこの國獨特の狀態と施設、即ち國王が王國內のすべての土地の單獨唯一の所有者であるといふこと、その結果一定の必然的歸結として、デルヒイあるひはアグラの如き首都全體が殆ど全く民兵隊のみによつて生活し、従つて國王がある期間戰場に赴く場合には彼に從つて行く必要に迫られるといふこと、だからこれらの都會は、決して一つのパリーのやうなものたり得るわけでもなく本來野ツ原よりは幾分かよく、幾分か氣持よく設備された一個の野營に過ぎぬ、と云ふことを知つてゐるものにとつてはさほど驚異とは考へられないであらう』¹

1 マルクス、エンゲルス宛書簡、一八九三年、六月二日、マルクス・エンゲルス全集、第十七卷、四五五—六頁

またリチャード・ジョーンスの「農民の収入を除いた後に残る兎に角相當なる分量の唯一の収入である土地からの剰餘収入は國家及びその役人によつて分配せられる。(之はアジアにおいて、特にインドにおいて然るのである)。首都は必然的に分配の主要中心であつた」、「サマルカンドから南の方ビージアプール及びセリンガバタムに至る間に我々は消失した首都の跡を辿ることが出来る。それは皇室の収入の即ち土地の總剰餘収入の分配中心地が新しく建設せらるるや否や人民が直ちにその土地を捨てて去つて了つた首都の廢墟なのである。」と云ふのを引用し、「インドの都市を野營と比較したベルニエ博士を参照せよ、之はそれ故、アジアに於ける土地所有の形態の上に基礎をおいて居る。」¹⁾と云つてゐる。

1 マルクス、剰餘價值學說史、マルクス・エンゲルス全集、第十一卷、四九五—六頁

實際、アジアの都市は征服者—共同體員の集團的居住地であり、アジア的封建領主—「アジア的官人」の政治的中心地であるから、かかるものでなくなると忽ち歴史の大海中に没し去つて人々の記憶からも忘却されて了ふ。そして後人はその遺跡の前にたつて曾て

此の世にあつた巨人の建設した都市といふやうな傳説の美に打たれるのみである。マックス・ウェバーはその經濟史において「國家は最も容易に外見上さうであるらしく見へてゐた高度な且つ富裕な文化の發達した状態から純粹な自然經濟の状態に墜落するのを常とした」と云つてゐる。既に資本主義の侵入時代に至つてさへも支那の諸都市は部分的にかかゝるアジア的都市の性質を帯びてゐた。支那最近における北平・西安(百萬の人口が十萬に減じた)、蘭州の人口喪失は一部分交通路の變化にも依るであらうが主たる理由は「アジア的都市」としての資格の喪失である。

アジアの都市の以上の如き性質に照して見るならばそれが何故資本主義の生誕の坩堝とならなかつたかも直ちに明らかとなる。一般に都市が資本主義の先驅者となるのではない。都市の内部における資本主義的生産様式の萌芽がさうなるのである。都市——資本主義の生誕時代の——は、かかる資本主義的生産様式の萌芽、手工業、家内工業、マニユフェクチュアの温床ともなるがまたその發展によつて始めて生じてくるものでもある。多くの場合かかる都市が先行の時代における政治・商業・交通上の中心地たる都市を利用して生じ

てくると云ふのは事實である。併し都市の凡べてがかかる早期資本主義的要素の上になつた都市でもなければ、またかかる手工場やマニユフェクチュアが必ずしも都市のなかになければならぬものでもない。手工場やマニユフェクチュアは農村に散在し、これが近世資本主義の先驅となる場合さへある。アジア的都市に近代資本主義の先驅となつたやうな手工場やマニユフェクチュアが存在したか？ 確かに手工場は存在した、併しそれは支配的な奴隷労働との競争に打克ち得ずしていつでも没落を運命づけられてゐた。バビロニアの手工業者の實際賃銀はハムラビ法典の公定賃銀より、「低廉で、甚しいのになると十分の一、十二分の一に當る場合さへあり、……しかも此低廉な勞賃で尙傭主を得られなかつた、といふのは大商人、大農の下には無賃の奴隷が居た」¹からであつた。そして「アジア的生産様式」²「貢納制」が「アジア的封建制」に移行し、そこに尙ほ殘存してゐる經濟制度としての奴隷制を止揚させた後、始めてかかる手工場はマニユフェクチュアにまで發展する道を開かれた。然もなほ共同體の遺存、農業と家内工業との結合が、かかる手工場のために市場を約束せず、それは封建領主の氣まぐれな奢侈と軍事的要求に依存せねばならず、

また一層氣まぐれな國外市場に左右されざるを得なかつた。斯くて支那においては若干の手工業部門のマニユフェクチュア化が確かに起つたが、それは國外市場の消滅と同時に跡形もなく消滅するやうな場合もあつて、結局、西ヨーロッパにおけるやうに速やかに、且つ鞏固に資本主義を育成しなかつたのである。従つてマニユフェクチュアについて云へば通常「アジア的都市」にはマニユフェクチュアはない。往々マニユフェクチュアと混同される大規模工業はアジア的領主、私人の邸宅における奴隷的大企業に過ぎない。

1 井上芳耶氏、古代バビロンの階級制度とその崩壊経路、思想、第百十二號

因みに「アジア的封建制」は決して封建制として「若い」のではない。それは封建制が、共同體、奴隷制等の遺存と絡みあつてゐるが故に特殊な姿をとつてゐると云ふより以上のものではない。それは共同體や奴隷制等の遺存にも拘らず、そしてその抑止的運動にも拘らず、封建制として徐々に成熟して行くのである。然もなほ共同體や奴隷制の遺存が資本主義的生産様式の生誕を困難化し、社會を低迷と混亂に陥れる。

「アジア的都市」の以上の如き性質がまたその文化をも特徴づける。都市は四方から貢